
とある科学の事件体質（トラブルメーカー）

スザク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の事件体質^{トラブルメーカー}

【Nコード】

N9290L

【作者名】

スザク

【あらすじ】

こちらは一ヶ月の猶予を持って削除します。

削除日は2月21日前後となる予定です。

追記

予定でしたが、コメントを消したくなかった・一話単位での削除が不可能の2点から残す事にします。ただし、今後一切の更新はありません。

七月十六日（前書き）

arcadiaの方で更新ができなくなったのでこちらでアップしました。

一応、arcadiaの方で更新が再開できたらarcadiaでも更新します。

七月十六日

「不幸だ…………不幸すぎるー!!」

「なんて叫ぶのはいつものように上条だと思ったただろう？残念でした、俺は綾峰あやみね 唯鷹ゆたかそこら辺にいる高校生だ」

「うるせー！テメエ、静かにしてろってのが聞こえねえのか！」

「はい！すいませんでした!!」

拳銃を突きつけて銀行強盗犯が綾峰を黙らせる。

綾峰はごくフツウの高校生だ。

1日1回は何かの事件に巻き込まれる、この事件体質トラブルメーカーでなければ。

とある科学の事件体質トラブルメーカー 第1話

銀行の名前は「いそべ銀行」。
学園都市にある銀行の1つで、綾峰は月に1回ここに金を下ろしにくる。

今日もいつも通りに通帳からなけなしの金を下ろして、綾峰はため息を残して銀行から出ようとしたり。
そこに突然、中から爆発音が響いた。

「っ!?!」

「テメエら動くなあ!!」

驚いて振り向いた綾峰の目の前で黒いジャンパーとジーンズをはいた身長180cmは軽く超える大柄で太った男が女の子を掴み顔に手を押し当てていた。

顔には白いハンカチが覆われており、どう見ても銀行強盗だった。回りをみると揃いの白いハンカチと服装に扮した白髪の小柄な男と中肉中背の男が警備員達を気絶させていた。

「この場にいる全員、その場に座れ!」

中肉中背の男が客たちに手から炎を出してみせながら命令した。

「いいか、お前らが少しでも許可なく動いたら、このガキの顔が二度と人様に見られないようになるからな!!」

小柄な男がそう言って、大柄な男は左手で女の子の体を抱いて右手で炎を出して見せる。

「いやーーーー!!」

「黙れつつつてんだろ。燃すぞこらあ！」

女の子が恐怖のあまり叫び出すがすぐに犯人の1人に脅されて泣きやむ。

3人はその手から出した炎をちらつかせて回りの客や銀行員達を脅していく。

恐怖で青ざめた客たちは強盗達の命令に従ってその場に座り込んだ。綾峰は女の子を助けたかったが、ああやってあからさまに脅されては動けない。

綾峰も他の客と同様に静かにその場で座り込んだ。

銀行強盗達のうち2人が客たちを見張りながら、1人が金を袋に詰めさせている。

座りながら綾峰は最近後輩のオセロ（綾峰命名）に聞いた話にあった「連続発火強盗」の一味なんだろう、と推測する。

見張り2人の視線が外れた瞬間を狙って綾峰は目を閉じると意識を集中し始めた。

『能力解析《AIMリーダー》』発動。

瞬間、世界の色が反転する。

綾峰のまぶたに映るように強盗犯達の姿が見えてくる。

しかしその姿はオーラに包まれたように赤く変色していた。

（このパターンは『発火能力』か、んでレベルはだいたい2が2人に、3が1人か）

綾峰の见ているオーラは犯人達の放つAIM拡散力場だ。

そしてその色や形状、大きさなどから犯人達の能力を解析する。

しかしこの程度の情報なら街中を歩いていても綾峰には簡単に解析できる。

今回、わざわざ目を瞑ったのはその先を行つたためだった。

(んじゃ、潜るか)

独特の言い回しをして綾峰は更に深く解析を始める。

(感情パターンに幾らか”余裕”が見られるな、だいぶこなれてきて油断してんのか?それにしても半分以上が”愉悦”と”諦念”かこいつら何かしら自暴自棄になってやがるな)

綾峰は犯人達の感情パターンを的確に当てて、その心象を把握していく。

(やつかいだな。こういう手合は後先考えないで特攻してくるし。あー、でも上条やらオセロやらはきつと関係なく立向うんだろーな。メンドクセー。俺もたまには頑張るか)

綾峰は犯人達のAIM拡散力場を解析していく。そして、ジャスト1分後解析を終えた綾峰は目を開けた。犯人達は丁度金を詰め終わった袋を掴んでいるところだった。犯人達のリーダー格らしい中肉中背の男が導火線のついた白い玉を持っていた。

どうやら小規模の爆弾らしい。あれを投げて逃げるのだろう。確かオセロが言っていた発火強盗の常套手段だ。

既に犯人達の感情は油断が生じているのが能力で感じ取れた。

(今だ!)

犯人が導火線に能力で火をつけようとした瞬間、綾峰は己の武器を発動した。

「あれ？」

犯人の1人が異変に気がつく。

「ん？何してんだよ。さっさと火いつけるよ」

小柄な男が催促する。

「いや、あれ？何でだ？あれ？」

「どうした？」

大柄な男が訊ねるが、中肉中背の男は軽いパニックを起こしていて返事をしない。

「おい、いい加減にしろ」

小柄な男が爆弾を奪い取って自分で火をつけようとするが、

「あ？」

その手が止まる。

回りの客たちも強盗犯達の様子に不審がる。

「どうしたんだ？」

「おい、お前能力使ってみろ」

「は？何言ってるんだ？」

そう言いながらも能力を発動しようとする大柄な男。
しかし発動しない。

『AIMジャミング』

それが綾峰のAIM拡散力場を媒体としての技だった。
他人のAIM拡散力場を解析し、逆位相の力場を綾峰自身のAIM
拡散力場を介して発生させる。
そうすることで能力を封じることができるとののだ。

「な、どうなってるんだ？」

そう言っつて大柄な男は能力に集中しようとしたのか女の子を下ろそ
うとした。

綾峰が犯人達に向かって走り出したのはその瞬間だった。

「なっ!?!」

驚く犯人達、だがもう遅い。

「どりゃああああ!!」

叫び声と共に俺が女の子を奪い取ると、庇うように客たちの中に滑
り込んだ。

他の客たちから歓声があがる。

「なんだ、テメエは何だっつてんだ!?!」

「俺は、ジャッジメント風紀委員だ!!」

「んな!なにいい!!」

「ジャッジメントく、風紀委員だと!？」

「ジャッジメントくそう、風紀委員か。ここでおしまいか」

そう言ってうなだれる犯人達をすぐに取り押さえると、やっとこさ
やってきた警備員アンチスキルに犯人達を引き渡す。

そして俺は銀行から感謝され、幸運にも謝礼金として100万円を
受けとったのだった。

〈完〉

(……………なんて妄想をしてた時期が俺にもありました)

「貴方という人は………阿呆なんですか？馬鹿なんですか？死ぬんですの？」

と、綾峰は部下のオセロこと白井 黒子に説教を喰らっていた。

「通信機で警備員アンチスキルに通報しながら犯人の能力を封じたのはお手柄ですが、結局拳銃で取っ捕まった揚げ句に爆弾はライターで着火されて逃亡されかけて、しかもその取っ捕まった原因がバナナの皮ですっこけたってのはもうそれはギャグですよ！？」

「ぎゃー！！それ以上俺の忘れたい現実をこんな公共の場で大声で叫ばないでくださいー！！っーか、再認識させた上で恥辱にまみれさせるのはあれですか！？羞恥プレイですか！！？って無言でダーツを構えるな！っっーか飛ばしてくんなー！！」

結局、あのあと強盗犯達は逃げ出したまたまた外にいた白井と御坂みさか美琴みことによつて解決したものの、同じく風紀委員の後輩の初春ついはる 飾利かざりが駆けつけたら芋虫のように縛られた綾峰が発見されたのだった。そして事の顛末を聞いた白井がキレたのだった。

現在、綾峰と白井はファミレスにいた。御坂は犯人達の1人によつて服が汚されたので着替えるために先に帰り、初春は風邪ぎみなので同じく帰っていった。

そして残された綾峰は1人誰も止めない白井の説教ルートへと入ったのだ。

しかもこのルートを抜け出すにはなけなしの金を払って2500円というジャンボウルトラパフェなるものを奢らねばならないという貧困ルートだ。

しかし今日の白井はジャンボウルトラパフェをいららないと言いつつ放った。

「これはあれですか？今日こそは一夜通して説教してやるというやる気の現れですか！？」

「そ、そういうわけではありませんわ！ただ、今は単に…その…」

そらどもって赤面する白井。

それに気がついた綾峰は一言。

「あ。もしかして、今ダイエット中？そりゃそうだよな。あんだけ毎日俺にジャンボウルトラパフェを奢らせてんだもんな」

2人の側に座っていた客たちの耳にプチンという何かがキレる音が聞こえた。

「フフ、ウフフフ。今日と言う今日は貴方のその腐った性根を骨の髄まで叩き直してやるうじやないですの」

「あれ？白井？白井さん？白井様？何でその手にそのような明確に凶器っていうかトンカチをもって笑っておられるのですか？ていうかさっきまでそんなもの持ってなかったように綾峰は記憶してるわけですが？ってトンカチはだめえええ。死ぬっていうか出ちゃうから出ちゃいけない何かが頭から出ちゃうから！俺は某マンガの学園長じゃないから！！タンコブ1つじゃすまないから！ぎゃー！！」

閑話休題

「ただでさえ貴方の能力は低能力者達には意味が無い上に、大能力

者や超能力者相手にはせいぜい能力の威力を落とす程度しか力が無いという中途半端な能力なんですから。あまり無理はなさないでくださいまし」

そう言っつて白井の説教は終わった。

既に夕方の銀行強盗事件が終わっつてから6時間は経過していた。その間トイレと寮官対策に御坂に白井が電話している以外はずっと正座させられていた綾峰の足は既に自力で立てないまでに痺れていた。

「足はもう痺れ通りこして力が入りすらしないのに、夕飯まで奢らされて俺の財布は今月を超えられない気がする。つーか、もう何て言っつか、メンドクセー」

「ふん。私を心配させた罰ですわ」

「は？お前が心配だつて？」

「あ……た、単に部下としてですわ！」

「そうかい、コンチクショ〜。とりあえず帰るか。送ろうか？」

「へ！？あ……その……私には『空間移動』の能力があるから大丈夫ですわ！」

「そか、じゃあな。気をつけて帰れよ〜」

そう言っつて綾峰は手を振りつつ会計を済ませると、壁に捕まりながらファミレスを出ていった。

「いきなり、なんてことなんですの。驚いたあまり断ってしまいましたわ……」

残された白井が1人ごちた。

P r r P r r P r r、とファミレスを後にした綾峰のポケットから携帯の着信音が聞こえてきた。

「はい」

回りを見て、誰も近くにいないことを確認したあと、電話に出る。

「……………はい……………はい……………わかりました」

数分で電話を切ると綾峰は90°向きを変える。
寮とも、高校とも違う方角。第一〇学区の方向へと。
綾峰の目は鷹の目のように鋭く光っていた。

日六十月七

それは銀行強盗事件が起きる少し前のことだった。

下校中にクレープを買っていた御坂と白井が初春にあった時。

「それにしても風邪が辛いなら休んだ方がいいんじゃない？どうせ夏休みまで後数日だし、授業だってやってないんでしょ？」

御坂はそういうと、どれ…、と言いながら初春のおでこに手を伸ばした。

「うわ、結構熱あるじゃない」

額に押し当てた自分の額で熱を計った御坂が心配そうに言うと、

「でも、ジャッジメント風紀委員の方が忙しくて」

初春は忙しさを理由に大丈夫だと言った。

そこには同僚（白井）から送られる殺気で冷や汗が出ている。

「最近、能力者の事件が多くて」

「へえ、そうなの？」

「ええ、虚空爆破事件や連続発火強盗ですとか…」

「それに偽多重能力者事件とかですわ」

白井が言った言葉に御坂があれ？と首を傾げた。

「黒子、今あんた『多重能力者』って言ったの？」

「ええ、そうですわ。本来脳への負担が大きすぎて実現不可能と言われている、あの『多重能力者』ですわ」

「一種の都市伝説ですね。最近第一〇学区の研究機関がいくつか機能停止してるんです」

「それが何か関係があるの？」

「何でもその『多重能力者』が研究機関という研究機関を潰して回っているとかで、噂になってますわ」

「へー、初めて聞いたわ。でもそれなら手配とかされるんじゃないの？」

「それが一向に手配されませんの。まるで研究機関の方から隠されているかのようでして、被害届もありませんのよ」

「それにその『多重能力者』はあまりに多くの能力を使うため、特定できないとまで一部では言われているそうなんです」

「そこに便乗した能力者達が『多重能力者』を騙って犯罪に手を染めてるんですの」

「あれ？白井さん」

「何ですか？」

「あそこの銀行、何で昼間から防犯シャッターなんか下ろしてるんでしょうね」

初春がそう言った瞬間、防犯シャッターが爆発した。

とある科学の事件トラブルメーカー体質第2話

銀行強盗事件が解決してから数時間後、夏に近づいてきたために生ぬるい空気が既に夜中の学園都市に蔓延していた。

その学園都市の一画で頭から足下まですっぽりと覆われた黒の雨合羽を羽織った男が歩いていった。

男の目前には白く人気のない建物が並んでいる。

ここは第一〇学区、学園都市内に唯一墓地が存在する学区だ。だが、この男の目的は墓地ではない。

男が入ろうとしていたのは白い建物の一つで、それは研究所だった。研究所の入り口にいた警備員の1人が男に気付き呼び止める。

「君、ここは立ち入り禁止さっぐつあああああああ!？」

男の肩に手を置いた瞬間、男が警備員の腹に手を当てて電気を流した。と言っても致死量の電撃ではないので数十分気絶はすれど死ぬことはないだろう。

「スマナイガ、ココ八通ラセテ貰ウヨ」

変声機のようなもので声を変えた男はそのまま『空間移動』で研究所内に潜り込んでいった。

男は内部に入ると、合羽のポケットから端末を取り出して内部を移動し始めた。

端末に載っている見取り図をもとに男は研究所の内部深くまで潜っていく。

「此処力」

そして男は地下5階の一つの部屋の前に辿り着いた。

部屋に取り付けられた扉には嚴重なセキュリティが大量に取り付けられていた。

普通のIDチェックはもちろんのこと指紋センサー・静脈センサー・脳波測定器、等々十数個のセキュリティが所狭しと並べてあった。男はその一つに手を当てて、バチリツと音を立てる。

『電撃使い』の能力でセキュリティを一撃で破壊したのだった。

突如、セキュリティに連動していたシステムがエラーを発見しアラームを鳴らし始めた。

されど男は自分のこなすべき仕事を続ける。

ショートした扉を男は『筋力強化』で扉をこじ開けた。

重い音と共に、男の目前に目的のものが広がった。

子供達の入られた檻だった。

子供と言っても年齢は様々でまだ3歳程の子供から既に第2次性徴が見られる年ごろの子供もいた。

共通しているのは、その服装はぼろぼろで酷い扱いを受けているのが見て取れることと、全員やせ細っていることだった。

ほとんどの目は恐怖に脅えており、既に幾人かは既に濁った目で虚空を見つめるだけであった。

この子供達はいわゆる置き去り（チャイルドエラー）だ。

この研究施設はいわゆる非合法の研究機関だったのだ。

学園都市に置き去りにされた子供達を保護する制度が存在する。

それを逆手に取り非人道的実験を行う研究チームも存在するのだ。

男の目的はこうした研究所から置き去り（チャイルドエラー）を発見することだ。

男は手にした端末から連絡を入れる。

「此方、『フルトリ』。置き去りヲ発見シタ、場所ハ予想地点。

幾人カニ衰弱ノ傾向ガ見ラレル。急遽保護ヲ要請スル」

『ザザ……了解じゃん……ザザ……計画通り被害は少ないけど派手に見える場所を焼くじゃん』

「了解。スグニ実行スル」

『気をつけるじゃん……ザザ』

男は端末をまた研究所の見取り図に変えると最上階に移動する。

だが、今回は『空間移動』は使わない。

足で移動し始めた男は階段などを利用して最上階に向かっていく。

アラームが鳴るのと同時に対『空間移動』用のシステムが稼働して

いるからだ。

下手に移動すると重傷を負う可能性がある。

男は当初の予定に沿って足で階段を上っていく。

数分もしない内に一階に出た男は一階広場にいた警備ロボット達による手厚い歓迎を受けた。

銃撃の弾幕。

慌てて階段の踊り場に転げ落ちた男の目前は”人をも殺せるように改造を受けた警備ロボット達の一斉射撃によって粉塵に包まれていた。

「警告、警告。これ以上ノ抵抗を行う場合、命ノ保障ハナイ。警告、警告。抵抗セズ、ソノ場デ俯セニナリ、頭ニ手ヲノセナサイ」

警告を発する警備ロボットに従うように男は手を床につける。

その瞬間男の回りに輪のような力が出現し、床が陥没した。

床の陥没に巻き込まれて警備ロボット達が落ちていく。

一方男はそのまま落ちずに空中をジャンプしていく。

『念動力』で足場を固定し、ジャンプしているのだ。

そのまま吹き抜けの広場から最上階に移動した男は再度現れた警備ロボット達に立向う。

にじり寄ってくる警備ロボット達。

男は徐々に吹き抜けの縁まで追いやられる。

「再度ノ警告ヲスル。これ以上ノ抵抗を行う場合、命ノ保障ハナイ」

「フフ、保障ガナイノハ君達ノ方ダヨ」

そう言った男はニヤリと笑うと右手を高く掲げ、指を鳴らした。瞬間、最上階にいた警備ロボット達に無数の黒い塊が振り落とされた。それが何であるか、関知する前に警備ロボット達は機能停止した。全てが終わった後に、男は最上階の一室に『発火能力』で火をつけた。

数分後、火災の通報を受けた警備員が研究所アンチスキルに到着。捜査中、“偶然”にも地下に囚われていた置き去り（チャイルドエラー）を発見、これを保護した。

空が明け始めた頃、ようやく仕事が終わった綾峰は燃え尽きたかのように白くなりながら第七学区を歩いていった。P r r P r r、と携帯の着信音が綾峰のポケットから聞こえてきた。

「……へーい」

『いやー、今日も助かったじゃん』

「どづいたしまして。つーか、あれだけの改造警備ロボットがいるなんて聞いてねーよ。メンドクセー」

『仕方ないじゃん、置き去り（チャイルドエラー）と同じであれも

違法で入手してたんじゃない？それにしても相変わらずのむちゃくちゃ振りじゃん』

「何がだよ？」

『あんだだけの種類の能力を使うもんだから、こつちじゃまた能力者集団ってことになってるじゃん』

「いえいえ、どういたしましてー」

『褒めてないじゃんよ。おかげでこつちは上への報告に何書けばいいか困るじゃん』

「知らねーよ、そんなの。それじゃオレ眠いんで。また」

『ちえっ、眠いのはこつちも同じじゃん。あいよ、また頼むじゃん』

携帯を閉じて綾峰は電話を切る。

そう、都市伝説として騒がれている『多重能力者』^{デュアルスキル}とは綾峰のことだ。

しかし、別に綾峰の能力が『多重能力者』^{デュアルスキル}であるわけではない。綾峰の能力が『多重能力者』^{デュアルスキル}に似ているだけだ。

むしろ正確に言うのであれば『上位能力』と言うべきだろう。

AIM拡散力場を観測・干渉する。それが綾峰の本来の能力だった。昨晚の多種多様な能力の使用はその応用だ。

従来の能力とは違う使い方なので負担も大きく、使用頻度も少ない。特に『空間移動』の様な大能力に匹敵する能力はせいぜい1日に1回か2回、それ以上使うと脳が壊れてしまう。

もちろん超能力と言われるレベル5の再現なんて不可能もいい所だ。だが、逆にレベル1〜2程度の能力であれば同時使用も可能ではあ

る、それもまた別の制限があるのだが。

話はずれるが、もともと綾峰は転生した人間だ。

二十云々才の男が気がつけば赤ん坊になっていたのだ。

そのため成長の早い（もともと成長している）綾峰は天才とまで呼ばれ両親によって学園都市に連れてこられた。

そして綾峰は置き去り（チャイルドエラー）になったのだ。

多額の金と共に消えた両親の代わりに日々同年代の子供達と実験に耐える日々。

その果てに得た能力が『上位能力』だった。

そして同時に失ったのは仲間達だった。

綾峰は暴走した。

あらゆる能力を使役し、暴走し、破壊し、自滅し、ぼろ雑巾のような状態で黄泉川よみかわ 愛穂あいほに助けられた。

その後病院で冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）と呼ばれるカエル顔の医者によって命を取り留められた後、綾峰は自分と同じ境遇の子供達を救う決心をしたのだった。

だが、表立ってはまずいということで普段は『能力解析（AIMリダー）』という無害な能力者の振りをしている。

綾峰は転生者だ、元々はこの世界のものである「とある魔術の禁書目録」という本もいくらか読んだことがある。

だから、この世界には裏があることも知っていた。

故に綾峰は歩いていく、表と裏の境界線を。

七月十七日

「暗証番号が違イマス」

コンビニの二画で無情な一言が告げられた。

「なんて言うか、さっきまでは普通にお金下ろせたのにお前の番になるとそうなるってのはやっぱりあれか？日頃の行いが悪いのか？」

綾峰はコンビニのATMの前でフリーズした友人に声をかけた。

「……………は？いやいやそんな筈は……………」

復活した友人がまた暗証番号を打ち込む。

「暗証番号が違イマス」

「何でだー！！」

「はぁ、メンドクセー」

「「ようこそ、仲間よ」」

銀行強盗事件の翌日、綾峰は未だにだるさを感じながら学校に登校した。

そしてクラスに入ってかけられた一言めがこれだった。

とりあえず、むかついたので同級生である青髪ピアスは一撃で気絶させた綾峰だった。

ついでに同じく同級生である土御門元春は喋れるくらいには生かしておいた。

「なぜ俺がロリコン呼ばわりされねばならんだ」

「だって峰やん、昨日常盤台のJことダイナーしてたのを見たって上やんが」

「オーケー、とりあえず死ね。氏ねじゃなくて死ね」

綾峰は止めの一撃を放った。
そこへやってくる下手人。

「って俺の名前は下手人じゃねえ！」

「うるせー、下手人^{かみじょう}。何だその」ことのディナーって」

「だって昨日見たぞ？確かオリヤ・ポドリーダだったか？あそこで常盤台の娘と夕飯食べてたじゃん」

「あ・れ・は、仕方なくだ。良いだろう、お前は殺される。今この場で俺に殺される！！」

「んだとこらあ！」

「止めんか！！貴様ら！！」

喧嘩に発展しそうになった2人を吹寄^{ふきよせ} 制理^{せいり}が拳骨で止めた。
クラスのいつもの風景だった。

閑話休題

「というわけで、あれは風紀委員^{ジャッジメント}の部下でして、恋人とかそういう関係ではないんだよ！！」

「ちっ、上やんだけかと思ってたらこんなところにも無自覚フラグ野郎がいたとはにやー…」

「はあ！？どこをどう解釈したらそうなるんだよ？」

「つーか、何でそこで俺の名前が出てくるんだ！？」

「まあボクだったら落下型ヒロインのみならず、義姉義妹義母義娘

双子未亡人先輩後輩同級生女教師幼なじみお嬢様金髪黒髪茶髪銀髪
ロングヘアセミロングショートヘアボブ縦ロールストレートツイン
テールポニーテールお下げ三つ編み二つ縛りウェーブくせつ毛アホ
毛セーラーブレザー体操服柔道着弓道着保母さん看護婦さんメイド
さん婦警さん巫女さんシスターさん軍人さん秘書さんロリシヨタツ
ンデレチアガールスチュウワーズウェイトレス白ゴス黒ゴスチャイ
ナドレス病弱アルビノ電波系妄想癖二重人格女王様お姫様ニーソツ
クスガーターベルト男装の麗人メガネ目隠し眼帯包帯スクール水着
ワンピース水着ビキニ水着スリングショツト水着バカ水着人外幽霊
獣耳娘まであらゆる女性を迎え入れる包容力を持つてるから、そう
いう子でも構わずゲツトするんやけどなあ」

「ようは何でも良いんだろ？お前は」

「フーか、一つ女性じゃないの入ってないか？」

「上やん、それは突っ込んだら負けニヤー」

放課後、今朝のことでクラスの三バカ（デルタフォース）+1で緊急
急会議があったのだ。

被告人は綾峰唯鷹、審判員はクラスの三バカ（デルタフォース）で、
被告人は白井との関係を説明し、どうにか納得してもらったのだっ
た。

そして解散という流れになったのだが…

「それじゃ、俺は舞夏と約束あるから今日は先帰るにやー」

「そついやボクもパン屋の仕事手伝わなあかんかったんや」

そつ言つて土御門と青髪ピアスは先に帰って行ってしまった。

綾峰は上条と同じ寮に住んでいるので一緒に下校する。

「そついや、綾峰、お前も今日は風紀委員^{シヤジジメント}の仕事行かなくていいのか？」

「あん？……………あ……………大丈夫だにやー。上やん、気にしない気にしない」

「なんで土御門の真似？ つーかお前忘れてただけだろ」

「いやあ、メンドクセーし、今日はいいかなって。どうせたいした事件は起こらんだろ」

「そうかねえ。つーか『事件体質^{トラブルメーカー}』のお前といると絶対何か事件に巻き込まれるんだろつなあ」

「そんな事言ったら『不幸体質^{ハードラック}』のお前はどうかんだよ」

「はっ。むしろ上条さんの場合は他人の不幸まで受け入れるからむしろありがたられるね。やつほー、バンザイー」

「……………言つてて虚しくないか？」

「それを…言つな」

そのままとぼとぼと歩く2人。

「あ、ちょっと待っててくれ」

途中、昨日の白井のせいでコンビニで金を下ろさねばならないことに気がついた綾峰が上条に言った。

「そっぴゃ、俺も下ろさなきゃいけないんだっけ。いいぜ。行こう」
そうして、最初の状況に陥るのだった。

あたふたする上条の横で綾峰はクーラーの風にあたりつつ涼むこととした。
とりあえずいつものことなので助ける必要はない。

「だー、もー！こうなったら違うコンビニで」
そう言つて上条がATMからカードを抜こうするが、

「……………」

「ぎゃー！！今度はカードが飲み込まれて出てこないー!?!」

騒いでいる上条の横でなんとなしに回りの能力者の能力レベルを見ていると、すぐ近く、コンビニの外に1人異様なパワーを持った人物がこちらに歩いてきていた。

「ん？この感じは御坂か？」

「あー！もー！不幸だー!?!」

上条が叫ぶのと同時に御坂、ご入店。

綾峰達がいたコンビニはATMが入り口のすぐ横に置いてあるので御坂と上条がお互いに気付くのはすぐだった。

「久しぶりね」

「ゲッ、ビリビリ中学生」

「やっぱり御坂か」

「なー、綾峰。カードの再発行って時間かかるよな？」

しかし上条は何事もなかったように綾峰に話しかけてきた。

「は？……ああ、確か少なくとも1日はかかるはずだけど？」

「そっかー、だとすつとそれまで無一文に……冷蔵庫の中身は空っぽだし、やっぱり買い溜めしとかなないと駄目かー」

上条がぶつくさと1人ごとを始め出す。

その横にいた御坂の回りに目に見えるぐらいの電気が走り出した。

「無視すんなって言ってんのよ！ー！！」

凄まじい音と共にATMが壊れるんじゃないかと思うぐらいの拳を御坂が入れる。

瞬間、先程まで飲み込んでいたカードをATMが吐き出した。

「おお！すげー！ありがとう、ビリビリ！助かったー。いやあ初めはこんな奴と知りあって不幸だーとか思ってたけど……」

そうやって先程までのスルーはどこにいったか、感謝感激涙ぼろぼろの上条が御坂の手を掴んでぶんぶん振り回した。それと同時に鳴り響くのはサイレン。

画面に現れるのは「警告 攻撃性電磁波を関知」という的確な文字だった。

（まあ、友人を犯罪者にはしたくないが。）

綾峰も風紀委員の端くれ。

ジャッジメント

仕方ないが、仕事をしなければなるまい。

べつに、上条のこのフラグ乱立体質がむかついたわけじゃない。

普段クールな御坂が上条に手を握られて顔を真っ赤にしているのを見てうわあ、マジこいつねーよとか思ったわけでは、断じてない。

「さて、お前ら話を聞こうか？」

につこり笑顔でポケットから風紀委員の腕章を取り出した綾峰は2

ジャッジメント

人に言った。

一気に顔面蒼白になる上条。

次の瞬間にはコンビニから走り出して、御坂と遙か彼方へと走り去っていった。

「はえー」

明日は御坂と上条が手を取り合って街へ走っていったと、土御門と青髪ピアスに報告しようと、心に決めた綾峰だった。

もちろん、それは今朝の仕返しなどではない。

復讐だ。

なんて綾峰が黒い笑顔で笑っていたら、もっと黒い笑顔の方がいらつしゃいやがりました。

「綾峰先輩？何でこんなところに？今日は風紀委員の本部会議だと言つてませんでしたこと？」

「あるえ〜？そういうオセロこそ、なんでここに？」

「ATM襲撃事件があつたと警報がきて確認しに来たのですわ。つていうか、私には白井 黒子というれっきとした名前がありましてよー！」

「そうか、それじゃ後はここ任せるよ。俺は御坂を連れた上条でも追いかける。それ……じゃ……」

綾峰の言葉が途中で切れ、代わりに脂汗がたらたらと全身から流れていく。

「ウフフ、ウフフフフ。初春は初春で風邪を理由に風紀委員の仕事ジャッジメントをサボってお姉さまとパフェを食べようとしていましたし、綾峰先輩がサボつた所為で代わりに私が本部会議ジャッジメントに出るはめになりましたし、しかもそのせいでお姉さまの貴重な風紀委員姿を見損ねましたわ。ウフフフフ」

（何か白井が既にキレてらっしやるー?!）

「えっと、白井……?」

綾峰の言葉に反応して首をかくんと傾けた白井がこちらを見てきた。

その瞳に光はない。

「あら？まだそこにいましたの？ウフフフフ、ウフフ。オシオキの時間DEATHわ」

「ぎゃー！！なんつーか、メンドクセー！！っていうより不幸だー！！！！」

結論、『事件体質』も『不幸体質』もどちらも回りに被害を及ぼす模様。

七月十八日 巻 【量子変速編】

「なあ、上条。これはデジャヴっつーのか？」

「またも翌日、上条と綾峰2人の下校だった。」

「今日も何か事件が起きそうな気がする」

「つーより、お前の場合1日1事件が当たり前だろ？」

「何だその1日1善的な言い方。メンドクセーな。しかも俺は単に巻き込まれてるだけなんだぞ？それに昨日のあれを事件って言うのか？」

「うっ。それは悪かったって言ってんだろ」

綾峰が言ったのは昨日御坂が勢いあまって壊したATMのことだ。

「それにしてもお前あの後1晩中、御坂と追いかけてっこやってたのか？」

朝、登校してきた上条の一言目は「眠い……………不幸だ……………」だった。

結局綾峰に女子中学生と手を取り合っつて街に消えたことを報告された土御門と青髪ピラスによって制裁をうけていた。

「あー、まーな。つーか何であいつはあんなにつつかっかってくるんだ？」

「知らねーよ。はあ、何でお前のフラグ乱立体質は節操ないんだか、メンドクセー」

「何だそのエロゲーみたいな設定。つーか不幸な上条さんはそんな幸運経験皆無ですよ!？」

「お前は今全世界の健全なる男子諸君を敵に回した、謝れ、特に画面の外にいる年齢〓彼女いない歴な人達に謝れ!」

「画面?お前なに言ってるんだ?」

「気にすんな、電波を感じただけだ」

「そついやお前はあの後どうしたんだ?何か全身擦り傷だらけだけど」

綾峰の体中にバンソーコーが貼られている。

「あの後、部下の白井が来てな。サボってたのがバレてオシオキされてた」

「オシオキ?」

「『空間移動』で上空30mぐらいの高さに上げられて、そのまま自由落下、そして地面に激突する寸前でまた上空30mぐらいの高さに、自由落下、30m、自由落下…以下エンドレス」

「……………」

無言の上条は震えていた。

「最後は砂場に落としやがって、地味に痛かった」

「自業自得だろ」

「うるせー」

綾峰は泣きたくなった。

とある科学の事件トリプルメーカー体質第4話

何事もなく上条と別れた綾峰は風紀委員ジャッジメントの第一七七支部にいた。流石に昨日の今日である。2日連続オシオキは体に悪いのだ。特に胃とその中身に。

そついうわけで、綾峰は普段はポケットにしまっている風紀委員ジャッジメントの

腕章を腕の袖に付けて3日振りに来た支部の自分の席に座る。そこに積まれているのは天井にも届きそうな書類の山だった。

「あるえ〜？白井？俺って3日前にこの書類の山を消したはずじゃなかったっけ？」

傍の席に座る白井に訊ねてみる。

「なに言ってるんですか。綾峰先輩は副支部長なんですから、3日も休めばこれぐらい溜まるに決まっていますわ」

実は綾峰は副支部長とかいう偉い席に着いてたりするが、サボり癖ゆえにたまにこうして来ると仕事が一気に溜まっていたりするのだ。

「それにしたって溜まりすぎじゃないか？」

「当たり前ですわ、こここのところ能力者の事件が多発してるんですの。それにその能力者達の能力の実際のレベルが『書庫』^{ハンク}にあるデータと一致しないものですから、書類の不備がないかなどの確認で、なおさら書類が増えてるんですわ」

「だりい、帰る、帰ろう、帰ります、実家に帰らせて頂きまぐふっ！？」

目が死んだ魚の目になって逃げ出そうとする綾峰の首が何故か綾峰より背の低い白井によって掴まれる。

いつの間にか綾峰は白井に引きずられる格好になっていた。

「ウフフ、ウフフフフ、これでも私と初春、特に私ですが。頑張つて頑張つてこの量まで減らしましたのよ。今日こそは絶対に逃がし

「ませんわ」

「痛いっ！痛いッ！何か食い込んでるぞ！？てか白井？白井さん？白井様？怖いってその顔こええ！！っーか最近お前荒れすぎだっつの！」

「仕方ないじゃありませんの。あまりにもデータが一致しないんですもの。それにここ最近、ジャツジメント風紀委員の負傷者も増えてきてますし………」

「………ジャツジメント風紀委員の負傷者？」

「ええ、連続虚空爆破事件やら他の事件での能力者たちのレベルの増加に対応しきれないみたいですよ」

「ふーん。オーケー。分かった」

そう言つて綾峰は自分で立ち上がると資料の山に向かつていった。その目は先ほどまでの死んだ魚の目ではなく、鷹のように鋭い眼光に溢れていた。

「白井、その『書庫』のデータとレベルの合わない事件の詳細と負傷者のリスト、そして負傷者の立ち会った事件のデータはこの山にあるのか？」

「は、はい！ですが既に積みに積み過ぎてどれがどれだか………」

綾峰の空気が変わったことに気づき、白井は慌てて礼儀を正す。

「いい、1時間で終わらせる」

そう言つて、綾峰は書類の山に向かった。

1時間後。

綾峰の机は綺麗さっぱりに片づき、既に書類は目を通した後だった。そして綾峰はある事件の情報を見続けていた。

それは『連続虚空爆破事件』。

犯行方法はいたつてシンプルで、『量子変速』^{シンクروتロン}という能力を使って爆破をするというものだった。

具体的にはアルミを基点に重力子^{グラビトン}を増大ではなく加速、周囲に放出させるものだった。

ようはアルミを爆弾に変えているのだ。

犯行の場所は様々で、飲食店だったり時にはゲームセンターでも起こっていた。

そして使用されるのはアルミ製品を入れた鞆やぬいぐるみなどだった。

しかしその犯行場所も時間も、特に共通項はない。

問題はこの事件を起こせる程のレベルを持つ人物がこの事件が発生する前日に意識不明で病院に運ばれていることだった。

これは既に実際に知りあいの医師に確認もとつてある。

故におかしい。唯一のレベル4の釧路^{くしろ} 帷子^{かたひら}がいらない以上、この事件は起きないはずなのだ。

だが、そんなことはどうでも良い。

綾峰が最もひつかかったのは負傷者の数だった。

この事件が起きたのが1週間前、そして毎日この事件は起きて既に6件。

同時に、ジャッジメント風紀委員の負傷者の数もこの1週間の間で9人。しかもその全員がこの虚空爆破事件で負傷している。

「いくらなんでも多過ぎるな、もしかして……狙いはこっちか？」

そう言っつて自分の腕章に視線を向ける。

盾をイメージしたという風紀委員の紋章。ジャッジメント

それは弱きを救う盾という信念と共にある1種の抑止力。

だが、それは同時に誰かに狙われる対象となりやすい。

つまり、綾峰の考えは

「この事件、『連続虚空爆破事件』は風紀委員を狙ったものですか？！」

白井の驚く声ジャッジメントが風紀委員の事務所の中で響いた。

幸い、他の風紀委員達は警邏の出かけており聞いているものはいない。

あくまでこれは推論なので下手な噂になってもまずいと綾峰は考え、白井に聞いてみたのだが、白井が真剣に考え込んだと言うことはその推測は意外にも納得がいくらしい。

「ああ、動機はよくわからんが。そう考えると不思議じゃない。ぬいぐるみや鞆なんて”警戒させない形”になっているのは”警戒する相手”がいるという前提があるからだ」

「だから風紀委員が狙われている、ですか……」

「とりあえず、ここ数日連続で起きている。と言つことは」

「今日も誰かが狙われる……はい！風紀委員第一七七支部ですわ」
ジャッジメント

突然の事務所への電話に白井が応答した。

「はい……はい………何ですって！！わかりました。すぐに警邏
ジャッジメント
中の全風紀委員達に連絡します」

「どうした？」

受話器を置いた白井に綾峰が聞く。

「先ほど、衛生が重力子の爆発的加速を確認したそうです、場所は

第七学区の洋服店、「セブンスミスト」ですわ」

一方、そのころの上条は小さな女の子と一緒に洋服店に来ていた。
綾峰と別れてすぐのところ制服のズボンを掴まれたのだ。
どうやら昨日テレビで見た洋服店に行きたいのだが、道に迷ったと
のこと。

店の名前を聞くと上条の知っている店だったので連れて行ってあげることにした。

店の名前は「セブンスミスト」。

それより少し前のこと、御坂と初春、そして初春の親友で同級生である佐天^{さてん} 涙子^{なみこ}の3人は最近流行の服を見に来たところだった。初めは普通の店に”お嬢様”である御坂を連れて行くのは、と迷っていた2人だったが、御坂があまりそういうのに頓着しないものだと言うので一緒に服を見に来たのだ。初春も警邏中という名目なため、風紀委員^{ジャッジメント}の腕章を付けたまま、来ていた。そして3人が来たのは洋服店「セブンスミスト」だった。

七月十八日 貳

「白井！俺はいますぐ現場に向かう、お前は支部のメンバー達に即座に連絡をいれる。それからもし風紀委員ジャッジメントの誰かがセブンスミストにいるならそいつをすぐに避難させる。さっきの推論が間違っていたら、ければそいつが今回のターゲットだ」

「はい！」

白井に命令を出して綾峰はすぐに支部を後にする。

「セブンスミストは……こつちだな！」

そう言って綾峰は走り出した。

時は少し遡る。

まだ御坂達3人がセブンスミストに向かう途中でのことだった。

「あー、『レベルアップ幻想御手』があればなー」

御坂がレベル5であることを聞いた佐天がふともらした。

「え？何ですか、それ」

「いや、あくまで噂だし、詳しいことはあたしも知らないんだけど

……」

そう言っつて佐天が噂に聞いた『レベルアップ幻想御手』の説明をする。

「あたしたちの能力のレベルを簡単に引き上げる道具があるんだって
それが『レベルアップ幻想御手』」

「ま、ネット上の都市伝説みたいなもんだけどさ」

と、佐天は言葉を結んだ。

「そりゃ、そうですねよ。そんなのがあつたら苦労しません」

初春も親友の話に相づちをうつ。

「でも、ほんとにあつたらあたしでも……」

「佐天さん？」

「あはは。なんでもないよー」

そんな2人の会話を聞きながら、御坂は下校中に聞いた「『書庫』のデータとレベルの合わない能力者」のことを思い出していた。

(『レベルアップ幻想御手』か……………まさかね)

「そういえば都市伝説って言えば『デュアルスキル多重能力者』ってのも有名だよ
ねー」

「あ、それ聞いたことありますよー。確か研究所という研究所を潰してるんですよ?」

「へ?あたしは仮面と雨合羽を着た男が突然現れて犯罪者達をぶちのめしたりしてるって聞いたよ」

「どうやら処々で『デュアルスキル多重能力者』の噂は1人歩きしているらしい。

「『デュアルスキル多重能力者』ってのは聞いたことあったけど仮面に雨合羽って初めて聞いたわ」

御坂は前に白井に聞いたことはあったが、服装についてまでは聞いたことがなかった。

「そんなですよ、それで悪いやつらの前に颯爽と現れてジャッジメント風紀委員が到着する前に全て解決するっていうんですからすごいですよー」

「むう、そんなの聞いたことないですよー?」

佐天の言葉に初春が反論する。

「あはは、まあただの都市伝説だしねーって、ほらあれですよ。セブンスミスト」

そうして、3人はセブンスミストに辿り着く。

それから数十分後。

『初春ッ！！！今どこにいるんですのッ！！！？』

電話越しに聞こえてきた白井の大声に初春は耳から携帯を遠ざけた。

「し、白井さん。そ、その自分は今警邏の途中で…」『例の虚空爆破事件の続報ですの！』「えっ！？」

慌てていいわけを始めようとする綾峰を遮った白井の言葉に初春は驚きの声をあげた。

『衛生が重力子の爆発的加速を観測しましてよ』

「か、観測地点は？」

『今近くの風紀委員達を急行させていますの。綾峰先輩も既に向かっています。あなたも速やかに現場に向かいなさい!』

「ですからっ、観測地点っ」

『第七学区の洋服店『セブンスミスト』ですの!』

白井の言葉に一瞬驚いた初春は、すぐに歓喜の声をあげた。

「……ラッキーです。私、今ちょうどそこにいます!」

『何ですって!?!? ちょっ!初春!?!初春!?!?』

白井が驚きの声をあげるが、既に初春は携帯から耳をはなしており、白井の声は聞こえていなかった。

「御坂さん!」

そうして、初春は風紀委員としての指示をてきぱきと出し始めた。

「初春!?!初春!?!?」

あまりの事態に慌てて白井は大声をだすが、携帯から初春の反応はない。
どうやら客を避難する為に行ってしまったようだ。

「くっ、人の話を最後まで聞けですの!」

そう言つて一度携帯を切ると、別の電話番号にかけなおす。初春の携帯と違い、すぐに反応が返ってくる。

『白井か！？現場には誰かいたか！？』

「最悪ですね。初春がいましたの。しかも初春も話を聞かないまま客達の避難に行つてしまつて」

『わかつた、もうすぐで俺も着くから。お前は引き続き初春に電話をかけて避難させる』

「はい！」

白井は一度切ると、再度初春に電話をかけなおした。

「ふああ。よく女の買い物は男が疲れるつて聞くが本当だったんだな……………疲れた」

1人ごちた上条は1階の入り口付近でクーラーの風で涼んでいた。先程まで女の子と一緒にいたのだが、途中でビリビリ（御坂）に出会い、しかもどうやら2人は知りあいらしいので預けてきたのだ。

「それにしてもアイツはいつつも勝負だーとしか言つてこねえな。

こんな店にいるんだから少しは女らしいところもあんのかと思つたけど……………ん？なんだ？」

店の中が少し騒がしいのに気がついた上条が中の様子を見ようと奥に進もうとしたところ風紀委員ジャッジメンと店員から建物を出るようという放送が流れてきた。しばらくの間、出てくる客たちを見ていたが、ビリビリもあの女の子も出てこない。原因はわからないが、どうやら緊急事態だと判断した上条は中に向かって走り出した。

それから数分後、綾峰はやっとセブンスミストに辿り着いた。

「はあっ……はあっ……はあっ。初春は………いねえか。って事はまだ中だな」

爆発もまだ起こっていないがタイミングは分からない。すぐにでも爆発する可能性だつてあるのだ。

『能力解析』発動！

すぐにセブンスミスト内部のAIM拡散力場を調べ上げる。爆弾も能力で作られたものである限り、必ず反応するはずだ。

「って、もう爆発寸前か!？」

建物内部にあった爆弾は既に収縮を始めている。

爆弾の回りには能力者が2人いるが、あのままでは爆発に巻き込まれてしまうだろう。

この時、綾峰はまるで後先を考えていなかった。

そして次の瞬間、

綾峰は店の内部に『空間移動』した。

「逃げてください！！ あれが爆弾です！！！」

そう叫びながら初春は女の子を抱えてしゃがみ込んだ。

できるだけ、女の子の盾になるように女の子と投げ捨てた爆弾の間に自分の体を入れる。

そして目の前の爆弾はその場にいた上条、御坂のどちらが見てもわかるぐらいに収縮し始めた。

御坂は超電磁砲で爆弾ごと打ち抜こうとポケットからコインを出そうとするが、慌てるとうさの事にコインが手から滑り落ちてしまう。

「マズった！！ 間に合っ」

御坂が言い終える間もなく、

轟音と灼熱がセブンスミストを包み込んだ。

爆弾が爆発した際、御坂は目を瞑っていた。

迫り来る死という恐怖に人間としての当然の反応だった。

だが、一向に爆風は御坂を襲わなかった。

そろそろと目を開けると、御坂の目の前には御坂を庇うように手を前につき出した上条の姿があった。

どうやら上条が自分を救ってくれたのだとすぐに御坂は理解した。

そして自分が助かったということに、安堵しかけたが、すぐに爆弾を間にして反対側にいた初春達のことを思い出した。

回りを見ると天井、壁、柱、タイルといった爆風を受けたもの全てがぐるこげになっていた。

上条の後ろ側には全く影響がなくタイルも壁も白いままだったが、その爆発前後の差がいつそうその威力を見せつけていた。

この爆発の中をあの2人は生き残れたのか？

御坂と上条は慌てて先程2人がいた方向に向かって煙の中を進むと黒い壁のようなものに気がついた。

「何？これ？」

「さあ？」

そう言つて上条が右手で壁を触ると、壁は一瞬で霧散した。そしてその向こう側には。

「おにーちゃん、おねーちゃん！」

「御坂さん、大丈夫でしたか！？」

無傷の初春と女の子の姿と、

「……………」

その横に黒い仮面と雨合羽を着た男が立っていた。

その姿を見て、御坂はさきほど佐天が言っていた言葉を思い出した。

『仮面と雨合羽を着た男が突然現れて犯罪者達をぶちのめしたりしてらって聞いたよ』

これが、

「『デュアルスキル
多重能力者?』」

七月十八日 参

(やっちまったなあ。メンドクセー)

綾峰は現在進行形で後悔をしていた。

「『デュアルスキル
多重能力者』?」

綾峰の目の前には驚きの表情で固まっている親友、上条 当麻と部下を通じて知りあつた御坂 美琴の2人。

しかも綾峰の格好が黒仮面と黒雨合羽であるために、あからさまに警戒されている。

(く、『幻想殺し(イマジンプレーカー)』の上条に、『超電磁砲^{レールガン}』の御坂……………やべえ。勝てる気がしない)

そもそも綾峰の能力ではAIM拡散力場を持たない上条の動きは感
知できない。

御坂の能力も綾峰がいくら大量の能力を使った所で電撃で一蹴され
るだろう。

(ならば、上条はカウンターで…って違う違う!そもそも闘うこと
を考える時点で間違えてる。俺はこいつらと敵対関係になつたこ
ろで何の得もないんだ)

通常、敵対したくない場合は友好的な態度をとつた方がいい。

(よし、まずはフレンドリーに)

とある考えの元に綾峰は手の喉にあてた。

とある科学の事件トラブルメーカー体質第6話

上条と御坂の前で『デュアルスキル多重能力者』らしき男は喉に手を当てた。
男の突然の動きに身構える御坂。
それを見て上条もわずかに身構える。
そして、男は、

「ワタシハ宇宙人ダヨ」

と言い放った。

「すごい、お兄ちゃん。宇宙人なの！？私初めて見た〜！」
純粹無垢な女の子が握手して〜と近づいてくる。

「わ、わ、わ、どうしよう。私も初めて見ました。というかサイン

してくれますか？」

「へー、宇宙人って本当にいるもんなんだな。つーか、あの仮面と雨合羽が宇宙服なのか？」

初春はサインサインと、ポケットの中から何か書けるものがないかと探し出し、上条はいるんだなー、と自称宇宙人と握手をする女の子を見守っていた。

御坂は、

「すごいよねー、宇宙人かー。それならありかー。って

んなわけあるかあ！！！！！！！！！！」

キレた。

体中から雷を出し、その音は千の鳥がさえざるようであった。

「ナツ。ソレ八千鳥！？」

男は変な声をあげつつ、女の子を初春に預ける。

「『デュアルスキル多重能力者』！あんたふざけんのも大概にせえや！！」

「って御坂！？落ち着けって。何か言葉使いがお嬢様とは言えないレベルになってるひいつ！？」

上条が慌てて落ち着かせようとするが、御坂の一睨みによって黙らされた。

不幸だと叫びながら上条は右手で黒い物体に触れる。
瞬間、黒い物体は元から何も無かったように消えてしまう。

「よし、そのまま行きなさい！私が援護するわ！」

「うおおおおおおー！」

御坂が電撃で『多重能力者』を攻撃し、それを捌かなければならぬ
『多重能力者』は上条から意識を外す。

その間に上条は一気に『多重能力者』の懐に入るとその顔面についた仮面ごと右手で殴ろうとした。

「もらったああああー！」

瞬間、上条の腕と軸足が『多重能力者』の『念動力』によって弾かれる。

「なッ！？」

上条の右手は『多重能力者』の仮面にかすりもせず、上条はバランスを崩し一気に無防備な状態になる。

無防備になった上条の腹に『多重能力者』の正拳突きがクリーンヒットした。

そのまま吹き飛ばされた上条は壁に激突し、崩れ落ちた。
しかし、それも御坂の計算のうちだった。

「貰ったわ」

『多重能力者』の背中に御坂の手が押し当てられる。
瞬間、『多重能力者』に電撃が走った。

全身から煙を上げ、『デュアルスキル多重能力者』は倒れた。

「やったー！！勝ったー！！」

御坂は勝利のガッツポーズをとる。

「すごいです！御坂さん！………って良く考えたら、その人特に悪いことしてませんよ！？というか私達を救ってくれた恩人なんですけど……」

初春が感激しながら駆け寄って、すぐに当然の疑問を抱く。

「あれ？え？あれえ？………あ………何で私こいつに勝負ふっかけてたのかしら？」

御坂も一気に頭が冷めたのか、自分の怒りの理由を忘れていた。

「知るかー！つーかそんな理由もわからない喧嘩に上条さんは巻き込まれたのですかー！？なんつーか不幸だー！」

上条が壁でぎゃーぎゃーと叫ぶ。

「というか大丈夫なんですか？この人さっきからぴくりともしませんけど」

初春が心配したのは当然だ。

なにせ先ほど電撃を受けた直後から『多重能力者』デュアルスキルは全く動かないのだ。
それこそ指先すらぴくりとも動いていない。
初春は急に不安になったのか『多重能力者』デュアルスキルの首に手を当てて脈を測り、

「ってこの人、脈がないですよ!?!」

衝撃の事実を告げた。

「ええー!?!?!?!」

突然の事実には御坂の脳裏に「レベル5の殺人者!?!」「女子中学生、恩人を殺害!?!」「学園都市のレベル5第三位が殺人事件の加害者か!?!」といった新聞の見出しが駆け巡る。

「と、とにかく心臓マッサージしよう!?!」

上条が慌てて近づいてくる。

そして心臓マッサージをしようとして、『多重能力者』デュアルスキルの胸に手を当てた瞬間。

『多重能力者』デュアルスキルの体が砂状になって消えた。

「「「はっ?」「」」

残ったのはカードが1枚。

そこには、

「引つかかってやんのー m9 (^ ^) プギャー」

「あの野郎っ！！！！」

御坂は再度雷を轟かせた。

それのとばっちりを受ける上条は右手でどうにかそれらを打ち消していく。

「なんっーか、不幸だー！！！！」

「ん？何かいま上条の悲鳴が……………気のせいかな？」

そう言って綾峰は「セブンスミスト」から少し離れた路地裏に『空間移動』していた。

先ほどまでの仮面と雨合羽は既に消してある。

あれは能力によって作ったものなのでいつでも好きな時に消せるのだ。

というよりも今は消さざるを得なかったのだが。

（っーか、大能力レベルの『空間移動』を2回も使うはめになるとは……………それに”分身”を置いてくるのに演算可能レベルギリギリだったの。あー、頭が割れそう。メンドクセー）

その場で倒れそうになるのをどうにか堪えていると、目の前で見知らぬ学校の男子生徒が、

「スゴイツ！素晴らしいぞ僕の力！徐々に強い力を使えるようになってきたッ！」

なんか叫んでいた。

（うつ、頭に響く）

「もうすぐだ！後少し数をこなせば、無能な風紀委員もアイツラもみんなまとめて……吹き飛ばッ！うつせえんだよ！バカ野郎！！」
……！！！！？」

いい加減本気で頭が痛くなってきた綾峰が男子生徒を後ろから蹴り飛ばした。

男子生徒はそのまま壁に激突してごみ箱のポリバケツにつっこんだ。

「な！？一体何が……？」

男子生徒は立ち上がりながら回りを見る。

「うるせーな、さっきからごちゃごちゃと」

「……！！？
ジャツジメント 風紀委員！！？」

目の前の綾峰の腕章を見て、男子生徒は驚きの声をあげた。

「だったらどうしたバカ野郎」

「くっ。お前らが悪いんだ……！お前らが無能だから！お前らが無能だからアイツラみたいなのがはびこるんだ……！」

「……………」

綾峰は男子生徒の様子がおかしいことにやっと気がつき、男子生徒の声をスルーしつつ『能力解析』をかけてみる。

『シンクロトロン量子変速』レベル2。

(これが例のレベルの合わない犯人ってやつか)

「くっそ、無視すんなよ!!!これでも喰らえ!!!」

そう、レベル2…のはずなのだが。

おかしい。と綾峰は違和感に気がつく。

男子生徒が手にアルミ製のスプーンを持って能力を発動した瞬間、どこからかAIM拡散力場が集合して、男子生徒のレベルが2から3、3から4へと急激に上昇していく。

(…って、ヤバっ。こんなところで爆発したら……………)

綾峰の背に嫌な汗が垂れる。

『能力解析』!!!

一気に相手のAIM拡散力場を解析し、それを即座に逆位相に書き換える。

『AIMジャミング』!!!

綾峰の能力が発動と同時に、男子生徒の『量子変速』のスピードを

下げていく。

しかし、完全に止まるには至らない。

（急激なレベル上昇に『AIMジャミング』が追いつかないのか！
？）

既に他の能力を使う余力は綾峰にはない。

そして、一気にスプーンがひしやげ。

（爆発する！！？）

次の瞬間、再度爆音が現場に轟いた。

七月十八日 四

1度目の爆発は洋服店「セブンスミスト」の内部でのことだった。だが、誰もが予期しなかった2度目の爆発はすぐ近くの路地裏で起こった。

悲鳴をあげるもの。

なんだなんだとやじ馬根性をみせるもの。

慌てて駆け寄る風紀委員達。

彼らの目の前には信じられない光景が広がっていた。

路地の中には爆風によって吹き飛ばされたのか生ゴミや瓶などのゴミが散乱していた。

そして、その中心には、

とある科学の事件トラブルメーカー体質第7話

『やっと目覚めたのですね、ユタカ。ロトの血を引く者よ』

なんだお前は!?

『私はアルス。お前の先祖だ。どうだ?ロトの血の力は!?!』

なるほど、これは確かにすごい力だ。

『行け、ロトの血を引く者よ。かの魔王を倒すのだ!?!』

だが、断る!!

という妄想をした頃が自分にもあ(r)y
本当に一瞬のことだった。

実際には綾峰は今だに爆弾をどうにもできていない。

綾峰が唯一できることとしたら、『AIMジャミング』により爆弾の威力を最低限に落とすことだけだった。しかし、それも自信がなかった。なにせ、相手の力はレベル4。しかも綾峰は先ほどの戦闘で演算能力はがた落ち、途中で断続的に起こる頭痛が集中力を削いでいた。

(こりゃ、駄目だな)

綾峰はそう思った。
そして、

(そっぴゃ、白井には散々迷惑かけたなあ)
と思った。

「まったく、これだから後先考えない上司ってのは困りますわ」
声が聞こえた。
きつと幻聴だと思った。

「尻拭いをする部下の身にもなれってんですわ」
そして爆弾は、
遙か上空で爆発した。

「「は？」」

綾峰と男子生徒はばかんとした表情で上空を見上げる。
夕方の空に爆発した爆弾は花火というには少し味気なかった。

「へ？うわ！？ぎゃあ！！」

「風紀委員です。危険物使用及び所持の容疑で確保しますわ」

「く、くそ！！俺はどんなに頑張ってもこうやっげふ！」

爆弾を処理した風紀委員は犯人を軽々と取り押さえ、しかも気絶させた。

綾峰はやっとのことで、

「はれ？……………白井？爆弾は？」

スカートについた埃を払う白井に聞いた。

「爆弾は爆発しても影響ないくらい遥か上空に『空間移動』させましたわ」

「……………その手があったか」

「その前に何か言うことがあるんじゃないのですの？」

胸をはりながらも口を尖らせた白井が綾峰に言う。

綾峰はそんな白井に苦笑しつつ、言った。

「ああ、わりい。後任せた」

「へ？」

そのまま倒れ込む綾峰。

既に限界を超えてたりしたのだ。

「ちよ、ちよっ、ちよっ綾峰せんぱっ……きゃあっ」

そして倒れ込む綾峰を支えようとする白井だったが、体格の違いでそのまま下敷きになって倒れてしまった。

そこに先ほどの爆発で近寄ってきたギャラリイ達。

同じく駆け寄ってくる風紀委員達。

もちろん、彼らの視線は一点に集中する。

それはもう、恋人のように抱きあっている（ように見える）白井と綾峰に。

あまりのことにパニックだった白井は『空間移動』もできずに綾峰の下敷きになるしかなかったのだった。

「あ、あの。白井さんっててつきり御坂さんにしか興味がないのかと思ってたんですが……その、昼間から大胆ですね」

「ち、違いますわー！！って初春！？下敷きになっただけですから！本当に！って何ですの、その微笑みは！？早く助けなさいですのー！！！」

「むっ。……………」

綾峰は見知らぬ天井を見ながら目を覚ました。

一瞬自分に何が起きたのか、思い出せずパニックを起こしかけたが、すぐに能力の使い過ぎで倒れたことを思い出した。

(そう言えば、何故か夢の中で土御門や青髪ピアスが「ようこそ、仲間よ」とか言ってたけど何だったんだ?)

回りに引かれているカーテンを見ると、あの後病院にでもかつぎこまれたのだろう、既に日が下りていて暗くなっていた。

頭の動きはまだ鈍いが、演算能力も少し休めば回復するだろう。

そこまで考えて、初めて枕もとに誰かいることに気がついた。

枕の左側から寝息が聞こえた。それもすごく穏やかな。

体がまだだるく動かせないので綾峰は首だけを横に向ける。

そこには白井の寝顔があった。どうやら看病しているうちに眠ってしまったらしい。

しゅばつという音が聞こえそうな勢いで首を反対方向に向ける綾峰。その頬はすこし紅潮していたりする。

(な、なんで白井がここにいるんだ!?)

初めはパニックっていた綾峰だったが、次第にこんな反応すれば逆に意識しているようで、それこそアイツラの仲間ロコンじゃないかと気がつく。

深呼吸をすると体を起こし、ベッドの左側で椅子に座りながら綾峰のベットで寝息を立てる白井の頭に手を乗せた。

「……う、みゅう」

少し反応するが、疲れているのだろう、起きなかった。

「ありがとな、白井。助かった」

そう言って白井の頭をなでる。

その時、入り口で何かが落ちた音が聞こえた。

「？」

振り向くと、そこには上条と御坂と初春がいた。

初春の足下にあるのは、たぶんお見舞いの造花だろう。

「……」

無言になる四人。

とても気まづかった。

綾峰は単に感謝しているだけだ。が、どうしても何かがすごく気まづかったのだ。

その沈黙を破ったのは白井だった。

「……………大好きですわ？」

白井の寝言に空気が凍った。

決定的だった。

きつと白井のしている夢は「お姉さま」なのだろう。

だが、それは決定的すぎた。

綾峰は首を横に振る。

否定の意を示すために。

だが、3人は首を縦に振り、優しい笑顔で去っていく。そそくさと。最後に御坂が扉を閉めながら止めを刺した。

「お邪魔しました」

「ちがー……う……!!!!!!」

その声は病院中に響き渡ったのだった。

七月十九日

「抑えきれなかった……」

夜中を過ぎて、月の光が漏れ入る病室の中で綾峰は1人ごちた。思い出すのは今日の事件。

”綾峰”は結局何もできなかった。

確かに『多重能力者』は初春と知らない1人の女の子を救った。でも、”綾峰”は何もできなかった。

犯人の前に立ち、犯人を抑えられる位置にいた。

しかし綾峰は何もできなかった。

確保することも爆弾を止めることも出来なかった。

あのトラブルのあと、起きた白井の手に包帯が巻かれていることに気がついた。

初めは渋っていたが何度も訊ねると、折れたのか渋々、

「爆弾を上空に『空間移動』させる際に触ったので、火傷を少ししたんです」

と頬をぽりぽり掻きながら言った。

本当に申し訳ないと思った。

幾ら白井の方がレベルは上とは言え、部下に、それも年下の女の子に守られるようでは駄目だと思った。

もっと強くなりたい。

誰にも守られなくても、いや、誰をも守れるくらいに、強くなりた
い。

そう、相手が例えレベル4であろうとも、レベル5であろうとも止

める力が欲しい。

「俺はもっともっと強くならなきゃ……」

とある科学の事件トラブルメーカー体質第8話

終業式の日、早朝、綾峰は退院した。

「もう少し休んでも良かったんだよ。一応検査入院とは言え、君が倒れて運ばれてきたことに違いはないしね」

知りあいのカエル顔の医者はそう言ったが、

「今日は終業式ですし、小萌先生に心配かけたくないのでから」

と、綾峰は断って自宅である寮に帰った。

一度帰った綾峰は身支度をしてから学校に向かった。
荷物は特に必要はないので鞆だけだ。
そしてクラスについて最初の一言は。

「「ようこそ、仲間どぶらぶあつ！！！！」

ダブルアップパーでロリコン共の肅正をし、その原因である、下手人かみじょうと殴り合った。

「止めんか！！貴様ら！！！」

そして吹寄に上条と一緒に殴られて止まる。
普通の一日だった。

終業式が終わり、各々の用事でわかれた3馬鹿トリオ（デルタフォース）のうち、上条と一緒に綾峰は街に行くことになった。

「で、どうして俺たちはっ！こんなところでっ！追いかけているのかなあ！？上条！？」

夜の街中を走りながら綾峰は隣を並走する上条に質問を投げ掛けた。

2人の後ろには数人の不良達が追いかけてきていた。

「待てやコラア！」

「ぶっ殺すぞテメエ！」

「血祭りだオラア！」

しかもご丁寧に脅し文句も不良っぽい。

「何て言うかつ！そのつ！不幸だーっ！！」

「つーか、お前っ！不幸って言えばっ！済むって思ってたないっ！？
明らかにあれはっ！お前のせいだーっ！！」

それは上条というよりも、タイミングが悪かったのだと言わざるおえないだろう。

一学期の終業式を終えて、翌日からはもう夏休み。

夏休み突入だぜえ！というハイテンションな中、はっちゃけてしまった2人は本屋で明らかに地雷としか見えない表紙のマンガや本を買い、夜は退院祝いに夕食しようぜっ！オツケー！よっしゃー！ひやっほーい！という会話をした後、街に繰り出したのだ。

目茶苦茶なノリで適当にファミレスに入った（特攻した）2人はもはや地雷というよりも客をおちよくってると思えないイカ墨入りラーメン風納豆カレーライスなる料理とドリンクバーのセットを頼み、さすがにあまりのテンションの高さに疲れてきた綾峰はジュースでも飲んでまたテンションをあげようと席を立った。

そこで、どんなジュースの配合にするか悩んでいる内に店内が騒がしくなってきたことに気がついて、綾峰は騒ぎの方を見ると、

上条は席を離れて不良たちと口論しているところだった。

横には御坂、そして少し離れた席で白井が魂の抜けた表情でぼかんとしていた。

「何だ、あれ？」

仕方なく、仲裁でもしてやるとするかと思って、上条用に混ぜたコーヒーとコーラの初心者用絶望ブレンドを持ちながら傍にいくと、不良たちの仲間がトイレからぞろぞろと出てきた。

「……………メンドクセー」

と言ってその場を離れようとした綾峰を見た上条が黙ってればいいものを、

「おい、綾峰！逃げるぞ！」

と声を掛けたのだ。

瞬間、逃げ出す上条。

そして残った不良たち（9人程）の視線がコップを持った綾峰、1ヶ所に集中する。

「……………メンドクセー」

綾峰は全速力で上条を追いかけ始めた。

どうやら上条はさきほどのハイテンションのまま、あの不良たちを
”救い”たいらしい。

「だってあいつらあのまま放っておいたら、絶対あのビリビリにや

「られるんだぞ！」

「まあ、そりゃそつだろつけど……………」

（だからって、この逃走術はどうかにならないのだろうか？）

上条の言う逃走術は至って簡単で、

「相手の体力がキレルまで追いつかれず、逃げ切らず、走り続けること」らしい。

綾峰は一応風紀委員として訓練を受けているし、自分でもよく鍛えるので苦ではないが。

一つ、この逃走術の最大の間違いに気がついてた。

（あ、1人、次は3人いつぺんか。そんで次は2人、あ、2人やられて、ラストも終わったな）

綾峰は頃合いだと見計らうと途中で足を止めた。

「はあっはあっ。おい上条……………もういないぞ」

「はあっはあっ。追手がいなくなった？捲いたか」

「いや、違う……………ッ！上条！右手を前に出せ！！」

「へ？」

瞬間上条に向かって一陣の光が走り、綾峰の言う通りに出した上条の右手がそれを防いだ。

上条の右手から少し溶けたコインのような物が落ちた。

「はあ、上条。さっきのお前の逃走術の最大の間違えを教えてやる。

追手自身に追手がいたら意味が無いことだ」

「はあ、何やってんのよ、アンタら。不良守って善人気取り？」

そうやって出てきたのは御坂 美琴だった。

後ろには白井の姿も見える。

「やっぱバレてたか……後ろの奴らが追ってこないのは……？」

「うん、私が焼いと（やつと）いた」

当たり前のように言う御坂に綾峰と上条はため息を吐く。

「俺らがせつかく……」

「ったく、アンタらのせいで情報逃しちゃったじゃない」

「「情報？」」

上条と綾峰の声が八モる。

「綾峰先輩には私が説明しますわ」

そう言っつて綾峰の背後に現れた白井がそのまま綾峰を掴んで『空間移動』する。

気がつけば、橋からかなり遠い位置まで運ばれていた。

「んで、情報って何だ？」

「綾峰先輩は『幻想御手』^{レベルアップ}っていうものをご存知ですか？」

「『幻想御手』？何だそれ？」

「使用者のレベルを急激に上げることができるといいうアイテムらしいのですが、佐天さん、初春のご学友の方がそういう都市伝説があると言っていました。」

「使用者のレベルを急激に………上げる？」

綾峰の脳裏に何かがひっかかった。

それは昨日のレベル2が急激にレベル4へ上がったこと。

能力を使う瞬間だけレベルがあがる、まるで何かアイテムを使っているようにも感じられた。

(あれは、『幻想御手』によるものだったんじゃない………)

「それで、その実体を調べる為にあそこでおとり捜査してたのか？」

「……………はい」

白井の声が小さくなる。

本来おとり捜査など許されるものではない。

しかもそのおとり捜査に一般人である御坂を巻き込んだのだ。

綾峰は苦笑して、こつん、と白井のおでこを突いた。

「ッ!?!」

「はい、オシオキ終了。次回は気をつけるように」

「……………良いんですの?こんなんで?」

おでこを抑えながら白井が訊ねる。

「あの不良達はかわいいそうだったが、結局御坂も無事だし、それに昨日の貸しもあるからなあ」

「貸し?ってあれは当然のことをしたままですわ!」

そう言っつて口を尖らせる白井の額に綾峰は手を載せると、

「良いの良いの。っーか、怪我させちまって悪かったな。でも、おかげで助かった。ありがとう」

笑顔で感謝の言葉を言った。

「……………ッ!?!」

白井の顔が一気に赤くなる。

瞬間、凄まじい轟音と共に周辺の電気が一気に消えた。

「んなっ!?!なんだ、これは?」

「……………」

驚いた綾峰が声をあげるが、白井から返事はない。

「……………」白井？

「…お、お姉さまがきつと雷でも落としたのでは？」

慌てたように返事をする白井に、綾峰は不幸な友人の冥福を、

「まあ、適当に帰ってくるだろ」

祈らなかった。

いつものことだ。

「んじゃ、俺は帰っかな。はあ、メンドクセー」

白井の額に置いていた手をどかし、綾峰は寮の方に向かって歩き始めた。

「あ、そう言えば結局夕飯食べてねーな。どうしよう」

「あ、あの、だったら私がなにかごちそうしましょうか？」

「……………」へ？

暗闇の中で見えないが、綾峰は驚きのあまり変な顔をしていた。

「え、えっと別に他意は無いのですわよ！お姉さまのおとり捜査

で結果的に綾峰先輩の夕飯の邪魔をしてしまったようなものですし……よく日頃から奢ってもらってますし……」

白井がしどろもどろになりながら言つと、

「いや、流石に後輩に奢ってもらう程俺も落ちぶれてはいないつもりなんだが……」

「はあ、相変わらず妙な所で義理堅いんですから。じゃあ、何か私が料理を作つて差し上げますわ」

「……………お前つて料理できたんだ…そっちの方が驚きだ」

「なっ！？私だつて簡単なものぐらいなら出来ますわよ！」

綾峰の軽口に白井はつい、いつものように反論する。

「あ、ああ。わりいわりい。んじゃごちそうになるとしますかね」

「はい？」

綾峰の予想外に素直な言葉に白井は固まった。

なんだかんだで断られるとばかり思っていたので完全に予想外だったのだ。

「え？いや、だからご馳走してくれんだろ？あ、でも料理作つてもらうだけじゃ悪いし、何か作るの手伝つてやるよ」

「え？」

「うん、こつ見えてもけつこつ前から1人暮らししてっからな。いくつかレシピも教えてやる」

「は、はあ」

「あー、でもそつちの寮は男子禁制だったよな。んじゃ、うちの寮来いよ。食材ぐらいは残ってんだろ」

とんとん拍子で進んでいく話に自分で提案しておいて白井は置いてかれつつあった。

「あ、つーことはこの停電で冷蔵庫止まってる!?!?あーメンドクセー!。よし、白井急ぐぞ!」

「は、はい」

(ええええええええええええええええええええええ!!?)

白井は心の中で悲鳴をあげていた。

七月二十日 巻

数ヶ月後、学園都市のどっかの場所。

綾峰は目の前の光景に唾然としていた。

そして、やっとのことで一言、

「へ？」

変な声を出した。

白井は頬を赤く染め、先ほど言った言葉を繰り返す。

「だから、2ヶ月目だそうです」

白井のお腹は既に中学生としてあり得ない形状をしていた。

つまるところ膨らんでいるわけだった。

それも太ったとかそういう原因ではない。

新たな生命がそのお腹に宿っていた。

綾峰は決心する。

責任取らないとな…と。

「っていう夢を見たけど、絶対他人に言えるわけねーだろ！コンチクシヨー！！」

とある科学の事件トラブルメーカー体質第9話

「いや、おかしいとは思ったんだ。だって2ヶ月だつてのに明らかにあれは6ヶ月とかそこら辺の大きさだよ。ていうか、白井とそんな仲じゃねーっつーの。あれはどちらかっつーと妹だ。妹。うん」

あまりに衝撃的過ぎた夢の内容にいつまでも引きずってしまってい

た綾峰は朝食を食べながらも独り言を漏らしていた。

「はあ、メンドクセー。なんであんな夢を？というか昨日夕飯に呼んだからか？」

（確かに、あいつの料理が意外とイケたのは否定しないが……はあ、メンドクセー）

まだ朝なのに既にげっそりな綾峰だったりする。

昨夜の停電のため冷蔵庫が使えないので、保存食を買いに行くことにした。

近くのスーパーにでも行こうと決める。
学生服に着替えて綾峰が外に出ると、何か銀髪のシスターと出会った。

「……………」

「こんにちは」

「へ？あ、ああ。こんにちは」

どう見ても外国人であるシスター少女が普通に日本語を話しているのに驚いて綾峰は一瞬戸惑いながらも挨拶を返した。

「えっと、何してんの？」

綾峰としてはあまりこういった宗教な人とは関わりたくはなかった

が、そのシスターが清掃ロボットの上に乗ってそれをポコポコと殴って話しては別だった。

「とうまと話してたら、私のフードがこのアガシオンに食べられちゃったんだよ。どうしよう。てかどうすればいい?」

とうま「当麻なんだろうなあと考え、またあいつどつかでフラグ拾って来やがったかと腹が立ち、綾峰は盛大に舌打した。

「えつと、えつと、何か私悪い事したかな?ていうかいきなり舌打はかなり怖いかも」

「あ?ああ、わりい。シスターさんにしたわけじゃないよ。単に有効フラグが大量にあるくせに一つも回収しないどころか更に溜め込んでる馬鹿がいるからさ、つい」

「フラグ?旗を集めてるの?」

「いや、あんま気にしないで。んで、フードってどれくらいの大きささ?」

「え?えつとこれくらいかな」

そう言っつてシスターが手で示したのは結構な大きさだった。

「ふーん。それぐらいの大きさだとしたらこいつは食わないと思うよ。ある程度認識してるはずだし。どっか、別のとこに落としたいんじゃない?」

「そうなの?じゃあ、どこだろ。とうまの部屋かな。でもとうま出

かけちゃったし……」

同棲中なのか？同棲中なのかよ？と心の中でつつこみ、仕方なしに綾峰は提案する。

「あるいは風で飛んでったのかもよ？あいつが帰ってくるまで探してみるのも手じゃないか？」

「うーん、そうだね。そうするよ。ありがとう」

「どういたしまして。それにしてもシスターに知りあいがいるなんて上条も隅におけないな」

「へ？とうまのこと知ってるの？」

「あー、同級生だからな。俺は綾峰あやみね。唯鷹ゆたか。君は？」

「私は、インデックスっていうんだよ」

「ふーん。面白い名前だね。それじゃ、俺はこれから買い物があるから。またな」

「うん。ありがとね。ゆたか。ばいばい」

そして、インデックスと別れた綾峰は思い出す。

彼が昔読んだ”物語”を。

(確か、あの物語の始まりは上条の家にインデックスがやってくることから始まるんだよね……)

考えながらエレベーターのボタンを押して、更に思考に潜っていく。

(そして最後に”上条”は死ぬ、か。ふう、メンドクセーけど。こっちもどうにかしねえとなあ。俺的には”上条”には死んで欲しくねえし……って今日も早速戦いがあるんじゃないかなかったか？あー、もうもつとしっかり読んどきゃ良かったな。確か上条が三日間寝続けるってことがあって、あいつが目覚めた日の夜中が最後だったか？)

ちつと綾峰は舌打をする。

なまじつか”知っている”がためにどうすればいいか迷う。

どこまで介入するか、ということにだ。

そこまで考えて、やっと来たエレベーターに乗ると、ため息を吐いた。

(どちらにせよ。最後は”全員”が笑えるエンドが良い。)

誰かが犠牲になるのではなく、誰もが笑うそんな終わり方。

原作では、上条は”皆”を幸せにして物語を終えた。

己を含めない”皆”を。

だからこそ、綾峰は決めている。

その”皆”を”全員”に変えるということを。

だからこそ、確実に変えるのか。

それとも初めから変えてしまうのか。

そのタイミングを計りかねていた。

「綾峰せんぱーい！」

スーパーに向かって歩いてしていると聞きなれた声があった。回りを見ると、道路の反対側から初春がこちらに向かって手を振っていた。

綾峰は手を振りながら信号を渡ると、声をかけた。

「よう、初春か。風邪の調子はどうだ？良くなったか？」

昨日、初春は風邪で寝込んでいたと、白井に聞いていたのだ。

「はい、おかげさまでだいぶ良くなりました」

「つつても俺は何もしてねーがな。んで？そっちは同級生か？」

「は、はい！私わたし佐天 涙子なみこって言います！」

突然話を振られてびっくりしたのか佐天は元気な声で返事をする。

「そか、それじゃ、俺はこれで」

綾峰がそう言って買い物に戻ろうとすると、

「ま、待ってください。私見せたい物があるんです！」

佐天が綾峰の腕を掴んで待ったをかけた。

「へ？俺に？何を？」

突然のことに綾峰は驚く。

「ふっふーん。それは茶店についてからの楽しみですよ」

そう言って佐天は返事も待たずにレッツラゴーと言いつつ先に歩いて行ってしまった。

「はあ、なんつーか、行動力のある子だな」

「はい、私の親友です」

初春が嬉しそうに言う。

「そいじゃ、行きますか」

そう言って綾峰は初春達についていった。

(どうせ、夕方まではまだまだ時間あるしな……)

喫茶店に行くと、佐天が窓にひつついた。

どうやら知りあいがいたらしい。

「綾峰さーん、初春。見てみて、御坂さんと白井さんだよ」

「ッ！ー！」

「あ、ホントですねー」

白井という言葉に綾峰はつい今朝の夢を思い出してしまう。

(何かもう一人いるけど女性だし、いざらそうだから俺は帰るかな……)

「後は、あいつらに任せ」あ、こっち気付きましたよ!」……はあ、メンドクセー」

そう言って綾峰がうなだれる横で佐天は中の2人に手を振っていた。

「私は木山きやま 春生はるのみ。大脳生理学を研究しているものだ」

「あ、どうも初春って言います。白井さんとは風紀委員の同僚です」

「おなじく、風紀委員でこの2人の上司やってます、綾峰です。よろしく」

「うむ、ヨロシク」

そう言って木山は眠そうな表情で頷く。

結局、6人で座ることになっていた。

順番は、窓から御坂、初春、綾峰、反対側は佐天、木山、白井だった。

初春と佐天の前にはパフエが置かれ、綾峰の前にはアイスマルクテ
イが置かれていた。

「それにしても何で脳の研究者なんかと話してたんだ？白井の脳に
何か問題が！？」

「可愛いそうに、白井さん」

「先生！！うちの白井は大丈夫なんですか！？」

「残念ですが、綾峰さん。白井さんは先天性お姉さま病にかかって
います」

「そんな！？どうにかできないんですか！？」

「残念ですが…現代の学園都市全部の科学力をもってしても……」

「っていきなり失礼ですわね！？『レベルアップ幻想御手』の件で相談してまし
たのよ！！！」

綾峰と初春が始めた漫才に白井がキレる。

「何かわかったのか？」

「いえ、それがまだ何も……」

「あ、それなら私「ただ、『レベルアップ幻想御手』の所有者を搜索して保護す
る事になると思われませう」……」

「……何かあったのか？」

「まだ調査中ですのではつきりとした事は言えませんが、使用者に副作用が出る可能性があること、そして急激に力をつけた学生が犯罪に走ったと思われる事件が数件確認されているからです」

「まああれだけの力だからな。副作用があり得なくはないか」

綾峰は先日の『量子変速』のことを思い出してぼつりと言った。ふと、初春は佐天の動きが止まっていることに気がついた。

「……？佐天さん。どうかしました？」

「え？あ、いや何でも…ああ！」

いきなり話しかけられて驚いたのが、佐天は手で木山のアイスコーヒーの入ったコップを倒してしまった。そしてアイスコーヒーはそのまま木山のストッキングにかかってしまった。

「わー！す、すみません！！」

慌てて拭くものを捜す佐天だが、それにたいして木山は、

「構わないよ。かかったのはストッキングだけだし、脱いでしまえば…」

「ぶっ！！」

いきなりストリップを始め出した。

「だーかーらー！！人前で脱いじゃダメだと言ってますでしょーが！！」

それを白井が叫んで止めさせる。

「し、しかし起伏に乏しい私の肢体を見て劣情を催す男性がいるとは……」

「趣味思考は人それぞれですのっ！それに殿方で無くても歪んだ情欲を抱く同性もいますのよ！」

「女の人が公の場でパンツが見えるような事しちゃダメですっ！」

(それお前らのことじゃん)

某レベル5と某花畑が心の底からシンクロした瞬間だった。

「……………」

「って、綾峰先輩もいつまで見てるんですか！！鼻の下が伸びきってますわ！！」

(いや、仕方ないんだ。これは仕方ない欲求なんだよ、白井)

そう、男には黙って見なければならぬ時がある！！(カッ

「知りませんわ！！」

「すいません、ありがとございませぬ。そしてさようならああああああああ！！」

居心地の悪さにつわー、と綾峰は一気に駆け出してファミレスを出ていった。

「……………私は特に気にしないのだが」

「「そういう問題じゃないです!」「」

数分後、綾峰がダツシユで戻ってきた。

そして、テーブルにミルクティ代のお金を置いていくと、またつわーと言いなから駆けていった。

意外と細かい綾峰だった。

七月二十日 貳

(戻ら…な…きゃ)

チン、とエスカレーターが目的の階に着く。

少女は”文字通り”全身を切り裂かれたような痛みを味わいながら、よろよると歩いていく。

3台の清掃ロボットが少女の歩く跡を従者の如く着いていく。

(取りに…行かな…きゃ…)

少女は力つき、倒れる。

その回りに広がっていく赤い液体は少女の血。

清掃ロボットは広がる”汚れ”を清掃する。

徐々に力を失っていく少女の瞳は、すぐに光りが無くなっていった。

少女の背に影が差し込んだ。

綾峰が寮に着いたのは陽が落ちる少し前のことだった。

上条の部屋と同じ階にある綾峰の部屋は陽の沈む直前の赤い光が壁を赤に染め上げていた。

そして、床を赤く染め上げていたのは今朝会ってほんの少しだけ話をした少女の血だった。

インデックスが倒れていた。

だが、回りにはまだ上条もステイルも到着していない。清掃ロボットがたむろっているだけだ。

心なしかインデックスの顔色もまだ赤く、生気があるように見える。それでも切り裂かれた傷痕と、それに沿って切れている銀髪があまりにも痛々しい。

綾峰はとりあえず3体の清掃ロボットのスイッチを切り、端にどける。

清掃ロボットがいなくなったからか、インデックスの血溜まりが徐々に広がっていく。

その姿があまりにも悲しく、

「なんで、こんなことに……………」

ならなきゃいけないんだ、と綾峰は呟いた。
当然、インデックスは返事を返さない。

「まあ、斬ったのは神裂なんだけどね」

「ッ……！」

だからその声はインデックスの物ではなかった。
綾峰が振り返ると、身長2メートルはありそうな大男がいた。
髪は赤く、神父のような修道服を着ているが、ファッションはあまりにも神父らしくない。
甘ったるい香水の匂いに、口にくわえた煙草、指輪やらピアスやらのアクセサリーで着飾った男の顔は、意外と若く見えた。
どうやら原作でいうスタイル＝マグヌスらしい。

（あれ？何でこの人もう登場しちゃってんの？上条まだ来てないよ？）

「そこをどいて貰えるかな？それを回収したいんだけど」

（まさか、俺が来たから？俺が来たから登場しちゃったの！？ちょっとおおおおお！！！？）

「おい、ジャップ。聞いているのか？僕はどけて言ったんだが？」

（あー、もう。メンドクセーなコンチクショー。時間稼いでやるからさっさと来やがれ上条！！）

「聞こえてるよ。ロリコン野郎」

「……………は？」

どうやら、よく聞こえなかったようだ。

「聞こえてるつつつたんだよ！ロリコン野郎…いや、ロリコン神父」

「訂正するところはそこじゃないだろっ！第一、彼女と僕は同じ年だ
！！」

予想外の言葉だったらしく、ステイルの顔は赤くなっている。

「いやいや、どう見ても彼女12歳前後だよ？胸的に。それに比べ
て君ってどう見ても20代は行ってるよね？背格好的に」

「もう一度だけ言うぞ。どけ、ジャップ」

どうやらロリコン神父はキレたようだ。意外に背が高いことを気に
していたのだろうか？それともインデックスの胸のことを言ったか
らか？

「さすがに、そんな妖しさ満点の男にこんな重傷少女を預けられな
いね、そう思うでしょ？ロリコン神父さんも」

「なら、もういい。死ね。僕の名はForti「ハイハイ、カルシ
ウム足りないね！」っ！！」

喋っている間に一気に近づくと顔面を狙って殴りにかかる。

ステイルは間一髪でそれを避けたが、此方の急襲に驚いたのか一気
に間をあける。

「口上も聞かない気かい？」

「ロリコン神父の口上なんて興味ないし」

綾峰の言葉にステイルは苦々しい表情になる。

「うち、なんなんだよ？君は？それに僕はロリコンじゃない！」

「俺？ただの一般生徒だよ？あー、まあ一応シャッジメント風紀委員っていう学生の自警組織には入ってるけど。うるせーよ、ロリコン神父」

「だったら入ってくるなよ。これは僕たちの問題だ。それに僕には、ステイル」マグヌスって名前があるんだよ！」

「そうも言ってもらえないんだよ。友人がきつとこれを見たら」死ぬ程怒るだろうからさ」

「もういい。口上もなしだ！」

そう言つてステイルは口にくわえていた煙草を手にとり、横合いに投げ捨てる。

煙草はオレンジ色の軌跡を残して飛んでいく。

「炎よ」

ステイルが呟いた瞬間、軌跡は爆発し、ステイルの手に炎を固めて作ったようなオレンジ色の剣が現れる。

炎は回りを焦がす間もなく、溶かしていく。

「巨人に苦痛の贈り物を」

ステイルは剣を振り上げ、そのまま綾峰に向かって振り下ろした。灼熱の炎剣が綾峰に降りかかり、触れた瞬間に爆発した。熱波と爆炎と閃光と黒煙が吹き荒れた。

「少し、やりすぎたかな」

呟くステイルの目の前は黒煙によって視界が塞がれ、何も見えなかった。

しかし、今の一撃は摂氏3000の炎の地獄だ。見ずとも、結果は決まっている。

「殺すつもりはなかったんだけどね。どけと言って聞かなかった君が悪い」

「ハツ。技モ陳腐ナラ、台詞モ陳腐ナノカ？ロリコン神父」

返事などないはずのステイルの言葉に擦れたような声が返事をした。しゅばつと、風が吹き荒れるように一気に黒煙が消えていく。

そこには灼熱で溶けて、再度固められた床の上に立つ、黒仮面の男がいた。

「なるほど、君は能力者か。それにしてもさっきのは3000の爆炎だったんだけどね？どうやって助かったんだい？」

「言ウト思ウノカ？」

「それもそうだね。じゃあ、今度は「な、なんだこりゃあ！！」！？」

ステイルが第三者の声に驚いて振り向くと、黒髪がツンツンに逆立った少年がエレベーターホールに立っていた。

そして、少年の視線が一点に向かう。

「『多重能力者』？それに、インデックス！？おい！インデックス？返事しろ！」

血まみれのインデックスをかばうように立つ『多重能力者』に上条は慌てて駆け寄ろうとする。

「させな…くっ！」

ステイルはそれを防ごうとするが、黒い物体によって邪魔をされ、上条をそのまま通してしまう。

上条は『多重能力者』の横をすり抜け、そのままインデックスに駆け寄る。

上条は揺り起こそうとするが、インデックスの体が血まみれであることによりやく気がついたのか、怒りに顔を歪めて、

「誰が！こんなことやったんだよ！？」

叫んだ。

「アイツノ仲間ラシイヨ、上条」

『多重能力者』の言葉に上条はステイルを見る。

「そつだよ。僕達『魔術師』がやったけど？」

上条はステイルの雰囲気にもまれたのか、睨んではいるが黙っていた。

「それにしても、よくよく見ると酷いもんだね。神裂の刀に血がついてなかったから安心安心と思ってたけどねえ」

ステイルは先程までとは違い、調子を取り戻したのか、高圧的な口

調で上条を揺さぶっていく。

「けど、何で？」

「うん？彼女がここまで戻ってきた理由かな？さあねえ、何か忘れ物でもしたんじゃないのかな。そう言えば、昨日撃つた時には被っていたフードがないけど。いったい「Pr r Pr r Pr r Pr r Pr r Pr r Pr r」どこ…で……」

携帯が鳴り響いた。

「「……………」」

Pr r rカチャ、と『多重能力者』が懐から携帯を取る。

「スマナイ。携帯がマナーモードニナツテイナカッタヨウダ。ワタシハ席ヲ外スノデ続ケテクレタマエ」

言い終わった瞬間、『多重能力者』は『空間移動』で消えた。

「……………こほんっ。いったい彼女はどこでフードを無くしたんだろうね」

2人は何事も無かったように会話を進めることにした。

P r r P r r P r r P r r カチャ

「はい」

『あー、急に電話して悪かったじゃ「空気読んでください」ん……
「？」

『どうしたんじ』「空気読んでくださいって言うてるんです……す
まなかつたじゃん」

「今度から黄泉川さんは黄泉川よめなかわさんって呼びますね

『それって逆に呼びにくいじゃん!?!?』

「じゃあ、良いですよ。ヨメナイさんって呼びます」

『じゃあつてなんなんじゃん!?!?それにもう私の名前の原型ないじ
ゃん!?!?!?』

「良いから、さっさと仕事の内容教えてください。OKKYさん」

『OKKY!?!?それってQueen of KYって事じゃん!?!?!?』

「いえ、『いつそ空気になれば良いと思います』の略です」

『OKKY関係ないじゃん!?!?!?』

綾峰の八つ当たりはもう少しの間続いたらしい。

同僚の話では黄泉川は数日へこんでたとか、いなかったとか。

おまけ

「月詠小萌とー!!」

「姫神秋沙のー」

「教えて!!!小萌センサー!!!」

「はい、それじゃ第10話を記念した新コーナーがはじまりましたー」

「司会是小萌先生。私が助手」

「このコーナーはー、本編には出る可能性があまりにも低い先生と姫神ちゃん成分を読者の方に補給してもらったためのコーナーなので

すよー」

「知らなかった」

「さつき先生もそれを聞かされて枕を濡らしてきたところですよー」

「私も濡らしてくる」

「はい、涙を流す前に仕事するですよー」

「うう。それで？今回は何を教えるの？」

「はいー、今回は先生の受け持つてる生徒の綾峰ちゃん的能力『能力解析』について説明するですよー」

「私。綾峰に直接会ってないから知らない」

「そうですねー。でもでも先生はそんな姫神ちゃんも分かりやすく教えるので安心してくださいですよー」

「うん。わかった」

「まず、綾峰ちゃん的能力の名前は『能力解析（AIMリーダー）』って言うんですよー」

「ふむふむ」

「綾峰ちゃん的能力は、名前の通り他人の能力をAIM拡散力場を通して解析する能力なんですー」

「解析？つまり？」

「ようは、「ムツ、能力者の気配がするぞ」「ムツ、奴の戦闘力は530000だな」といった少年マンガよろしくな探索もできるのですよー」

「それだけ？」

「ふっふっふー。それだけじゃないんですよ。なんとなんと綾峰ちゃんの能力はA I M拡散力場を解析するだけでなく、”干渉”することもできるのですよー」

「干渉するとどうなるの？」

「本来はあらゆる能力を打ち消すことができるですよー。でもでも綾峰ちゃんはまだレベル3なのでできて同レベル以下の能力を打ち消すか、レベル4以上の能力を1〜2ぐらいレベルを下げることはできないのですよー」

「それじゃ。もし綾峰がレベル5になったら？」

「推測の域ですが、レベル5の能力者1人相手なら、能力も打ち消せると思いますよー」

「なんか。上条の2番煎じっばいかも」

「ですねー。でもでも綾峰ちゃんの場合は能力を打ち消せるのは右手だけじゃないですー」

「それに。まだ何か隠してるかも」

「そうですねー。綾峰ちゃんは結構秘密主義なところがありますか
らー」

「あ。小萌先生。そろそろ終わりの時間」

「はい、それじゃあまた次回ですよー」

「というか次回ってあるの？」

「それは読者の皆様の反応しだいですよー」

「うう。これが。影の薄いヒロインの末路」

「とにかく、また次回なのですよー」

「質問。」「指摘。」「指南はいつでも。お願いします」

「「さよーならー」」

日十二月七 巻 【置き去り編】

わたしが学園都市に初めて来たのは5才ぐらいの時だったと思う。
おとーさんに連れられて来た。

わたしの家族はおとーさんとおかーさんが喧嘩して別れたので、お
かーさんはいなかった。

おねーちゃんもいたけど、おかーさんと一緒に行ってしまった。
でもおねーちゃんとは携帯のメールで連絡をとってたから、寂しく
はなかった。

幼稚園の子たちとはすぐに仲良くなれて、たくさん友達ができた。
毎日が楽しかった。

毎日が幸せだった。

だから、ツケが来たんだと思う。

おとーさんがいなくなった。

わたしを学園都市に入学させた後、行方をくらませたらしい。

それを聞かせにきた黒い服のおじさんは、そのままわたしを別の幼
稚園に移動させると言ってきた。

そしてあれよあれよという間にわたしは気がつけば、

モルモットになっていた。

第一〇学区。

夜に紛れるように綾峰はいつもの仮面と黒合羽の姿になっている。だが今日の綾峰にはやる気なんてものはなかった。

なにせ、今日のターゲットは置き去りではないのだ。

どうやら研究者を1人捕まえねばならないらしい。

なんでも、普段黄泉川に置き去りの情報をリークしている相手の1人が頼んできたらしい。

このターゲットがどうやら実験費を横領したとからしいのだが、逮捕するにはかなり学園都市の裏側を知り過ぎてしまっているらしい。そこで綾峰が捕まえてこの研究者を特定の場所まで運ばねばならないらしいのだが。

「メンドクセー」

つい、本音が漏れてしまう。

今日はいきなりストリップし出した木山博士から全速力で逃げ出したり、上条が来るまでインデックスを守る為にロリコン神父と戦闘をしたり、KYな黄泉川を相手に憂さ晴らしをしたりわりかし大変だったのだ。

その上で更にこの任務がこのさえないおっさんを捕まえる仕事とは

……。

綾峰は手元にある端末を見る。

そこにはどこにでもいそうなおっさんの写真が映り、横に「蛇縞^{へびしま}」と書かれていた。

研究内容は「レベル限界の素質と要因」とやららしい。

詳しくは黄泉川が教えてくれなかったので知らないが、あまり良い仕事をしているわけではないだろう。

そんなことを考えているうちに綾峰は目的の研究所まで辿り着いた。

「君、ここは立ち入り禁止さっぐつアーツ!？」

いつものように電撃で相手を痺れさせる。

そして電撃を操作して警報を鳴らさないように研究所の扉を開ける。最近こういう術がだいぶ身についてきたかもしれない。

(最悪、泥棒とかで生計立てられんじゃないか……………?)

自分の将来にすこし不安が湧いた綾峰だった。

side ????

入り口の警報装置から不審者が入ってきたとの情報が入った。

どうやら不審者は入り口の扉はうまく開けたようだが、内部に

ついていた隠しカメラには気付かなかったようだ。

カメラを見ると、黒合羽の男が映っていた。

『多重能力者』だ。ついに、私のところまで来たようだ。

近年、『多重能力者』とかいう能力者が巷の研究所を騒がしているとは聞いていたが、そのターゲットは、置き去りが大量にいる研究所だと聞いていたのであまり警戒はしていなかった。

私の研究所でも幾人かの置き去りがいたが、そのほとんどは能力開発をして”検査”をするという比較的人道的なつもりだったし、きちんとした教育も受けさせている。

まあ、1人違うのもいるが………そこまで気にはしていないはずだ。

ん……………そうだ。せっかくだし、”アレ”を試してみるのも良いかもしれない。

噂を聞いて入手を試してみたが、その威力がどれほどのものかはまだ試していない。

ふむ、考えついでみれば面白い。

さっそく実験開始といこう。

s i d e o u t

端末に映し出されている見取り図をもとに綾峰は建物内部を探索していく。

蛇編は夜遅くまでいるらしく、ここで寝泊まりしていると聞いていた。

できればぱっぱと終わらせて早めに帰りたいと思う綾峰だったが、

力場を集めたものと言っている)で身を包み、衝撃を待った。衝撃は意外と早く、そして思ったよりも軽い衝撃だった。どうやら下がクッションになっているらしい。

「マツタクアトラクションか何カナノカ、ココハ？」

先ほど落ちてきた方からガタンと何かが閉まる音が聞こえる。どうやら閉じこめられたようだった。回りを見ると、目の前には少女が立っていた。

綾峰はその少女に度肝を抜かれた。

年はだいたい小学生ぐらいか。

髪は黒く、服装は手術用に患者が着るような服みたいだったが、特にこれといって不審なところはない。

綾峰が度肝を抜かれたのは、あどけなさを残している顔についた2つの目に籠っていた明確な殺意だった。

綾峰も今まで何人かと命の取り合いをやってきたことはある。できるかぎり殺しはしなかったが、不運な事故で死んでしまったものも多い。

また、そのうちの何人かは、綾峰が救うべきである置き去りが相手だったこともあった。

彼らは自由、仲間、家族など、何かしらの大切な物を守る為に心無い研究員達によって闘わざる負えない立場に追いやられたのだ。

(今回もそのパターンか?)

綾峰は体育館ほどの大きさを円形に広がった広場の中心に向かって足を一歩踏み入れた。

『ようこそ『多重能力者』。君を待っていたよ』

瞬間スピーカーから重圧的に聞こえてくる声に綾峰はがくつと肩を落としてorzという格好になった。

「ハア、スゲー二流的展開だな。モシカシテアンタ蛇縞 隼ツテ名前ダッタリスル？」

『な、なぜ！？私の名前を！！？』

(三流以下か。つーか、何？これは「綾峰の戦いはまだまだ続くぜエンド」で終了ってオチなのか？はあ、メンドクセー)

『と、とにかくそこにいる少女と闘ってもらっぞ！！』

「ヤダ。メンドクセー」

(こっちとしては、ささつとあんた捕まえて帰りたいんですが)

綾峰にとって殺し合いなんて物騒なものではできるだけ控えたいのだ。それに今日はもう疲れているのだ。面倒くさいのは綾峰は嫌いだっ

『やれつつてんだよー！！いけ！！雲雀！！』

途中からキレ気味な蛇縞に綾峰はもう半分以上やる気が無くなって

いた。
だからこそ、目の前の雲雀と呼ばれた少女の動きにたいして油断していた。

「ゲガツ!!?」

瞬間、綾峰の腹に衝撃が走った。

綾峰は竹とんぼのように吹き飛び壁に激突する。

(つく……………ああ、くつそ!合羽がなきゃ危なかったぞ。チクシヨー)

綾峰の能力によって作られている合羽は衝撃を吸収するように出来ている。

レベル2程度の能力者の攻撃なら痛くもかゆくもない。

だが、それでも、

(肋が一本逝ったか?)

綾峰の体にはダメージが入っていた。

「イッテーナ!コンチクシヨー!」

綾峰は半分やけになって叫ぶ。
すると、

「ひっ」

雲雀と呼ばれた少女はなんかびびっていた。

(あれ?意外と怖がり?)

『何をしている雲雀!!!さっさとやれっつてんだよ!!!』

スピーカーから蛇縞の煩い声が聞こえてくる。

「ひっ、っ、ごめんなさい!!」

雲雀は涙目になりつつ、綾峰の方に手を向ける。

瞬間、綾峰は即座にその場から退避した。

直後に綾峰がいた場所が凍っていく。

(あ、危なかった。AIM拡散力場の歪みを感知しながら先読みしてなきゃ、一瞬で凍ってるっての!)

雲雀は逃げる綾峰に手を向けて綾峰のいる場所を凍らせていく。

しかし、綾峰はそれを感じし、先読みして全て避けていく。

綾峰は先読みしつつ部屋の中心にいる雲雀の能力の解析を始める。

(珍しい能力だな。『運動変速』か。凍ってるのは、分子レベルで運動を停止させてるってことか。だが、レベルが2? いや3………
…4………5? だと!? こいつも『幻想御手』を使ってるのか!?)

「避けないでよ!!」

雲雀は叫び、先ほどよりも強い力を行使していく。

綾峰の回りは既に凍っている場所だらけだった。

『何をしている!!! さっさと倒せ!!!』

痺れを切らしたのか、蛇縞が雲雀に怒鳴った。

雲雀の回りのAIM拡散力場が凄まじい動きを見せていく。

「これで、おねーちゃんに会えるんですよね!？」

雲雀は喜びの声を隠せないまま蛇鱗に言う。

『は？誰がそんな事を言った？』

「へ？」

『お前の姉の居場所なんてしるわけないだろ？だいたい、本気でそれを信じてたのか？はっマジ笑えるんだけど』

「え？」

雲雀の中で何かが崩れていく。

『つーか、もうお前は用済みだから。後は、そこでお前に何の副作用もなければこの『幻想御手』を他の奴に使うだけだ』

「ま、待って！」

『あー、あとそこにいる奴は、お前みたいな置き去りを救ってるやつらしいぞ？お前は自分の味方を殺したんだ。アハハハハハハハ』

耳障りな嗤い声がスピーカー越しに聞こえてくる。

「そ、そんな……………」

雲雀は慌てて先ほど凍らせた仮面の男の運動を再開させる。
しかし、男は倒れてぴくりとも動かなかった。

日十二月七 弐(前書き)

arcadiaに掲載中のものの改訂版です。

日十二月七 式

「ふむ、やはりたまには紙媒体の資料にも目を通しておくのも良い事だな」

埃くさい部屋の中で木山 春生は数枚の資料を片手に微笑んでいた。学園都市では電子情報が基本であるため、現在はほぼ全ての資料がネットワーク上に上げられていた。

そのためこういった紙の資料は”電子情報化待ち”という名目で書庫などに保管されてそれっきりということが多い。

木山が読んでいる資料は本来探していた古い資料と共にたまたま見つかったものだった。

「やはりどこかで聞いたことのある名前だとは思っていたが、こんなところではな」

木山は資料の内容に目を通すと、一瞬物憂げな表情になる。

「なるほど彼もまた私と同じか。だが、そうなると本当に可能なのか？こんなことが。それに気まぐれの実験だとしてもこれが完成していたのだとしたら、

何故彼はレベル3止まりなんだ？」

木山は何かを考えるように目をつむる。

「いや、もしかして彼は……………いや」

そこで、木山は自分の推測を鼻で笑うと、

おねーちゃん！！
助けて！！

「おう、助けに来たぜ」

え？

誰かが、わたしの中に入ってくる。
誰かが、わたしの傍に来てくれた。
そして熱さが引いていく。

何で！？

わたしは悪い子なのに！？
なんで助けてくれるの！？

「あ？助けんのに理由がいんのか？メンドクセーな」

え？

なんで、なんで？

「それにお前は悪い子じゃねーよ、俺が保障してやる」

ああ、うれ……しい。

ありがとう、おねーちゃん……ん。

そこは、花畑だった。

本来四季に別れて咲くはずであるそれぞれの花達が色彩豊かに輝いている。

その中心で1人の少年が立っていた。

少年の名前は綾峰あやみね 唯鷹ゆたか。

綾峰の表情は穏やかで、もはや何もかもから解法された気分だった。綾峰はゆったりと散歩を楽しむように、花畑を歩く。

すると、目の前に川が見えてきた。

渡るには少し深く、されど泳ごうと思えば渡れなくもない、そんな微妙な川があった。

綾峰がそれを渡るかどうか躊躇していると、川の反対側から友人達が呼びかけてきた。

「おい、峰やーん。お前もこっちに来るぜよ」

「そつやで〜。こっちは楽しいで〜」

「そつかー。じゃあ。俺もそつちに行くよ」

そう言って綾峰は川に入っていく。

そして、徐々に深くなっていく川に比例してだんだんと川の反対側も近くなってくる。

そこへ、

「ダメだー!!!綾峰ー!!!戻ってこーい!!!」

安らかな気持ちを引き裂くような声が響いた。
綾峰は後ろを振り向くと、その人物に言う。

「どうしてだよ、上条。俺は今すごく安らかな気分なんだぜ」

「ダメだ、ダメだったらダメなんだ!!」

「そんなことないぜよ。上ちゃんもこっちに来ればわかるぜよ」

「そやで〜。ほーら、綾峰もはよおいで〜」

「ほら、友達も呼んでる、行かなきゃ」

「ダメだ!! そっちは。」

「ロリコンだぞ!!!」

途端、綾峰の腕を誰かが掴んだ。

おそろおそろ振り向く綾峰。

そこには、赤い髪の神父が立っていた。

「ほら、お前もこっちに来るんだ。そうすれば僕たちの気持ちもわかるぞ」

「そやで〜、綾峰〜。こっちに来いよ〜」

「にゃー、早くくるにゃー」

3人のロリコン達に掴まれる綾峰。

「は、放せ！俺はそつちには逝きたくない！」

「綾峰ー！！俺の手を掴めー！！」

精いっぱい手を伸ばす、上条。

それを掴もうとする綾峰だが、いかんせん3人の力は強い。

「くっ、上条ー！！」

「くっ、綾峰ー！！」

「ファイトー！！」

「いっぱいー！！」

綾峰の手が上条の手に……

「はあっ！！……はあっ！！……はあっ！！……夢か」

がばあ！！と凄まじい勢いで体を起こした綾峰は1人の友人に凄まじく感謝したくなった。

「ありがとう、上条」

「上条というのはどなたですか？」

「へ？」

突然投げ掛けられた声に綾峰は驚いて横を見た。

そこには額を赤くしながらしかめっ面をしている白井がいた。

「どうした？白井。怪我でもしたのか？」

「今、まさに綾峰先輩にやられましたわ。いきなり頭突きってのはきついですわ」

綾峰の起きた時にぶつけたらしい。

確かに綾峰も頭が痛かった。

「って、そうだ！？ここはどこ……！？」

綾峰は突然ふにっと、左手が何か柔らかい物に触れていることに気がついた。

おそろおそろ下を見ると、

「あの一、何で？俺は白井の手を握っているのです？」

もしかして自分は眠っているうちにも白井（年下の異性）の手に手を伸ばすような性癖をしていたのか！？と不安になる綾峰だったが、

「そ、それは……その……私が握ったんですわ」

「へ？」

白井の答えは完全に予想外だった。

確かに言われてみれば手を離しても白井が握っている。

「えっと。これは？」

「その、綾峰先輩が……うなされていて、つい」

「し、白井……」

「綾峰先輩……」

2人は見つめあって……

「やつほー。担ぎ込まれたって聞いてたけど大丈夫じゃ……ん？」

そこに入って来たのは黄泉川だった。

瞬間、手を離してお互い反対側を向く2人。

「」「」「」「」

気まずい沈黙の末、

「……………悪かったよ。どうぞ続きをやればいいじゃん」

そう言って、そそくさと逃げ出そうとする黄泉川。

「「っするかー!!」「」

2人の声が八モった。

その後、白井が風紀委員シヤツジメンの仕事があると言って、逃げるように帰っていった。

「んで？QKYさんはどうしたんですか？」

綾峰の表情と声は冷たかった。

「いきなりQKYから！？ってあんたが担ぎ込まれたって聞いて心配して直行して来てやったじゃん？一応、わたしが保護者なわけだし」

「はあ。そうですかー。ていうかここはやっぱり病院なんですね」

「そつだよ。ていうかその敬語はどうしたんじゃん？」

「いや、黄泉川さんの空気の読めなさに敬意を示してるだけですよ」
「？」

「悪かったって。許してほしいじゃん」

「はー。っていうか昨日あの後結局助かったのか。って俺と一緒に担ぎ込まれた女の子はいないか！？」

「いるよ。でも今はまだぐっすり寝てる……………1つ聞かせて欲しいんだけど。昨日何があったじゃん？」

「……………俺が最初にあそこに行くと、罫にはまってあの娘がいた部屋に誘導された。その後、戦闘になって彼女が部屋全体を凍らせたんだが……………」

「ぐつ。またこのパターンかよ！」

そう言つて、綾峰は部屋の外で頭を抱えていた。

前回の時のように黒い物体で作った分身と『空間移動』を同時に行つたのだ。

虚空爆破事件の時ほどでは無いにしても、相変わらず頭はがんがんと鳴り響き、綾峰はどうにか立っていることしかできないでいた。

それでも、目的の部屋、制御室に入る。

「お前の姉の居場所なんてしるわけないだろ？ だいたい、本気でそれを信じてたのか？ はっマジ笑えるんだけど」

そこには中年の男がいて、モニターを見て偉そうに吠えていた。どうやらモニターに夢中になっていて、綾峰には気付いてないらしい。

「つーか、もうお前是用済みだから。後は、そこでお前に何の副作
用もなければこの『幻想御手』^{レベルアップ}を他の奴に使うだけだ」

(この外道が……ってこいつ『幻想御手』を持ってやがんのか!?)

「あー、あとそこにいる奴は、お前みたいな置き去りを救ってるや
つらしいぞ?お前は自分の味方を殺したんだ。アハハハハハハハ」

綾峰は徐々に男の後ろへ壁に寄り添って歩いていく。

「アハハハハハハハハハハハハハハハハハ」

「おい、やってくれんじゃねーか」

綾峰がそう言うと、男は初めて綾峰に気付いたのか、驚いて腰を抜
かした。

「ひっ!な、なんでここに。お前死んだんじゃ?」

「ああ?死んだ?だったら何だ?俺はユーレーですか?いいねえ。

だとしたらお前も一緒に道ずれにしてやるよおおおおお!!」

綾峰は半分自棄気味に大声で脅かした。

「ひ、ひいいいいいいいいいいいい!!!!!!」

すると、そのまま男はぶくぶくと泡を吐いて、下から色々な汚い物
を垂れ流して気絶した。

「うえっ。臭っ。たく。こいつつーか『幻想御手』は後だ。雲雀

とかいった娘は？つて？何だアレ！？」

先ほどの部屋を映したモニターには先ほどの極寒状態と真逆の灼熱地獄が広がっていた。

「たく、暴走してるな。さっきのが空間の分子の動きを完全に止めた物なら、こっちは分子の動きを暴走させてるのか？どちらにせよ、ヤバいな」

綾峰は急いで、部屋の空調設備をオンにする。

同じく冷房を最大にして綾峰は少女のいる部屋に向かっていく。その途中、トイレでバケツに水を汲むと、部屋まで持っていった。扉は熱で赤くなっており、溶け始めようとしている。

(たくつ。やるしかねーよな！！)

『運動変速』！！！

「ぐつあああああああああ！！！」

レベル3の力を使うための演算にさえ、脳に壊れそうな程の痛みが走る。

「う、おおおおおおおおおおおおおおお！！！」

その痛みを誤魔化すように綾峰は叫び、水を体に浴びせると扉を蹴り破り、飛び込んでいった。

中は、地獄なんて生易しい言葉ではなかった。

灼熱煉獄。

それが正しいとも思えた。

汗なんて一瞬で乾き、数秒いるだけで体中が溶けそうな気がした。しかし、それでも『運動変速』の力や空調設備が綾峰を救っていた。それに先に被った水の分子の運動を弱めることでどうにか進む事ができる。

綾峰は中心に雲雀がいるのをAIM拡散力場の動きで把握すると、そこに歩いていく。

歩く、それだけで熱波が綾峰を襲う。

まるで何者も近づけないようにと望むかのように。

それでも歩く、そこに救うべき存在がいるから。

ただ、一心不乱に歩き、歩き、歩き、

綾峰は辿り着いた。

助けて！！

声が聞こえた気がした。

だから、綾峰は応えた。

「おう、助けに来たぜ」

そして『運動変速』を雲雀にかけて、背中におんぶすると、そのまま部屋を脱出しようとした。

すると、背中から雲雀の声がした。

「わたし…わるい子なのに…なんで助けてくれるの？」

「あ？助けんのに理由がいんのか？メンドクセーな」

もともと綾峰は置き去りを助けるために『多重能力者』として暗躍しているのだ。

第一、おっさんを捕まえるよりかは置き去りの少女を救う方が遙かに綾峰にとってはやりがいがある。

「それにお前は悪い子じゃねーよ、俺が保障してやる」

そう言つて、背中少女が眠るように意識を失つたのを確認すると、綾峰は安堵のため息をついた。

雲雀が意識を失つたことで、暴走していた能力が止まる。

それによつて熱暴走も自然に収まるだろうと、綾峰は思っていた。

瞬間、制御室から爆発が起きた。

「なっ!?!」

熱暴走も収まるどころか、更に上昇しているようだった。

どうやら既に自然の速度で止まるには熱が溜まりすぎたようだった。

そこで綾峰は気がついた。

自分の靴が熱で溶けかけていることに。

どうやら徐々に『運動変速』の効力が落ち始めているようだった。

どうにか背中にいる雲雀だけには熱が届かないように最大限の配慮をしているが、それもこのままではいつまで保つか。

(ヤバい!!まじでヤバい!!)

一歩踏み出した。

足から溶けた靴が離れ、足の裏が地面に着くと、肉の焼ける匂いがした。

「ぐあああああああああああああああああああああ!?!」

耐えるしかなかった。

堪えなければ、落としてしまったら背中が死んでしまう。いつそのこと、雲雀を捨ててしまえば楽だったに違いない。だが、綾峰はできなかった。しなかった。

(それでも、誰かを救うために俺は生かされたんだ!！)

「ぐあああああああああああああああああ!!!!!」

綾峰の悲鳴が狭い部屋の中で響き渡る。

「それで、こんなことになったわけよ」

と言って、綾峰はシーツの下にあった足を見せる。そこには包帯でぐるぐる巻きになった足があった。

「大丈夫じゃん?というかよく切り落とさなくてすんだじゃん?」

「それはもちろんだよ?なにせ、僕はこれでも『冥土帰し(ヘヴン キャンセラー)』で通ってるからねえ?」

黄泉川の感心したような心配なような声にいつの間にか来ていたカエル顔の医者が応えた。

「先生、お久しぶりですじゃん。今回もありがとございますじゃん」

「まあ、結構重度な火傷だったんだけどねえ？本当は1ヶ月は入院
なんだけどねえ？僕の技術と彼の能力も使えば明後日中には退院で
きるかな？」

「早すぎじゃん！？」

黄泉川が当然のつつこみをいれる。

「もうやってるし、たぶんあともう少しで外側は見えるぐらいには
なるさ」

「もはや化け物の域じゃん？」

「うるせーなー。メンドクセー。これでも色んな能力を併用してど
うにか明後日中なんだぞ」

「はあ、心配して来た私が損したじゃん？」

頭を抱える黄泉川。

「そう言えば、麗しの彼女にはその包帯を見せてないじゃん？」

「心配かけたくなかったのと、言う暇もなかったんだよ。つつーか
彼女じゃねー！！」

「はいはい」

それからしばらくの間3人で話をしていると、カエル顔の医者は途
中で去り、黄泉川も仕事に戻ることにした。

「それじゃ、元気にしてるじゃん。明日にはお土産でももってきてやるじゃん」

そう言って立ち上がる黄泉川に綾峰はふと思い出したように尋ねた。

「帰りに雲雀には会わなくていいのか？」

「ああ、あの子の事はこれから施設の方に預ける予定だけど」

「そうか。ところでさ、黄泉川」

「どうしたんじゃん？」

「俺がいつ、あの子の名前が雲雀だって言った？」

「ッ！？そ、それは話の途中で……」

「残念。ちよいと確かめたい事があってな。さっきの会話の中でも俺は一度だってあんたに雲雀の名前を言ってない」

「そ、そうだ。さっきあの子の病室に行ったから……」

「俺がさっきまで寝てたのに？違法に扱われてた置き去りの名前は『書庫』にだって載ってない。そんな女の子の名前を病院が知ってたとでも？」

「ッ！……」

黄泉川は少しの間黙ると、手を上げて降参の意を示した。

「やっぱりあなたの妹だったか」

「いつ、気がついたじゃん？」

「あー、いくつか変なところがあつてな

例えば、昨日あなたが俺に電話してきた時間。

普段のあなたならあんな時間にはかけない。まあ緊急ってなら話は別だし、しかたないけど、でもあなたはなにも言わなかった。まるで何かを隠しているように。

たぶん、あなたは昨日あの娘の情報をどこかで仕入れて慌てて俺に電話したんだろ？

それから依頼のあったあの男のことだけど、俺は仕事を果たせなかったのにあなたは特にそれを責めなかった。それにあいつのあの性格の割りにやつてるのがあまりにもレベルが高い。学園都市から金を流用するなんてよほどの知能と度胸がなきゃできねえことをやってきた奴にしてはあまりにもお粗末過ぎる。

それに、背負つてた時にあの子、『あいほおねーちゃん』って呟いてたしな」

「でも、それだけで私だと当てるなんて」

「ああ、最後はな。あなた真っ先に俺のところに来たみたいなこと言ってるのに、既にあの女の子の安否、しかもぐっすり寝てるって知ってるってのはおかしいよな」

「はあ、変なところは鋭いじゃん。ったく」

黄泉川は呆れたように笑った。

「はは。まあ、そう考えるとあんたが今まで俺のことを手伝ってくれてたのに納得がいくのも理由の1つなんだけどな」

「ああ、否定はしない。私はあの娘を探す為にあんたを利用してたじゃん」

「別に責めてないさ。俺も助かったしな。色んな子供を救うことができた。でも、会いに行かないのか？そろそろ起きてるだろ？」

「私には会う資格なんてない。あの娘を捨てたようなもんじゃん」

「どづい意味だよ？」

「はあ、どこから話すべきか……そうだねえ、最初は私の父親が浮気をしたことから始まるじゃん」

「……………」

「父親は浮気をして、外の女に子供を作ってしまった。しかも相手の女は子供を産んで何年かした後死亡したじゃん。まあ、それで父親はその娘を認知して連れて帰ってきた。私は妹ができてうれしかった、でも母親がそのことを嫌がったじゃん。それで、父親と母親は別れちまったじゃん。」

「……………それで、あんたとあの娘は離れ離れになったのか？」

「ああ、あの子もメールぐらいはできたから、お互いメールしてたじゃん」

「そんでわたしが教師になって数年した後にあの娘からのメールがぱったり途絶えたじゃん。しかも父親は行方不明。慌てて探した後
はもう学園都市でどこかに行ってしまうってたじゃん」

「んで、あなたはここで教師になって探したのか？」

「その通り…アンチスキルになったのもそれが理由だった」

「だったらあなたは会う資格があると思っぜ。だってそこまでして
あなたは探してたんだろ？妹を」

「……………でも、あの娘は私のことを恨んでるかもしれないじ
ゃん。それが怖いじゃん」

「だったら尚更だ。会いに行ってこいよ。あの娘は絶対恨んでない。
俺が保障する」

「ったく、あなたはそついうことをすぐ言っじゃん」

「うるせー。あの子のとこ行くならちよいと気になる事があったか
ら付いて行って良いか？」

「あいよ。わかった」

そして、2人が雲雀の病室に行く。

雲雀の病室には、面会謝絶の文字が張られていた。

七月二十一日

「わかった、ありがとな。初春。データはちゃんと受けとったから……ああ、それじゃ。白井によろしく」

運動変速暴走事件から翌日、綾峰は起きたばかりの体だったが車椅子を駆使して移動して病院の端で電話していた。

今は初春に電話して『幻想御手』という音楽データを受けとったところである。

初め、初春に電話した際はただの音楽ファイルで能力者のレベルを上げられるものなのかと驚いたが、今こうして手にしてみると不思議な感覚だった。

「それにしても、犯人は何が目的なんだ？」

綾峰の言葉は病院内の騒音に消えた。

綾峰と黄泉川が雲雀の部屋の前に行くと、そこには面会謝絶の文字が張られていた。

2人が慌ててナースセンターに行くと、担当医らしい男が話をしてくれることになった。

3人は場所を移して狭い面談室に移動すると、医者が説明を始めた。

「碓氷 雲雀さんは、当病院に運ばれてから一度も目を覚ましていません」

「それは能力の暴走と関係があるのでしょうか？」

「いえ、今のところそういった原因でないのは確かです。……が」

「が？」

「原因がまるでわかっていないんです」

「それはどづいことじゃん？」

「……………本来は風紀委員ジャッジメントの方に口止めをされているんですが」

「なら、大丈夫です。俺もこれでも風紀委員の端くれです」

「でしたら…………この数日間、学生の方で急に昏睡状態に陥る方が急増しているんです」

「それが…雲雀とどういう関係が？」

「わかりません。原因もまるで分かっていないんです。男女関係なく運ばれてきます。ただ、今回のようにあれほど幼い方は当院では初めてですが…もしかしたら、同じ原因ではないかと思われま

「……………？あの、男女関係なくって言うてましたけど、年齢はどれくらいなんですか？」

「ほぼ全員が10代の方です。全員学校など所属なども違いますが、全員が全員学生であることは確かです」

「……………その全員は能力者ですか？」

「？ ええ。もちろん。この学園都市で学生で能力者でない方はいませんよ」

「それもそうですね」

綾峰はたしかに、と言うと1人思考に埋没するように目を閉じた。

「あの、会う事はできないじゃん？」

黄泉川が医者に聞く。

「えっと患者さんとはどういった関係で？」

「私は……………アンチスキル警備員じゃん。容態を確かめたいじゃん」

「わかりました。10分だけでしたらどうぞ」

「んじゃ、俺は部屋に戻るよ。またな、黄泉川」

「あいよ。てか、1人で帰れるじゃん？」

「車椅子に座ってんだから当たり前だろ」

「なら良いじゃん。それじゃまた」

そう言っつて黄泉川は医者についていった。

綾峰は1人になると、回りを視る。

(にしてもこれは何だ?)

空気中に漂うAIM拡散力場の動きがおかしいのだ。

18日も少し感じてはいたが、あまり気にはいなかった。だが、この数日間状況は変わったらしい。

AIM拡散力場そのものは本来あまり流動することはない。

微弱な多種多様な力の塊なので本来は風が吹いても動くことはないのだ。

ただ、能力者が動けばそのものが発するAIM拡散力場によって揺らぐ事はあるが、今は綾峰以外に能力者は傍にいない。

そのAIM拡散力場が動いていた。

まるで何かに導かれているかのように、どこかへ流れていく。

「これも……『レベルアップ幻想御手』の影響なのか？」

そう言えば、かつて綾峰が戦った2人の『幻想御手』使用者（とみられる者）達も能力の使用の際にどこからかAIM拡散力場が収束していた。

（もし仮説が正しいなら『幻想御手』は、他人のAIM拡散力場を使ってるって事なのか？）

（……………いや、仮説にすぎないか）

証拠はないし、科学的な根拠もない。

（そう言えば、事件は何か進展があつたのか？）

白井に聞き損ねたなー、と考える綾峰だった。

そして初春に電話をするために携帯を使える場所を探し始めた。

そして冒頭に戻る。

病棟に戻った綾峰を迎えたのは、2メートルを超える体格に神父服を着た赤髪の男だった。

先日、寮で戦ったロリコン神父だった。

一応院内であることを気づかってか煙草は吸ってはいなかったが、その身から漏れでる香水は綾峰の脳に一定のダメージを与えてくる。

「今日は事件らしい事件が起きなかった！！？奇跡か！？とか思ってたのに、お前が来るとは……………メンドクセー」

「どうも、あまり驚いていないみたいだね。先日は殺しあつた仲だつてのに」

「うるせー、ロリコン神父。こっちは怪我しててそれどころじゃねーんだよ」

「相変わらずセンスのない表現だ」

「それはお前の服装だろう?」

「これは”魔術”を行使するのに最適な服装をチョイスしただけさ」

「そうかいそうかい、それで何の用だよ?ロリコン神父様」

綾峰は既にやけくそだった。

「っち…………アレは何なんだ?」

苦々しい表現でロリコン神父が言う。

「上条の、ことか?」

「ああ、お前は分かる。お前のあの黒い物体がお前の能力だというのは僕だってわかる。それで僕の攻撃を防いだのは少々驚いたがね。だが、あの少年は異常だ」

「そうだな。でもアイツは”ここ”ではただの無能力者だ」

「は、君も神裂と同じ事を言う気がい?」

そう言ってロリコン神父は苛々を綾峰にぶつけるように言葉を繋げる。

「これでも僕はこの道じゃ結構な評価を受けている魔術師でね。ただの”高校生が僕の技を破れるほど世の中は甘くない”」

「はい、メンドクセー。もういいよ。教えてやるよ。ロリコン神父だからさっさと帰ってくんね？つーかもうアンタの香水で頭イタイんですけどー？」

綾峰は既にだるくて半分もロリコン神父の話聞いていなかった。

「まったく君と会話していると胃薬が欲しくなるね」

「へー、魔術なんて言ってる”オカルト”ロリコン野郎でも薬なんていう”科学”が欲しくなるなんてね」

「とことん君は僕をロリコンにしたいみたいだね」

「当たり前だろ」

「何で僕は君なんかに関きに来たんだろっ」

ロリコン神父は腹を抑えつつ憎々しげに言った。

「知らねーし。オレはさっさとアンタを帰してファブりたいんだよ」

「っち。だったらさっさと行ってくれ」

「上条の能力は『幻想殺し（イメージブレイカー）』。この世にある異能の力を完全に無効化する力だ。それは”科学”であろうと”オカルト”であろうと関係ない。アイツが右手で触れたものは全て現実に戻される。そして、一番重要なのはアイツは『フラグ乱立体質（女殺し）』だということだ」

「……………？最後のはよくわからなかったが、関係あるのか？」

「はあ、これだからトーシロは。いいか？フラグ乱立体質ってのはな。『幻想殺し』なんてチート能力の遙か上の上に存在するチート能力だ。言ってみればな、それが例え神であろうと、女性であるならば、オトせるということだ」

「……………それは僕の魔術が破られたことに「まだ分かんねーのか？ロリコン神父。お前が狙ってるのは何だ？お前がこの前オレに挑んでまで得たいと思ったものはなんだった？」……………インデックスだが？」

「オレは言ったぞ？それが神であろうと、”女性”であるならば、必ずオトすと」

ロリコン神父は考えるように黙ると、ぽつりと言った。

「……………オトすってのは何なんだ？」

「お前って意外に子供だな」

「なっ！？君は僕を侮辱しているのか？」

「いんや、帰って神裂とかいう人にでも聞いたら？」

「うるさい。僕は戻る、じゃあな。」敵」

そう言っつてロリコン神父は部屋から出て言った。

「やっぱりあいつガキだな」

綾峰は1人になった病室で呆れたように言った。

夜、綾峰はベットに座りついていた。

既に部屋はファブってあり、臭くはない。

看護師さんたちに何したんだって顔で見られたけど、綾峰は悪くない。

でも、ちょっと悲しかった。

(次あつたら、とりあえずアイツが話してる間に携帯鳴らしたる)

七月二十三日

綾峰が退院して2日ぶりに風紀委員の事務所に行ってみると、
文字通り書類の”山”がそこにはあった。シャッフメント

既に机は埋め尽くされており、机に乗らない分は椅子の回りを囲うように置かれていた。

「……………あるえ〜？白井？俺って6日前にこの書類の山を消したはずじゃなかったっけ？」

「6日前も同じことを言っていましたわ。それにしてもお怪我はもうよろしいんですの？確か、階段からずっこけたと聞きましたけど」

「いやあ、単に腰打っただけでもう問題ないってさ」

まさか、レベル4以上の能力者の暴走に巻き込まれたとは言えず、回りには寮で階段から落ちて腰を打ったことになっている。

「まったくこの忙しい時期に入院するなんて、時間さえあればこの書類の山を病室に持って行ってやるうかと思いましたわ」

「へいへい。んで？『幻想御手』について何か進展は？」

「特になしですわ。ただ、最近『書庫』とレベルの合わないのいい事に能力を悪用する輩が増えてますの。あと、昏睡者がこの3日間で更に増えてますわ」

「まったく、『幻想御手』を使ったら昏睡するって噂流しちまえば皆使用をやめる……………ってわけはねーよな」

「ええ、それに使用者がそんな噂を聞いたら自暴自棄になって何をしでかすか分かったもんじゃありませんし」

「はあ、とりあえず退院したての俺にできるのはこの書類との格闘だけ、か。メンドクセー」

綾峰は書類の山に目を向けてがっくりと肩を落とす。

「頑張ってくださいな。私はこれから外を回ってきます」

そう言っただけで白井は鞆を持って外に行こうとする。

「白井、あんま無理はすんなよ？」

「何のことですか？」

「……いや、最近ジャンボウルトラパフェを奢ってないからダイエツトに勤しんでのかと思って、あまり若い娘がダイエツトダイエツトなんて言っただけ……ってあれ？白井？白井さん？白井様？何で手を俺の胸に当てつぐがぶ！？」

白井の『空間移動』によって上下逆転させられた綾峰は頭から床に叩きつけられた。

「まったく、入院してもその失礼な口は変わってないですね」

はあ、と呆れながらため息を吐く白井に綾峰が真剣な表情で言った。

「白井、何て言うか。これは避けようがない事態だったから、完全

な事故なだけでござ。1つ言わせて欲しい」

「……………？いきなり何ですの？」

「中1のお前にそんな大人パンツは早くげっ!？」

鳩尾に蹴りを入れられて綾峰が悶絶する。

白井はスカートを押さえるとそのまま距離を置くと言った。

「と、とにかく私はでかけますので、後をよろしくお願いします!」

そのままダツシユで事務所を出ていった。

「……………たく、1人で無理しやがって」

そう言って綾峰はすくっと立ち上がると、目の前の書類に向かって不敵に笑う。

「白井が外で『幻想御手』使った能力者ども相手に頑張ってるんだ。わりいがささつと終わらせてもらっぜ」

そう言って綾峰は鷹の目の表情になる。

そこへ、

「あ、綾峰さん。書類追加です」

初春がもう「山」書類を持ってきた。

「……………メンドクセー」

とある科学の事件体質第14話

トランスルメーカ

「それにしてもおかしな話だな。五感全てを使う『学習装置』を数年使ってやっと能力が1上がれば良いってぐらいだったのに。『幻想御手』は聴覚を使うだけで一気にレベルが上がるのか」

5時間後、一騎当千の奮闘の結果、書類がやっとあと1束になったところで綾峰は休憩していた。手にはコーラの入った湯飲みを持っている。

「でも実際レベルはあがってますし……」

初春もコーヒークップを持って休憩していた。

ふと、綾峰は最近気になってたことを聞いてみる事にした。

「なあ、初春。AIM拡散力場って知ってるか？」

「え？えつと……確か………能力者が無意識に発している微弱な力の事………でしたっけ？」

初春は必至な表情で思い出しながら言う。

「ああ、例えば御坂なら微弱な電磁波を発しているように能力者ってのは必ずAIM拡散力場を発している」

他にも音波使いは低周波の音波を、発火能力者は熱を出している。

「それを視れるのが綾峰先輩の能力なんですよね」

「そうなんだが、『幻想御手』を使ってるやつらは少し違うみたいなんだ」

「どついうことですか？」

「本来能力を発すれば、それに応じてAIM拡散力場ってのはより活発に”拡散”する」

「ふむふむ」

「だが、『幻想御手』を使っている奴らは逆に能力が強くなればなるほど、AIM拡散力場が”収束”する」

「ええ？それっておかしくないですか？そもそも能力を使うから発

生ずるA I M拡散力場が能力を使うと逆にあつまってくるなんて

「そうなんだよな！。何が違うんだ？」

「うーん」

「うーん」

初春と綾峰は頭を抱えて考えるが、特に思いつかなかった。

「よし、それじゃ。実物を視てくる！！」

「へ？え？でも綾峰先輩。まだ書類が」

突然立ち上がった綾峰に初春が慌てて言う。

「何言ってるんだよ。ほら、もうこれぐらいしか残ってないぞ？」

「いえ、そこにあつたのは一部で、まだ向こうの部屋に溜まってるんですが」

さらりと初春が問題発言を口にした。

「……………あのー？初春様？その書類とやらは先ほどの山の何分の1ぐらいでせう？」

「えっと、あと3倍です」

「……………3分の1の間違いじゃなくて？」

「はい」

「……………メンドクセー!!! 帰る! 帰ります! 帰らせて頂きます!
! というか他の風紀委員ジャッジメントは書類仕事してないのか!？」

自分を棚に上げて綾峰が言つと、

「皆さん外回りの方に忙しくて」

言外に私たちは役に立ちませんからという言葉が聞こえてくる。

「……………はあ。メンドクセー。やるよ、やりますよ。やらせて頂
きますよ! コンチクシヨ! !!!」

涙を流して綾峰は机に立向っていった。

頑張れ、綾峰。

書類ある限り、綾峰の戦いはこれからも続く、永遠に…

応援ありがとうございます!!

スザク先生の次回作にご期待ください!!

〈完〉

「

「って、なに終わらせてるんですか！！？連載終わらせる程に書類
仕事面倒くさいんですか！？」

初春が慌ててつつこみをいれる。

「だってさー。もうねーよ。どんだけだよ。後3倍って少なく見積
もってもあと15時間は掛かるじゃねーか」

「でも、他の人だと軽く半月かかる内容ですから」

「だー、もーメンドクセー！！」

そう叫びながらも綾峰の書類を捌いていく手が止まらないのはすこ
いなあと感心する初春だった。

2日前（七月二十一日）

佐天涙子は悩んでいた。

その手にあるのは音楽プレイヤー。

その中には『幻想御手』という曲がダウンロードされていた。佐天がそれを見つけたのは偶然だった。

2日前に音楽サイトを見ているうちにたまたま見つけた隠しサイトでこれを発見し、すぐにダウンロードした。

昨日早速初春に見せようとしたが、初春の同僚で常盤台中学の生徒である白井黒子が「『幻想御手』の所有者を捜索して保護する事になると思われます」と言っていたのを聞いてつい隠してしまった。そして今日、使うかどうか悩んでいると不良たちが『幻想御手』を使って金をせびっている所を見つけてしまった。

助けようとしたが、結局偶然来た白井に助けられた。

佐天は何もできなかった。

(やっぱり能力者と無能力者って世界が違うんだ…)

そんなことを考えながら佐天が歩いていると、

「あ、ルイコー」

佐天が思考の渦から戻り、振り返ると親しい友人たちがいて、

「おひさ！終業式以来」

そう言ってアケミが手をふっていた。

「1人で買い物？」

「う、うん。そんなと」

友人の質問に嘘を吐く罪悪感を感じながらも佐天は言葉を繋げてい

く。

「アケミ達はプール？」

「それがスンゲー混んでてさあ。全然泳げんかったよ」

「できれば海行きたいけど、私ら全員補講あるじゃん」

「泊まりでもどこにも行けないわけよ」

「あれさー、勉強の補習はわかるけど。能力の補習って納得いかないよねー」

そう言っただけで何気ない日常の会話をしている4人の会話に、

「あ、でもさ聞いた？『幻想御手』っての」

非日常が紛れ込む。

「あ、あのさ！

あたし…それ、持ってるんだけど…」

3日後（七月二十四日）

「はあ…はあ…はあ」

全力疾走で走ってきたのだろう。

初春は肩で息をしていた。

初春の顔は涙と汗と鼻水でぐちゃぐちゃだった。

目の前には、初春の友人である佐天 涙子が自室で倒れていた。

七月二十四日 巻 【幻想御手編】

体は 紙で出来ている

血潮は文字で 心はグラフ

幾たびの事務所を越えて不敗

ただ一度の残業もなく、

ただ一度の早退もなし

担い手はここに独り。

書類の山で判子を押す

ならば 我が生涯に インクは不要ず

この体は、 無限の書類で出来ていた

「終わっ……………た」

とき、と綾峰は倒れた。

そこに敷き詰められたのは紙の山。

その頂上で書類の王は眠りという美酒に酔っていた。

「あ、綾峰さん。あと一山なんですから。頑張ってくださいよ
!」

だが、その横には絶望という名の書類の束が置かれている。

「うるせー、初春。俺はもう眠い。後は任せた」

始めてから16時間。

予定よりも時間が掛かっている。

途中初春には休ませたが、綾峰はずっと寝ずに仕事をしていたので。既に綾峰には限界が来ていた。

「…ふう、この手は使いたくなかったんですが……」

白井さんが終わらないとオ・シ・オ・キですわよって微笑んでましたよ

「初春さっさと次の資料持ってこい」

「はい」

綾峰の苦難はまだまだ続く。

とある科学の事件体質第15話
トラブルメーカー

午前6時頃

書類仕事が終わった頃には既に夜が明けていた。

「あれ？何でだろう？朝日が目に沁みるんだけど」

いつの間にか初春も帰っていて、事務所には綾峰独りだった。

閑話休題

「つーか、なんであんだけ人数がいて1人も書類仕事やんねーんだよって話だよなー」

帰路につきながら綾峰は愚痴っていた。

「第一、俺1人が頑張ってるようなもんじゃねーか。まあ今回は初春が少し手伝ってくれたからいいが。つーかもっと全員で一遍にやつちまえばすぐ終わるだろ?..... はあ、愚痴っても仕方ないか」

そこまで言って綾峰は回りをみた。

そこは往來の激しい駅の前で人に聞かれていないか不安だったからだ。

というか独り言をぶつぶつ言っているとところをみられたら、恥ずかしさで綾峰は二三日は引きこもるつもりだった。しかし、幸いなことにそこには誰もいなかった。どうやら独り言は誰にも聞かれずに済んだよう

「あれ..... おかしくないか?」

幾らまだ早朝とは言え駅前だ、この時間帯にだって電車はある。電車に乗って会社に行ったり帰ってきたりする人が1人か2人は少なくともいてもおかしくはない。

(なのに、人っ子1人いないのはあまりにも不自然じゃないか?)

「初めましてと言っておきます」

「..... (汗)」

嫌な予感がした。

冷酷な声、されど凜とした声は明らかな殺意を持っていた。
振り返る。

そこにはシャツに片足をほぼ切り取ったジーンズといういささか奇妙ではあるがまだ普通の服装に身を包んだ長髪の美女がいた。

「神…裂…?」

殺気に震える声が相手の名前を訊ねる。

「ええ、よくわかりましたね。神裂^{かんさき} 火織^{かおり}と申します」

神裂は綾峰が自分の方を向くと殺気を収めた。

おかげで綾峰は幾分話し易くなる。

「何で、人がいないんだ?」

「単にステイルに人払いの結界を張らせているだけですよ。この一帯にいる人に『何故かここには近づこうと思わない』ように集中を逸らしているだけです」

「……それって駅前のここでやるとメーカーワクな気がするのって俺だけ?」

「…すぐに終わる用事ですので」

「えーっと何でしょう?」

(待て、おかしいだろ?何でこいつらは上条じゃなくて俺の方に先に来ちゃうかな?っーか、もう疲れた!!帰りたいんですけどー!

?)

綾峰の心の叫びを知ってか知らずか、神裂はきつと綾峰を睨むと言った。

「ステイルに『女性をオトす』なんて下品な言葉を教えたのは貴方ですか？」

「……………は？」

「いえ、ああ見えて彼はまだ子供ですし、私の方がいささか年上ですのでそう言った日本語はできるだけ教えないように気をつけていたというのに……………」

「……………(何て言うか、この2人の関係って姉と弟なのか?)」

「彼が先日私のもとに帰ってきた時、真剣な表情で『あの上条ってやつの能力は『フラグ乱立体質(女殺し)』だ』と言ってきたのですよ……!」

(うわー、マジで信じたの!?!?というか言ったの!?!?この人に!?!?)

「……………あの、それで俺はどうすればいいんでしょうか？」

「……………」

「あの？神裂さん？」

「とにかく、次からはああいう言葉はステイルに教えないようにしてください！！でないと、私は貴方をこの七天七刀の錆びにしなければなりません」

「は、はい！気をつけます！」

「なら、よろしい。以上です」

そう言っつて神裂は去っていった。

「……………つか、その程度のことならこの結界張る意味無いんじゃない……………」

「これはステイルへの罰です」

いつの間にかいたのか戻ってきたのか、神裂さんは目の前に来て言いました。

「……………そうですかー（棒読み）」

「それでは今度こそ失礼します」

神裂火織は今度こそ去っていった。

断言しよう、あの人絶対将来は教育ママになる。

綾峰はそんなしょーもない事を考えつつ、部屋に帰り爆睡した。

午前10時頃

白井は顔をしかめつつ、風紀委員の事務所で初春の手当てを受けていた。

「っ！沁みますわ」

「我慢してください。それにしても日に日に生傷が増えていきますね」

「仕方ないですわ。急激にレベルの上がった能力を悪用する輩が絶えませんし、今この状況で植物人間の話が広まったら自暴自棄になつた輩が何をしでかすか……」

「恢復した人は1人もいませんしね」

そう言つて初春はテープを白井の腕に貼る。

「五感に働き掛ける『学習装置』テストメントならまだしも、聴覚のみでは能力開発は不可能。でも現実問題として『幻想御手』レベルアップバーは使用者の能力を引き上げている。いったい何がどうなっているのか……」

初春の声は暗い。

目的も解決策も見えない現状では仕方なかった。

その気持ちを白井も共感できたが、それを振り払うように凜とした声で言う。

「泣き言を言っても始まりませんわよ。とにかく私たちが為すべきことは3つ。

・『幻想御手』拡大の阻止

・昏睡した使用者の回復

そして、

・『幻想御手』開発者の検挙！

この一連の騒動を引き起こした張本人、『幻想御手』を開発し、音声ファイルの形で広めた何者か。必ず見つけ出して目論見を吐かせてやりますわ」

「つと、包帯を巻き直してもらってもよろしいかしら。自分でやるといまいちで…」

「いいですよ。でも御坂さんには頼まないんですか？」

そう言いながら初春は包帯を巻き治し始める。

「お姉さまにこんな姿見せるわけにはいきませんわ。ただでさえ、ここ数日元気がないのに。黒子の事で心配をかけるわけには…」

「白井さんのことを心配する人なんて綾峰さんぐらいですよ」

「なッ！？何を言ってますの！？」

「えー、だって綾峰さん。この前も入院先の病院から電話してきた時も「白井はどうした？」って聞いてくるんですよ。まったく端

から見ててラブラブなんですからー」

「そ、そんなことはありませんわ！私はお姉さま一筋ですの！」

そう言いながら顔を真っ赤にした白井は初春の喉を絞める。

その瞬間、部屋の扉が開いて、

「おっす。何か私に手伝える事」

御坂が入ってきた。しかし御坂が何か言い終える前に頭上から初春がふっつてくる。

「「え？」」

ゴツという痛そうな音が響き渡り御坂と初春は地面に倒れた。その隙に白井は服を着て包帯を隠した。

「「ご、ごきげんよう。お姉さま。能力でセキュリティを解除するのよしてくださいな」

「「……………」」

白井の声に応える者はいなかった。

閑話休題

御坂は自分も首をつっこんでしまったので手伝いたいと言ってきた。初春と白井は現状でわかっていることを説明する。

「ふーん、『学習装置』かあ……」

「五感全てに働く機材がない事には能力開発はできないとのことなのですが」

「植物状態になった被害者の部屋を搜索しても『幻想御手』以外に何も見つからないんです」

2人の話を聞いてふと、御坂は何かひらめいたのか少し考えをまとめると話し始めた。

「逆に、仮の話だけど『幻想御手』という曲自体に五感に働き掛ける作用がある可能性はないかしら？」

「?どういう意味でしょうか？」

「前にかき氷食べた時の会話覚えてない？」

十九日の話だった。

初春が風邪でダウンしていた日、白井と御坂はかき氷を下校中に食べたのだ。

その際、佐天から『幻想御手』の話を聞いて、ファミレスにて情報収集しようとして上条と綾峰に邪魔されることになったのだが、それは別の話。

御坂が言っているのは、その際にほんの世間話程度にでた会話のことだった。

「たしか、赤い色ならイチゴ、黄色ならレモン、緑だとメロンでしたっけ？」

「そう、それ。共感性」

「？共感性ってなんですか？」

「赤い色を見ると、温かく感じることはない？そういう視覚で感じてるはずなのに他の感覚のものを感ずることを言うの。例えば、さっきのかき氷の話は視覚と味覚。他にも風鈴の音色を聴いて涼しく感じたりするでしょ？それは聴覚と触覚」

「つまり、1つの感覚を刺激することで2つ以上の感覚を得る事ですわ」

「……な、なるほど」

「本当に…わかっていますの？」

同時刻

綾峰の部屋

P r r r r r r r r r r r r r r r

P r r r r r r r r r r r r r r r

P r r r r r r r r r r r r r r r
かちゃ「ふあい、あやみねふえすふえど？」

『おや、寝起きだったかな？』

電話の向こうからはカエル顔の医者声が聞こえてくる。

「いえ、むしろこれから超 爆睡モードに入る予定でした。軍曹」

『寝ぼけてるよね』

カエル顔の医者は呆れたように言う。

「どうしたんですか？こんな時間に、良いこの皆は寝てる時間ですよ？」

『いや、それは君だけだから。ちょっと頼みたいこと、というか知らせたいことがあってね』

「内容によっては切ります。というかまたあのナースコレクションがどのって話だったら確実に切ります」

『『幻想御手』のことだよ』

一気に綾峰は覚醒した。

「っ！？な、何か進展があったんですか！？」

『それを説明するかちょっとこっちに来てくれるかな』

「すぐ行きます」

綾峰はすぐに制服に着替えると部屋を出ていった。

午前11時頃

「黒子っ」

病院のロビーに御坂の声が響いた。

白井が真剣な表情で振り返る。

「佐天さんが倒れたって…やっぱり『幻想御手』がらみ？」

肩で息をしながら御坂は訊ねると、

「ええ、どうやらその線のようですの」

白井は唇を噛みつつ頷いた。

先ほどの推論を元に木山に調査依頼をして、その結果を受け取りに行く途中の初春から連絡が来たのだ。

いつもの初春からは甘ったるい声からは想像できないような真剣な声で。

「初春さんは？」

「木山先生のところへ」

「そう、でも少し休ませた方が良くんじゃない？」

「私もそう言ったのですが、自分が風邪で対応が遅れたせいだと言
い張って聞かないんですの」

2人が話をしていると、そこに後ろから声がかかる。

「あー、ちよつといいかい？」

2人が振り返るとカエル顔の医者が立っていた。

カエル顔の医者が言うには、被害者達は皆一定の脳波のパターンがあるらしい。

「そこで、最強の『電撃使い（エレクトロマスター）』の君に相談したいんだけど、同一の脳波を持つ人達の脳波の波形パターンを電気信号に変えたらその人達の脳と脳を繋ぐネットワークのようなものができるかな？」

カエル顔の医者の質問に御坂は、少し考えると答えを言った。

「脳波を一定に保てるなら可能かもしれないけど、そんなことを誰が？」

「…なら、間違いないか。良いかい。僕は職業柄、セキュリティについて色々新しい開発を手がけていてね。その中の1つに人間の脳波をキーにするものがあるんだ」

「その中でね、被害者達が見せている一定の脳波のパターンと同じパターンを持つ人がいるんだよ」

そう言ってカエル顔の医者が御坂にパソコンを見せる。

そこに映っていた人物の写真を見て御坂は驚愕した。

「これは…」

木山^{きやま} 春生^{はるみ}、その人だった。

そこへ黒子が携帯を片手に駆けてくる。

「お姉さま！木山春生のところへいった初春と連絡が取れませんの
事態は急激に進み始めたことを御坂は悟った。

2人が慌ただしく駆けて行った後、『冥土帰し（ヘヴンキャンセラ
ー）』は暗がりに声をかけた。

「それじゃ、そろそろ君の出番だよ。『デュアルスキル多重能力者』」

「はい」

返事と共に出てきたのは綾峰だった。

「雲雀ちゃんだっけ？救うんだろ？お姉さんに会わせてあげるんだ
ろ？」

「はい」

「なら、行っておいで。守るもののために」

「…………俺は、魔術師じゃないですから、こんな名前を名乗るのは変かもしれませんが。あえて名乗りたいと思うんです omnia 1000、と」

「……………どついう意味だい？」

「我が世界の全てを守るために」

「なら、全力で行っておいで。そして帰っておいで。どんな怪我でも安心しな。僕が必ず治してあげるよ」

「はい、行ってきます」

七月二十四日 式

高速道路を走る車の助手席に初春は座っていた。

「『レベルアップバー幻想御手』ってなんなんですか？」

初春は睨むように運転席に座っている人物、きやま木山 はるみ春生に訊ねた。

「どうして、こんなことしたんですか？眠った人達はどうなるんですか？」

「矢継ぎ早だな」

そう言いながらも木山は答えを言っていく。

「まず、『幻想御手』だが、あれは複数の人間の脳を一定の脳波にすることで繋げて高度な演算を可能にするものだ」

「繋げる？」

「なに、例えば1人で書類仕事を終えるよりも2人、3人、あるいはもっと多くの人間が一斉に終わらせた方が早く済むだろう？それと同じさ」

「なるほど」

初春の脳裏に風紀委員の書類仕事事情が浮かぶ。

普段は綾峰先輩のみが仕事をしているが、もしも全員でやればもっと早く仕事は終わるだろう。

「それに加えて同系統の能力者は同じ能力者と演算を共有する事で演算の効率も上がる。」

「そしてここからはまた別の理論をつかったのだが、確かに能力者同士の脳を脳波を一定にして繋げてても同系統の能力者がいないのは能力の向上は低い。だから、AIM拡散力場を脳の電気信号の補助として利用する事にした」

「まさか、だからAIM拡散力場が収束したんですか!？」

「…?誰からそれを…ああ、なるほど綾峰か。確かに彼にはAIM拡散力場を視ることが出来るからな。まあ、彼の関与した実験のデータを元にしたのも事実だよ」

「関与した実験?」

「さて、何で能力者が昏睡するのだが、やはり他人の脳波を強要されるのが原因だろう。なにせ私の脳波だ。私以外の人間では受け付けまい」

「なんでそんなことを…」

「あるシュミレーションが行いたくてね。『ツリーダイアグラム樹型図の設計者』の使用申請を出したが、どういうわけか却下されてね。他の演算装置を探していたのさ」

「だから、能力者を…?」

「ああ、一万人程集まったから、たぶん大丈夫だろう」

「!!」

「そんな怖い顔をしないでくれ」

初春の顔を見て木山が言う。

「シュミレーションさえ終われば能力者達は解放するさ」

「……………」

「嘘だと思うかい? ……君に預けておくのも面白いかもしれないな」

「?」

木山はポケットからチップを取り出して手錠をしている初春の手に預けた。

「それは『幻想御手』をアンインストールする治療用のプログラムだ。後遺症はない、全て元に戻る。誰も犠牲にはしない」

「臨床実験が充分でないものを安全だと言われても何の保障もないじゃないですか!」

きつ、と木山の勝手な言い草に初春は反論する。

「ハハ、手厳しいな」

「それに一人暮らしの人やたまたまお風呂に入ってた人はどうするんですか? 発見が遅れたら命に関わりますよ」

初春の言葉が終わると同時に車が急に暴走した。

「? ? ?」

目が回った初春の横で木山はぼそつと呟いた。

「まずいな……学園都市統括理事会に連絡して全学生寮を見回らせなければ……………」

「想定してなかったんですかッ!!?」

とある科学の事件トラブルメーカー体質第16話

白井は1人、パソコンの前で待機していた。

アンチスキル
警備員のもたらず情報を収集し、それを御坂に伝える為だった。
数分前、

「私も出るわ」

御坂はそう言つて、現場に向かおうとした。

白井は止めたのだが、御坂は嫌な予感がすると言つて聞かず。

なら風紀委員の自分が行くと言えば、怪我をしてるのを見抜かれた
上に、

「アンタは、私の後輩なんだから。こんな時くらい「お姉さま」を
頼りなさい」

そう言つて行つてしまった。

ふと、白井の脳裏に1人の男が浮かぶ。

あやみね
綾峰 唯鷹

風紀委員の先輩で兄のような人。

いや、もっと言えばお姉さまと同じくらいに役に立ちたいと思える
人。

何かを隠しているのは知つてた。

この前の入院でも本人が寝ている時に、足の怪我を見て驚いた。

結局腰を打つたと言つていたが、なんであんな嘘を、と疑問に思っ
たが口に来れなかつた。

何でだろう。

こんな時にこそ。あの人が傍にいて欲しい。

『木山春生だな!!!』『幻想御手』頒布の被疑者として拘留する!!
直ちに降車せよ!!!』

木山と初春の乗っている自動車の前に警備員がアンチスキル拡声機で呼びかけて
きていた。

「はあ、警備員か。上から命令があつた時だけ、動きの速い連中だ
な」

そう言つて木山はハンドルにあごを乗せる。

「どうするんです?年貢の納め時みたいですよ?」

「『幻想御手』はね、人間の脳とA I M拡散力場を使った巨大な演
算機器を作る為のプログラムだ。」

だが、同時に使用者に面白い副産物を齎す物でもあるのだよ」

初春は怪訝に感じた。

(なぜ、この人はこの状況で焦りどころか、笑みを浮かべているん
です?)

木山はそのまま車を降りると、警備員の指示に従つて手を頭の後ろ
に組んだ。

警備員達が人質となつた初春の無事を双眼鏡で確認している瞬間、
それは起きた。

初めは、銃声。

警備員の1人が前方にいた味方に発砲。

そして全員の注意が木山から逸れた一瞬後、木山が前に出した手から空気の渦のような物が発生した。

「なっ！馬鹿な」

「学生じゃないのに…能力者だと!!」

「黒子!!どうなってるの!?!」

高速道での爆発を見た御坂は慌ててタクシー代を払って降りると携帯で繋がっている白井に訊ねた。

『そ、それが情報が混乱してて、木山が能力を使用して警備員と交戦している模様ですの!』

「?彼女、能力者だったの?」

『いえ、『書庫』には木山が能力開発を受けた記録はないのですが…しかし、これはどう見ても複数の能力を使用しているようにしか見えないのですが』

「どういう事!?それこそ…まるで『デュアルスキル多重能力者』みたいじゃない」

高速道への階段を登る御坂の脳裏に1人の人物が浮かび上がる。仮面に黒合羽、虚空爆破事件で出会った『多重能力者』。

『これは、推測ですが…』

そう言っつて白井は言葉を繋ぐ。

『木山の能力は『幻想御手』を使用したものではないでしょうか。何千人もの能力者の脳とネットワークというシナプスでできた『1つの巨大な脳』、もしそれを操れるのなら普通の人間では為しえないことも起こせますわ』

「まさしく、『多重能力者』…」

『はい』

御坂は高速道に辿り着いた。

御坂の目に初めに映ったのは残骸だった。

そしてその傍で倒れている警備員達、微かだが動いているように見えるので気絶しているだけだろう。

そして、御坂の前にいたのは、こちらに背を向けた黒い雨合羽。

「……………『デュアルスキル多重能力者』?!?!?」

「木山春生が『多重能力者』の正体だったの?」

御坂は『多重能力者』に向かって声をかける。

「おや、御坂美琴も来たのか」

すると『多重能力者』の向こう側から木山の声が聞こえてきた。

「!?!?」

木山の横にあつた監視用ロボットが穴だらけのボディから煙をあげていた。

「ふふ、私はそこにいる本物とは違って『多才能力者』マルチスキルと呼んで貰おうか」

「ドチラモタイシテ違イハアルマイ」

「そうかい?それにしてもその格好は暑そうだな。脱いだらどうだ?なあ、綾峰君?」

「ッ!?!?」

「どういう事!?!?」

二人は木山の言葉に驚き、御坂は信じられない様な表情で『多重能力者』の方を見ていた。

『お姉さま!?!?どうなってるんですの!?!?』『多重能力者』がどうかしたんですの?それに今、綾峰先輩がどうって…』

白井の声が御坂の携帯から聞こえてくる。

『多重能力者』は御坂にジェスチャーで携帯を切るように言った。

「……………ごめん、黒子。また後でかけ直すわ」

『へ？お姉さま！？お姉さp.i…ツ、ツ』

「これで良いんでしょう？」

御坂の声に『多重能力者』は頷くと、仮面を消した。

「ああ、すまないな。御坂。アイツには知られたくないんだ」

「って！！？綾峰さん！？」

御坂は改めて見ても信じられないのか、驚いたように声を上げた。

「……………やはり君だったか」

それに対して木山の反応は当然のように薄い。

「いつ気付いた？アンタとは1回しか会ってないはずだが」

「君の名前を聞いた時、微かにどこかで聞いた気がしたんだ。そしてたら私が『幻想御手』の補助機能として使っていたAIM拡散力場制御法の論文に被験者として君が載っていた」

「……………あれか」

憎々しげに綾峰は言う。

「AIM拡散力場制御法？」

「なに、昔の論文だよ。内容は簡単だ。名前の通りA I M拡散力場を制御する方法を探るといふ物だ。そしてその中の1つに能力者を用いてA I M拡散力場を制御できないかというものがあつたんだ」

「その結果が俺だ。ついでに言えば、俺の使っている『多重能力者』も元はこのA I M拡散力場を制御する能力の応用だ。まあ。厳密に言ってしまうえば『多重能力者』ではないんだがな」

「さて、お喋りはここらへんにして、そろそろ始めよう。レベル5の『超電磁砲』それに噂の『多重能力者』。どちらが来る？それとも同時に来るかい？私はどちらでも構わないが。」

君たちに、一万の脳を統べる私を止められるかい？」

そう言つて木山は不敵な笑みを浮かべていた。

「お姉さま！？お姉さま！！？綾峰さんがどうつてもう、また切れましたわ！！」

白井はパソコンの前に座つて携帯を閉じると、「画面を見る。」

「それにしても、木山春生にこんな過去があつたなんて……」

画面には木山春生が関わつたとある事件のことが書かれていた。

「……………とにかく、ここにいても始まりませんわね」

そう言って白井は部屋を出ていった。

七月二十四日 参

「さて、お喋りはここらへんにして、そろそろ始めよう。レベル5の『超電磁砲』それに噂の『多重能力者』。どちらが来る？それとも同時に来るかい？私はどちらでも構わないが。」

君たちに、一万の脳を統べる私を止められるかい？」
木山は不敵な笑みを浮かべている。

「それじゃ、私が「いや、俺がいこう」……ちよ！綾峰先輩！！？」

「御坂、お前は一般人だ。それはどこであろうと変わらない。一方、俺は風紀委員ジャッジメント。なら誰が彼女を止めるべきかはわかるだろ？」

「つく。一般人だからって……」

「頼む、御坂。たまには先輩にいい格好ぐらいさせてくれ。それに
お前が怪我したら……」

「怪我、したら…?」

「白井に殺される（ガクブル）」

綾峰は本気で震えていた。

「そ、そう。わかったわ。でも危なそうだったら参戦するから」

そう言って御坂は後ろに下がった。

「そいじゃ、始めよう。いや、違うか。」

……これで終わらせよう」

「来たまえ」

『多重能力者』と『多才能力者』。複数の能力を使う能力者同士の戦いが始った。

とある科学の事件トラブルメーカー体質第17話

連続した爆発音が高速道の上で鳴り響く。
爆発によって起きた煙から、1つの影が飛び出してきた。
綾峰だった。

「驚いたな、本当に能力が使えるなんて」

「まあな。だが、避けてばかりでは私は止まらないぞ?」

煙の中から現れた木山は当然だという表情で言うと、右手を軽く上に振り上げた。

それを見ると同時に綾峰は右に少しずれる。

次の瞬間、綾峰がいた場所を火の壁が走った。

「そんな大降りじゃ。俺には当たらねーぞ?」

そう言つて綾峰は一気に木山に近づいていく。

「そつでもないよ」

木山は近づいて来る綾峰に余裕の表情を見せながら、道路にシヨックウエーブを叩きつける。

木山を中心に円形の力が走った後に、高速道が一気に砕けた。

「くっ!!!」

綾峰は落ちかけながら、黒い物体を出して乗る。

木山も同時に落ちるが、『念動力』でゆっくり地面に下り立った。

「すごいな、それはそんなこともできるのか」

木山は感心したように言うと、水流を弾に変えて放ってきた。

「まあな。だが、それほど軽々とレベル4を使いまくるのは卑怯だと思つね」

言った瞬間に、綾峰の姿が消える。

「『空間移動』か!？」

「『名答』」

綾峰の声が木山の背後から聞こえてきた。

「がつ!！」

背後からの蹴りに木山は瞬間的に出した『念動力』でダメージを軽減する。

が、軽減しきれず、その場で倒れる。

綾峰はそのまま追撃をしようとする。

しかし、すぐに水流の弾が綾峰を狙って上空から落ちてきた。

綾峰はその場からダッシュで逃げる。

「『空間移動』を使うとは、君も中々卑怯じゃないか？」

木山は体勢を立て直して言った。

「なーに、こっちはこれが1日2回しか使えないんだ。それを使わせたんだから、褒めてやるよ。まあ、2回目は使ってもその後戦闘不能になるから困るんだが」

「そうかい、それにしても拍子抜けだな。『多重能力者』ってのはこの程度なのかい？」

「はっ。俺が本気出せば、すぐに終わっちゃうからな。少しでも能

力者の気分を味合わせてやるうって気遣いだよ」

「ほう、それはありがたいな。だがそんなことでは足下を掬われるぞ」

「どうだか」

瞬間、綾峰の姿が消える。

「ほら、隙だらけだ」

木山の肩に手を当てて綾峰は電撃を、

流せなかった。

木山が自らの背後の部分に水流を叩きつけたのだ。

綾峰は水流をもろに喰らってしまう。

そしてそのまま宙高く飛ばされ、地面に落ちて動かなかった。

「先ほどの攻撃で君が来るのはわかっていたからな。先読みさせてもらった」

木山は倒れた綾峰に言う。

「意外とたいしたことはなかったな、『多重能力者』」

「さあ、次は君の番だぞ。レベル5。それともやめとくか？」

木山は高速道にいる御坂に話しかけた。

「私は別に構わないんだけどね。そこにいる奴がなんて言うか」

「彼はもう倒したぞ」

御坂の声に木山は愉悦の声で言った。

「誰が？」

「は？」

御坂の質問に木山は何を言っているという表情になる。

「誰がアンタに倒されたって聞いたのよ」

「だから私が綾峰を倒したと「お返しだ！」！？」

瞬間、綾峰の電撃が木山に走った。

「がッ！！？」

木山は倒れると背後には綾峰がいた。

「いったい、どうやって……それにさっきの一撃で倒した……はず
つくー！」

先ほどの木山の水流による一撃は入れば防護服に身を包んだ警備員
でさえ一発で気絶させたのだ。

ならば普通の学生服しか着ていない綾峰がその一撃を喰らって立っ
ているはずがない。

「そりゃ何の冗談だ？ドツペルゲンガーか、そっくりさんじゃねえの？ほら、あんな感じの」

綾峰が指さす方向には、先ほどと同じく綾峰が倒れていた。

「馬鹿な!？」

木山が驚愕に叫んだ瞬間、倒れていた綾峰が消えていく。

つまり綾峰は木山の攻撃を喰らう瞬間、分身と『空間移動』を同時に行っていたのだ。

「待て、さつき君は『空間移動』は1日2回までと言ってたなかったか？」

「そつだよ？嘘は言ってない」

「ならば計算がおかしいぞ。少なくとも君は3回は『空間移動』したはずだ」

「別に『空間移動』つってもレベル4だと2回までなだけだよ」

「何!？」

「世の中には、レベル3程度の演算でも相手の背後に座標を設定すれば『空間移動』できる能力者つてのがいるのさ」

「何でもありだな」

「まあな。あんたが1万人の演算能力を使う能力者なら。俺は23

0万人の能力を使う能力者ってわけだ。そこら辺の能力者と同じ様に考えてると、」

言葉を止めて、にやり、と笑みを浮かべた綾峰は言葉を繋ぐ。

「足下を掬われるぞ?」

「くっ」

木山は立ち上がるようにする。

(電撃の威力をセーブしすぎたか!?)

「おいおい、まだやる気かよ?」

「私は、あの子たちの為に!!止まれないんだああああああ!!」

そう言っつて木山は水流の弾と火の壁、そしてアルミの缶を綾峰に投げつけた。

「ちよっ!?!やばっ!」

綾峰は慌ててそれらを避けていく。

既に『空間移動』は使えない。

分身と『空間移動』を同時に行ったので演算能力が一時的に落ちているのだ。

「くっつてっつおおおおおおお!?!」

綾峰は水流の弾をかるうじて避けて、火の壁に少し髪を焼かれ、アルミの爆弾に巻き込まれた。

『量子変速』によるアルミの爆発で視界一瞬塞がれるが風によってすぐに晴れた。

そこには、黒い物体で壁を作り爆弾を防御していた綾峰がいた。綾峰は壁を解除して木山と向き合う。

「さっきのあの子たちってのは何のことだ？」

「ある実験で昏睡したままになっている置き去りの子たちさ。私の目的は彼らの回復手段を探るためのシミュレーション」

「っ!？」

「だから、私は、止まらない、止めないんだ!！」

そう言うと木山はごみ箱から大量のアルミ缶を『念動力』で出してきた。

その数は軽く100は超えていた。

だが、綾峰の視線はそこには向いていなかった。

「置き去り……だと？」

「ああ、私の生徒たちさ。君ならわかるだろう? 『多重能力者』。あの仮面と雨合羽を着て違法に置き去りを置いていた研究所を潰して回っていた君になら」

「……………」

この時、綾峰の心には迷いがあった。

木山は自分と同じだ、ということに気がついたからだ。
方法は違えど、自分と同じく置き去りを救う為に戦っている。

(俺には、こいつを止める権利があるのか?)

故に、その一瞬の隙が敗北に繋がっていた。

綾峰の前でアルミ缶の1つが収縮した。

爆発の前兆だった。

「や、やばー!」

黒い物体で守ろうとするが、間に合わない。
高速道の下で爆風と共に轟音が響き渡った。

そして、綾峰は倒れた。

それを背にして木山は進んでいく。

「待ちなさいよ。これで終わりだと思ってるの?」

「そう言えばまだ君もいたんだったな。レベル5」

ちらりと、御坂は綾峰を見る。

「彼は強かったよ。だが、私も止められないんだ。為さねばならないことがある」

「その為さねばならないことってのはこれだけの犠牲を生んでもまだやらなければならぬの?」

御坂の間に木山は言う。

「誰も犠牲にはしない。彼だって、警備員達だって生かしてある」

「ふざけんじやないわよ!!」

御坂の声が戦場に響いた。

「誰も犠牲にはしない!? あんたの身勝手な目的にあれだけの人を巻き込んでおいて、人の心を弄んでおいて…こんなことをしないと成り立たない実験なんてロクなもんじやない!! そんなもの見過ごせないわ!!」

「ハー。やれやれ。レベル5と言えど所詮は世間知らずのお嬢様か、それならまだ彼の方が理解が早かったよ。

学園都市で君たちが日常的に受けている『能力開発』。あれが人道的な物だと君は思っているのか？」

「!?!」

「学園都市は『能力』に関する重大な何かを我々から隠している。

学園都市の教師たちはそれを知らずに230万人の学生たちの脳を『開発』しているんだ。

それがどれだけ危険なことかわかるだろう？」

「……なかなか面白そうな話じゃない、アンタを捕まえた後でゆっくり調べさせて貰うわっ!!」

御坂と木山の戦いが始った。

(俺は……どうすればいい?)

気絶からすぐに気付いた綾峰はそれでも動けないでいた。

木山との会話に悩んでいたのだ。

確かに、1万人もの脳を使った演算装置ならば恢復手段を講じることもできるかもしれない。

それと同時に、そのために未だに雲雀達は眠り続けている。

木山が言う通りならば彼らはこの後何の後遺症もなく起きることができる。

気がつけば数日経っていた、それだけの話になるだろう。

だが、それで良いのか？

彼らは心を弄ばれて、利用されて。

使い終わったらそれまで。

それが本当に正しいのか？

いや、思い出せ、綾峰。

犠牲が出ない？

それじゃあ、虚空爆破事件の被害者達はどうかんだ？

それじゃあ、『幻想御手』を無理矢理使わされた雲雀はどうかんだ？

それじゃあ、『幻想御手』を使って犯罪に走る者達を止めようとして体中怪我をしていた白井はどうなる！？

犠牲なんてそこら中にあるじゃないか。

それに、誓ったじゃないか。

『我が世界の全てを守る』

大仰に言い過ぎた気もする。

でも、それでもこれが俺の思いだ。

ならやるしかないよな。メンドクセー。

綾峰はポケットにいれていた物に手を伸ばした。

そこに既に迷いはなかった。

木山と御坂の戦いは能力の応戦だった。

綾峰は肉弾戦で挑むのに対し、御坂は己の能力で木山の攻撃を防ぎ、戦っていた。

木山も先程の戦闘では生かしきれなかった多才な能力を使い御坂の攻撃を防ぎ、戦っている。

そんな中、急に2人の動きが止まった。

「あれ？」

「何故だ、何故能力が発動しない!？」

慌てる2人に声がかかる。

「AIMジャミング」

「「!!!」」

2人が振り向いた先には綾峰が立っていた。

「もう復活したのか」

「体質柄、気絶には慣れてるんでな。それにしても意外とやりやできるもんだな」

「馬鹿な！不可能だ！！」

木山の能力は1万人能力を使った『多才能力』。その中にはレベル4の能力も多数ある。

しかも御坂に至っては真正銘のレベル5。

それを全て妨害するなど、レベル5でなければ不可能なはずだった。

「それはそつだ。確かにレベル3の俺ならアンタら2人の能力の発動を止めることはできない」

「なら、何で……………まさか！！？」

「綾峰先輩、まさか。聞いたんですか？」

木山と御坂は綾峰の手に音楽プレイヤーが握られていることに気がついた。

「ああ、『幻想御手』意外とノリのいい曲だったぜ？」

「私に取り込まれるんだぞ！！」

「だが、すぐにじゃないだろ？」

「……………正気か!？」

「わりいな。あんたの目的、よくわかった。あんたの気持ちもよくわかる。」

それでも、俺は俺の日常のために、アンタの敵になるッ!！」

そう言っつて綾峰は走り出す。

「うおおおおおおおおおおお!！」

「くっそおおおおおおお!！」

綾峰の電撃が木山を貫通した。

木山が倒れていく。

その瞬間、鋭い痛みと共に綾峰の脳裏に鮮明なイメージが流れ込んできた。

(木山センサー)

「っぐ…これは？」

それは1人の研究者と置き去りと呼ばれる子供達のたった一年の記憶。

「『幻想御手』でつながっているから…なのか？」

(厄介な事になった。だが、とにかく実験を成功させるまでの辛抱だ)

(子供は嫌いだ、騒がしいし、デリカシーがないし、失礼だし、悪戯するし、論理的じゃないし、なれなれしいし、すぐになついてくるし)

(AIM拡散力場制御実験、何度も計算を繰り返し準備してきた、何の問題もない。これで先生ゴツコもおしまいだ…)

イメージが一気に変わっていく。

変わり果てた子供達の姿。

絶望に黒く塗りつぶされた木山の心。

木山が上司の研究者に、失敗は明らかに人為的なものだったと主張すれば、

(科学の実験に失敗はつきものだ、それに『置き去り』という学園都市のお荷物が役に立ったんだからいいじゃないか)

イメージがぶつりと切れた。

綾峰の目から涙がこぼれていた。

その手は固く握られ、噛み過ぎた歯がきちりとなる。

「……………」

隣では御坂が呼吸を乱し、汗をとめどもなく流していた。

「な…なんであんなことを」

綾峰と御坂の声に木山は

「くっ。観られたのか？……なるほど、AIM拡散力場を使用したからそれが君を通じて彼女にも見えたのか……」

木山の脳に頭痛が走る、それでも彼女は言う。

「あの実験の正体は『暴走能力の法則解析用誘爆実験』能力者のAIM拡散力場を刺戟して暴走の条件を探るものだったんだ」

木山はふらりと立ち上がる。

「あの子たちは、モルモットにされたんだッ！！！！」

「人体実験……………」

綾峰が呟く。

「23回だ……あの子たちの回復手段を探る為、あの事故の原因を見つめる為、そのためのシミュレーションを行うのに『樹型図ツリーの設計者ダイアグラム』の使用を申請した回数だ。」

だが、その全てが却下された！！統括理事会がグルなんだ、警備員が動くわけがない！！」

木山の悲痛な叫びが響き渡った。

「でもそれじゃアンタがやってることも同じになっちゃっう」そんなことはわかってやってるんだろ」ッ！？？」

「……………は？」

「な、何だ…あれ？」

それは一見胎児に見えた。

それは輝いていた。

それは天使のような輪を持っていた。

それを観たとき、綾峰の頭に頭痛が走った。

「がっ……………あ……………ぐ？……………何だ…これ」

あまりの激痛に言葉も発せない綾峰の頭から黒い何かが吹き出すと、それは胎児のような物を飲み込んだ。

そのまま綾峰は倒れる。

「へ？え？何？何が起きてんの！？」

御坂は混乱のあまりパニックを起こしかける。

そして黒い何かは先ほどの胎児と同じ形状になる。

いや、一部、白い胎児の時にはなかった尻尾のようなものが垂れていた。

そしてそれは、今度こそ。産声をあげた。

同時刻

「初春！初春！」

「……う、うん。ってあれ？白井さん！？」

高速道の車で戦闘の余波で気絶していた初春が白井に発見された。

「大丈夫ですか？」

車から降りてきた初春を気づかうように白井は声をかける。

「あ、はい。ってそこら中に警備員の人達が！それに道が無くなってますね……」

「そんなことより、初春。アレは何ですか？」

「え？」

2人の視線の先には黒い闇のように蠢く物体が浮かんでいた。

七月二十四日 四

気がつけば、白井が掴まっていた。
黒い塊。

胎児の様でそれでいて醜怪な化け物にも見えるそれは、触手のよう
な物で白井を掴み。

「先……輩………無事で良かった」

白井の言葉を満足に聞かせることもなく体内に取り込んだ。

「白………井？」

とある科学の事件体質トラブルメーカー第18話

初春と白井がみたそれは胎児のような姿にも見えた。

「な、何…あれ？」

初春は呆然としていて、怪獣映画ばりばりの化け物モンスターに驚いていた。

「そ、そう言えば！お姉さまはどこにいらっしやいますの!？」

「え!?!御坂さん。ここに來てるんですか？」

白井はここで御坂と通信が途絶えた旨を説明すると、下にいる化け物の方を見た。

「もし、いるとしたらあそこですわね」

「へ?あのもしかして白井さん。あんなのところに行く気ですか!?!」

初春は愕然した表情になる。

「私のお姉さまセンサーがあそこにお姉さまがいると申しておりますの」

「は、はあ」

「それに、どうやら綾峰さんもここにいらにいるようですし…」

「え、ええええええ!?!」

「うるさいですわよ、初春」

驚く初春の大声に白井は耳を抑えながら言う。

「そ、そりゃ驚きますよ！あの綾峰先輩ですよ！？こんなとこいたらすぐにやられちゃいますって！い、急いで助けにいかないと！」

「わかってますわよ、初春。私はお姉さまの救出、あるいは援護、後ついでに綾峰さんの捜索に向かいますわ。あなたはここにいる警備員達を起こして指示を仰ぎなさい」

「は、はい」

「それじゃ、また後で」

そう言うと白井は『空間移動』で消えた。

爆発、火の壁、氷の槍、雷、水流の弾、念動力……………
黒い胎児はそれらを一齐に使い、暴れていた。
その余波は御坂達のもとにも届く。

「　　ッ何なのよ、アレ」

御坂は鋼鉄や砂鉄で組み上げた即席の盾でそれらの余波を防いでいく。

黒い胎児が暴れ回っている隙に御坂は背後に電撃を当ててみた。瞬間、いとも容易く黒い胎児の体が爆ぜる。

「いいっ！ー！あっさり？」

（爆ぜた！？血も出てないしやっぱり生物じゃない？）

あまりの容易さに逆に驚く御坂だったが、すぐに冷静に相手を分析していく。

「！？」

しかしすぐに黒い胎児は爆ぜた部分を補うように体を修復した。しかも前よりも少し大きめになっている。

黒い胎児の白い目が御坂の方を向く。

「げっ！」

空気中にできる3本の氷の槍が御坂を狙ってくる。

「ッ！ー！」

御坂はそれをダッシュで逃げ切ると、すぐに黒い胎児に向き直って、

「やるうってなら相手に……ってあれ？」

黒い胎児は御坂の方など見向きもせず、その場で暴れている。

「なにあれ？闇雲に暴れてるだけなの？」

ておいて。こんなところで寝かしてたら戦闘に巻き込まれるわ」

黒い胎児の方を見ると警備員達と戦闘を始めていた。

「は、はい。では私が」

そう言つて黒子は木山と綾峰を連れて『空間移動』で安全な場所へと向かった。

「どうやらいい分からないけど……やるしかないわね」

御坂は黒い胎児の方に向かっていった。

綾峰は夢を見ていた。

それは1つの夢ではなく、夢の集合体そのもの。いや、正確にはそれは夢ではなく記憶だった。

1人の少年は幾千幾万の努力をたった1つの能力に打ち破られて絶望し、

1人の少女はかつて後輩だった少女が自分を抜いて手の平を返した事に嫉妬し、

1人の少年はレベル5と己の間にある超えられない壁を見て諦念し、そんな思いが記憶が、幾千と集まり、綾峰を取り囲んでいた。そして思いだされる綾峰自身の記憶。

「ようやく、完成した。これでこの子は超能力者の仲間入りだ」

「ああ、アレイスターの言っているあの第1位だって目じゃない」

「まさにこの子は科学の天使に祝福された」

そう言っただけで喜ぶ科学者達の後ろに俺の仲間たちの死体は転がっていた。

「あれか？あれは君の能力を強化するためにあつたんだ。良かったじゃないか。仲間が”君のため”に死んでくれて」

やめてくれ。

力なんていらぬ。

仲間を返してくれ。

返して………くれ………。

綾峰は徐々に深い闇に飲み込まれていった。

白井が2人を移動させて、綾峰の頭を膝に乗せて看病をしていると、かちゃ、という無機質な音が聞こえた。

振り向くと、いつの間にか起きたのか、木山が自らの頭に銃口を向けていた。

「なっ！？やめ「ダツメー………！！」って初春？」

初春は猛ダツシュで木山に襲いかかると拳銃を叩き落とした。白井もそれに続いて拳銃に触れると少し離れた場所に飛ばす。

そして初春の手錠を外させると、木山がぼつりぼつりと語り出した。

「虚数学区というものを知っているかな？」

「虚数学区ってあの都市伝説のですか？」

「ああ、虚数学区というのは230万人の能力者達のAIM拡散力場の集合体だったんだ。

そしてあそこにいるのもおそらくそれと同じ原理で誕生した……

… 『幻想猛獣（AIMバースト）』と呼んでおこうか。

『幻想御手』のネットワークによって束ねられた1万人のAIM拡散力場が触媒になって生まれ学園都市のAIM拡散力場を取り込んで成長しようとしているのだろう」

「そ、そんなものがなぜあんなに暴れてるいるのですの？」

「たぶん、産まれた際にネットワークの核だった私の感情に影響を受けているんだろう」

「止める方法は？」

「初春？」

「……さつき渡したプログラムは持っているかい？あれはネットワークを破壊するものだ。もしかすればネットワークを破壊すれば倒せるかもしれない……まあ君が私のいうことを信じるかどうかだね」

「信じますよ」

「まったくここは他人をすぐ信用する連中が多くて困る」

笑顔で断言した初春に木山は頭を抱えながら笑う。

「初春、行くのでしたら私も」

「いえ、白井さんは綾峰さんと一緒にいてあげてください」

「ちょ！？そんな呑気な「私が行きたいんです」……………分かりましたわ」

初春の迫力に押され、白井は渋々頷いた。

「じゃ、行ってきます」

初春は駆け出していく。

そして途中で振り返ると言った。

「白井さん。起きたときに白井さんがいれば綾峰さんの好感度アップですよ！」

「なっ！？何を言っつて！！？」

白井は一気に顔を赤くする。

「ほう、君等はそういう関係だったのか」

「違いますわよ！！？そ…そりゃあ、綾峰先輩は頼りになりますけ

「きゃああー！」

1つは、ネットワークを破壊するために階段を走る初春の元へやってきて初春ごと階段を吹き飛ばした。

「きゃっ！ー！」

そのまま初春は気絶する。

更に、もう一つが白井達の元へやって来る。

そして黒い光が白井達を吹き飛ばした。

「「きゃああー！」」

ぶるん、と『幻想猛獣』の体がぶれた。

まだこの世界に来るには『幻想猛獣』は不安定だった。

だからこそ『幻想猛獣』は探していた。

この世界でも安定な存在になるための物体を。

ふと、『幻想猛獣』の目が1人の人間を捕らえる。

それは『幻想猛獣』をこの世界へ生み出した人間。

あれを取り込めば体は安定する。

そう結論づけた『幻想猛獣』はゆっくりとその人間、綾峰唯鷹へ近づいていった。

「「……っ」」

白井は呻きつつ、体を起こした。どうやら直撃は避けたようだったが、木山は遠くに吹き飛ばされたようで傍には見えなかった。傍に吹き飛ばされていた綾峰は先程の衝撃でも目を覚まさないのか、唸るだけだった。

『そう言えば最近王子の目を覚ますには姫の口付けが一番らしいぞ?』

木山の軽口を思い出す。
回りを見る。
誰もいない。

と言うよりも巻き上がった煙で視界は塞がれていた。
白井はそっと、唇を綾峰の頬に近づける。

「さっさと起きてくださいまし。さもないと、お姉さまが全部手柄を持っていつてしまいますわよ」

真っ赤になった白井が言った。

「くっ………アイツは?」

少しの間だったが、気絶していたらしい御坂は起き上がると『幻想

猛獣』の姿を探し始めた。
すると先ほどとは逆に元の場所に戻るように『幻想猛獣』が移動していた。

「あつちか!!」

そう言つて御坂が駆け出していく。

ふと、白井と綾峰の回りが影で覆われた。

白井が見ると、いつの間にか目前に『幻想猛獣』が来ていた。
煙のせいで発見が遅れたのだ。

「う、うう」

同時に、綾峰が目を覚ましたようだった。

「くっ!!」

白井は慌てて『空間移動』の演算をするが、突然のことに動揺して演算がうまくいかない。

「jais貫keas捕imq!!」

ノイズの走つた声が聞こえてきた瞬間、巨大な触手のような物が綾峰を狙つて襲いかかってきた。

「ッ!!!させませんわ!!」

そう言って綾峰の前で白井は立ち塞がり、触手に掴まった。

「うっ……………ここは？」

白井の後ろから綾峰の声が聞こえてきた。

「先……………輩……………無事で良かった……………た」

途中から触手が白井を取り囲み、体内に入れた。

「白……………井？」

最後に白井の耳には綾峰の声が聞こえた気がした。

御坂にも白井が触手に取り込まれる瞬間が見えていた。

「黒子……………！」

慌てて叫び、電撃を放とうとするが、

「やめろ！！御坂！！」

綾峰の声に留まった。

「で、でも黒子が!!」

「バカ野郎!今電撃なんて放ったら黒子まで感電しちまうだろ!」

「あ……………くっ」

危うく後輩を自らの手で怪我させるところだった自分の愚かさ
に御坂は唇を噛む。

綾峰は少しの間『幻想猛獣』を視ると、言った。

「御坂。聞いてくれ」

「何?」

「あれは、AIM拡散力場の集合体だ。俺の目には無数のAIM
拡散力場が集まっているのが視えてる」

「あれが?AIM拡散力場の集合体?」

「それでだ、やつを中心に核がある。白井もその近くに
取り込まれてる」

「視えてるの?それも」

「ああ、俺の能力ってのはもともとそう
いうものだからな」

きっぱりと言う綾峰に御坂は訊ねる。

「そ、それでどうすれば!??」

「俺が白井を救出する。そして俺が白井を救出したらその瞬間、一撃で核を破壊しろ」

「……………おいしい役をもらっちゃっていいの？」

御坂が不敵に笑う。

綾峰も同じく不敵に笑った。

「頼むぜ『レールガン超電磁砲』？」

「任せなさいつての『デュアルスキル多重能力者』」

そう言つて2人はそれぞれの持ち場についた。

目が覚めた綾峰は違和感を感じていた。

(これは何といえれば良いのだろうか)

走りながらそう考えていると『幻想猛獣』が綾峰に気付き、能力で攻撃をしてくる。

しかし、それは綾峰の『先読み』の前では意味をなさない。軽々と避ける綾峰に『幻想猛獣』は触手で攻撃をしてきた。それを視て綾峰は、

(いける)

と何故か確信し、触手を右手で、

「うおおおおおおおおおおおお！！」

ぶん殴った。

瞬間、本来勝てるはずもない質量差のはずなのに、触手が一気に瓦解した。

「

！！」

『幻想猛獣』が人間では聞こえないような音で悲鳴を上げる。

そして綾峰は気がつく。

今の自分の回りには異様にAIM拡散力場が密集していることに。

(なんだ？これは？)

だが、そんな疑問を考えている時間はない。
できるのなら、やるしかないのだ。

「うおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

雄叫びを上げながら綾峰は白井のいる『幻想猛獣』の胸の部分に跳びかかる。

瞬間、別の触手によって、吹き飛ばされた。

そのまま地面に綾峰はめり込む。

「っぐ」

だが、思ったよりもダメージはない。

(いけるー！！)

綾峰はまた白井のいる胸の部分に向かって走りだした。

「なに、アレ？無茶苦茶じゃない」

御坂は綾峰と『幻想猛獣』の戦いをそう表現した。

『幻想猛獣』がどんなに大量の能力を使っても綾峰はまるで当然のようにそれらを全て避けていく。

そして『幻想猛獣』は近接戦になると触手で綾峰を攻撃するが、その度に綾峰がそれらを殴り碎いていく。

しかし『幻想猛獣』も必至なのか綾峰の少しの隙を狙って触手で弾く。

それもあの大きさを攻撃されたら普通の人間はすぐに立てなくなるだろう、いくら鍛えてあるとは言え今の綾峰は異常だった。

「これも、『幻想御手』の効果なの？」

「こんな効果は『幻想御手』にはないよ」

御坂の呟きに答えたのは起き上がった木山だった。

「あれは純粹に彼の能力だろう。それにしても、奇跡だな」

「何が？」

「本来ならば彼は『幻想御手』に飲み込まれて昏睡者となっているはずだからだ」

「でもまあやって戦ってるわよ」

「だから「奇跡」なんだよ」

木山の言葉に御坂は信じられない気持ちだった。

「う、ううん」

先ほどの衝撃で気絶していた初春が目を覚ました。

「あ、私………そうだ。チップは？」

胸ポケットに手を入れてチップの安否を確認する。

「よかった。壊れてない」

そう言っただけで初春は立ち上がると、階段を登っていく。

（私だって風紀委員なんだから、佐天さんや皆を守りたい！！）

その時、綾峰と『幻想猛獣』の戦闘による攻撃の流れ弾が初春の方向に飛んできた。

「!？」

爆風に包まれる初春は無事だった。

後ろを見ると、

「そこまでするってことは何かあるんでしょうね？」

警備員の女性が盾で守ってくれていた。

「はい！！」

何十回と吹き飛ばされただろう？

数えるのも馬鹿馬鹿しいほどに吹き飛ばされて、それでも後1歩が届かなかった。

既に体はぼろぼろだった。

A I M 拡散力場を密集させて敵を殴る瞬間にはA I M 拡散力場が収束して力となる。

だが、それと同時に綾峰の体にもダメージが入っていた。

綾峰の額には熱病患者のように玉のような汗が噴き出し、体からは悲鳴が聞こえていた。

それでも綾峰は、

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

止まらず、走っていた。

そこに声が聞こえる。

(諦めるよ) (無理よ) (不可能だ) (勝てない) (無理だった)

(負けよ) (強過ぎる) (勝てるわけが無いわ) …

小さい、それでも圧倒的な数の声が綾峰の脳裏に聞こえてきた。それは『幻想御手』を通しての声なのか、わからないが、それらの声を吹き飛ばすように綾峰は叫ぶ。

「っざけんな！勝手に決めつけてんじゃねえ！！」

諦めるんだったら、勝手に諦めてろ！

俺は絶対に諦めねえんだよおおおおおおお！！」

その姿は正に鬼神。

あらゆる目の前の障害を砕き切るかの様に綾峰は突き進む。

走る。

避ける。

殴る。

吹き飛ばされる。

立ち上がる。

走る。

吹き飛ばされる。

立ち上がる。

また走る。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおお！……黒子おおお
おおおおおおお！……」

(……………)

綾峰の声に、勢いに、綾峰の脳裏に聞こえていた声達が押し黙る。

しかしそれにも限界が訪れる。

後一步で届かない。

何度立ち上がっても、何度走っても、何度その触手を殴り碎いても、
後、一歩が足りなかった。

「ちつくっしょう……」

目がかすみ、腕に力は入らない。

足は鉛の様に止まってしまう。

もう綾峰は限界だった。

触手が迫る。

先ほどまでよりも明らかに速度の落ちた綾峰を確実に止めるために
複数の触手が綾峰を殴り飛ばそうと迫ってくる。

それを回避する力も殴り飛ばす力も既に綾峰には残っていなかった。

(……………)

綾峰は悔しさに歯を噛み締める。

その時、しっかり聞かなければ聞き逃しそうな、それでも確かに

(がんばれ、おにーちゃん)

女の子の声が聞こえた。

綾峰の顔に笑みが浮かぶ。

それだけで力が湧いた気がした。

だから目の前に迫った触手を殴り飛ばした。

そして次に迫った触手を受け止めた。

両手で触手を掴み、足を踏ん張る。

それでも地面を抉りながら徐々に後ろに押されていく。

後半歩だった。

もう少しで届くの。

綾峰は触手を殴り飛ばそうとするが、動けない。

触手を掴む両手、両腕には激痛が走り、足からは今にも力が抜けそ

うだった。

今の綾峰には殴るどころか、現状を維持することすら精一杯だった。

その時、

(頑張ってください!!!)

後輩の友人である元気な少女の声が聞こえた。

(が、がんばれ)

どっかで聞いたスプーン男の声が聞こえた。

声は広がっていき、

(頑張れ！)(がんばれ！)(がんばって！)(もう少しだろ！)
(がんばれよ！)(もうちょっとだ！)(頑張ってください！)
(負けんな！)(行けええ！)……

先ほどまで、押し黙っていた声達が口々に声を張り上げた。

力が湧いた。

足が動いた。

手が動いた。

だから綾峰は走り、

「黒子おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおお……！」

あらん限りの声で叫び、

そして………綾峰の伸ばした手が『幻想猛獣』に届いた。

綾峰の手が『幻想猛獣』に届いた瞬間、
街中にある曲が流れていた。

「成功しました！！」

初春が声を上げる。

綾峰は右手を握り、『幻想猛獣』の胸を思いっきり殴りつける。右手は既にぼろぼろで血まみれだった。

それでも構わず、殴り、弾き、そして白井が見つかった。

そこに『幻想猛獣』の触手が迫る。

綾峰は白井を救うことで手いっぱい触手を相手にする余裕はない。しかし、触手は綾峰に届かなかった。

「王子様がお姫様を助けてんだから。外野は静かにしてなさい」

御坂が砂鉄で切り落としたのだ。

その間に綾峰は白井の体を掴み、思いっきり外に引っ張り出した。そして綾峰と白井が落ちていく。

「御坂！！今だああああ！！」

「ハイハイ、分かってるわよ。」

あんたもこんなところで苦しんでないでとっとと帰りなさい」

御坂の言葉と共に放たれた超電磁砲レイルガンが優しくひっぱたくように『幻想猛獣』を貫いた。

最後に、ぱりんという音がして、『幻想猛獣』は消えていった。

「それにしても、たいしたものだ。あれを一撃とは」

「まあ、ほとんど綾峰さんが頑張った結果だし。それに途中で再生能力がなくなってたみたいだし、私の手柄なんてものじゃないわよ」

「そうか、花飾りの彼女が『幻想御手』のアンインストールを成功させたんだろっ」

「へえ、初春さんが。ところで、アンタはこれからどうするの?」

「ネットワークを失った今、私に警備員アンチスキルから逃れる術はない」

木山が言い終わると同時に増援の警備員達が到着した。

「だが、あの子たちのことを諦めたわけじゃない。もう1度最初からやり直すさ。理論を組み立てるのはどこでもできるからな。刑務所の中だろっつと、世界の果てだろっつと、私の頭脳は常にここにあるのだから」

御坂は体を起こす。

「ただし、今後も手段を選ぶつもりはないぞ。気に入らなければその時はまた邪魔しに来たまえ」

「アンタねえ……………」

「彼にもそう伝えといてくれ」

そう言つて、木山は警備員達に手錠をかけられると護送車に乗り込もうとする。

そこへ御坂は声を掛ける。

「しっかし脳波のネットワークを構築するなんて突拍子もないアイデアをよく実行に移そうと思つたわね」

「複数の脳を繋ぐ電磁的ネットワーク、『テストメント学習装置』を使って、整頓された脳構造。これらは全て君から得たものだ」

「は？私そんな論文書いた覚えはないわよ」

「そうじゃない。君の圧倒的な力をもつてしても抗えない……………君も私と同じ限りなく絶望に近い運命を背負っているという事だ」

「……………」

木山の不吉な予言に御坂は黙る。

だが、と木山は言葉をつなげる。

「彼のように、諦めなければ、その運命すらも覆せるのかもしれない」

御坂は綾峰を見る。

『幻想猛獣』が消えた場所で、力を使い果たしたのか白井を胸に抱いたまま綾峰は気絶していた。

それを見ながら御坂は微笑みを浮かべて、

「そうかもね」

頷いた。

とある科学の後日談集

(……………あれは夢だったんだろうか?)

久々に歩く街の中で、そんなことを思っていた。
特に意識せず歩いていたせいか、回りへの警戒を怠っていた。

「よっ」

ぞくり、といつもの感覚が迫ってくる。

(ああ、”全部”元に戻ったのか)

少年は後ろを向く。

そこには少年の同級生である男子生徒が3人。
いつものように、にやにやと嫌な笑い方をしてこちらを見ている。

「また、金がなくなっちゃったんだけどさ。金貸してくんね?」

事件が終わり、木山は警備員に連れられ、綾峰は病院に担ぎ込まれた後、警備員達と風紀委員達は後片づけをしていた。

「初春」

御坂と話をしていた初春に白井の声がかけられた。

「あ、白井さん。もう大丈夫なんですか？」

「ええ、飲み込まれたと言っても気絶してただけですし。体調も異常はないですわ。それに今回私たいして役に立ってないですし……」

はあ、とため息をつく白井に初春が茶々をいれる。

「そうですか？ 役立たないってよりも囚われのお姫様役って感じでしたけど？」

「と、とにかく！ 手当てが済み次第あなたは今日はあがって結構ですのよ」

「え？ でもまだ仕事が……」

昏睡者の回復の確認、『幻想御手』の回収、やることはいっぱいあるはずだ。

「先ほど、病院から連絡があつて、『幻想御手』の被害者達が次々に目を覚ましてるそうですわ。初春。あなたのおかげですわよ。」

白井は初春を誇るように言った。

白井の言葉に駆けて行った初春を見送った後、

「それにしてもお姉さま、ありがとうございますのですの。」

白井が改まって礼を言ってきた。

「？ なんの事？」

「『幻想猛獣（AIMバースト）』からお姉さまが救ってくださいってんでしょっ？」

「『幻想猛獣（AIMバースト）』？ってあの化け物のこと？」

「ええ、お姉さまがあれを倒したと聞きましたけど。」

「あー、あながち間違えではないけど、私はアンタを助けてないわ」
「よ」

「え？それでは、誰が？」

「アンタを助けたのは綾峰さんよ。覚えてないの？」

「……………そう言われてみれば、あの時綾峰先輩に呼ばれていたような気もしますが……………」

「すごかったわよー。」「黒子おおおー！」「って叫びながら何度も何度もあの化け物に挑んでいつて。本当にもう、愛されてていいわねえ」

「なッ！？あ…アイ？」

御坂の言葉に顔を真っ赤にして固まる白井。

普段あれだけ自分に対して愛だの愛だのと突撃してくる白井の珍しい反応に御坂が驚く。

（意外とこういう方向で押されるのは弱いのかもしれないわね）

そう思った御坂の口元がにたりと広がる。

「ええ、そりゃもう何度も「黒子おおおー！」って叫ぶんだもの。最後にはあんたをあの怪物から引っ張り出して。ありゃあ、もう愛よ」

「ッ！」

「そう言えば、起きた時に抱きしめられてて顔を真っ赤にしてた人がいたわね」

「ッー！」

「そつだ！今度黒子も今度綾峰さんを下の名前で呼んであげたら？
きつと嬉しいがるわよ」

「お

「お？」

「お姉さまのイジワルーー！！」

そう言っつて白井は走り去っていった。

「……………勝った」

御坂はいつもと違う展開に微かな満足感を感じていた。

びくっ

「！ー！」

ベッドの上の少女の指が動いたのを見て、横にいた女性、黄泉川に緊張が走った。

机の上に寝ているのは彼女の腹違いの妹。

これまで何年も探し続けていた。

先日の事件でやっと出会えると思えば『幻想御手』の効果でただ眠

るだけとなっていた。

先ほど、同僚から事件が終わった事を聞き急いで駆けつけたのだ。

「……………うう」

「……………あ……………」

正直、黄泉川は怖い。

これまで救えなかった時間のぶんだけこの娘は傷ついた。

それは自分の努力が足りなかった所為とは黄泉川は言わない。

だが、それでも救えなかったのは事実だった。

ごくり、と喉が鳴る。

雲雀はゆっくりと目を開けると大きく欠伸して、横にいた黄泉川を見た。

「……………だ、れ？」

「……………」

黄泉川は迷う。

応えるべきか、このままただの警備員として接するべきか。

(あの娘は絶対恨んでない。俺が保障する)

ふと、ある少年の言葉が浮かんだ。

ふっと黄泉川は笑う。

「久しぶり、大きくなったじゃんよ」

「……………おねーちゃん？」

「ごめんね。今まで助けられなくて」

「おねーちゃん！！会いたかったよおお！！」

そうして姉妹は再会を涙した。

佐天は屋上で夜風に当たっていた。

「佐天さん！」

入り口の方から声が聞こえ、振り向くと初春がいた。

全身包帯を捲いていてその姿に、申し訳ない気持ちになる。

それでも普段のように挨拶した。

「やあ、初春」

「やあじゃないです！病室にいないからびっくりしたじゃないですか！」

「あはは、寝ただけだからね。特に体調悪いところもないし」

「でも良かったです。目を覚ましてくれて」

「うん、元通りだよ。全部。能力も使えない所も含めて」

「……………そうですねか……………」

「やめることにしたよ、私」

「え？」

佐天の言葉に初春は固まる。

佐天がここから消えてしまうのかと思っ

「そ、それは……………ここから出ていっちゃっつてことですか？」

「？何を言ってるの？初春」

「だ、だって今やめるって」

「うん。やめるんだ。諦めるのをね」

「え？」

「今までは、なんかレベル0だったことを理由にして諦めてたんだ。でもあれを見たら諦めてる自分が嫌になっ

「あれ……………ですか？」

「うん。どっかの誰かがさ、絶対不可能だったことに挑戦し続けて、最後は不可能を可能に変えたの。すごかったよ」

「そうですねか」

「だから、私もあんな風になりたい。強くなれなくてもいい。あ

な風に諦めない強さが欲しい」

「……………」

佐天は初春を抱きしめると言葉を続ける。

「それに、私さ。ずるして、あんたを危険な目にあわせて。もう少しで私、大事なものを「ふえつくしょん!!」……………」

至近距離でのくしゃみ、ようは初春の鼻水が佐天の顔についていた。

「あ、アレ？ススススミマセン。風邪がぶりかえしちゃったのかな」

「初春」

慌てて謝辞を述べる初春にずっと佐天が体を前にだす。

「ひええええ」

怒られると思ったのか初春は涙目になる。

その顔に佐天はティッシュを押し付けると、自分の顔を拭きつつ言った。

「鼻水垂らしていると、女を捨てるわよ？」

「はひ。すみません」

そう言って鼻をかむ初春の横で、佐天は思う。

(もう1回、綾峰さんにあってみたいな)

星が2人を照らしていた。

窓のないビル。

学園都市第七学区に存在するビルの内部に、それはいた。
ごぼっ

巨大なビーカーの中に逆さまに入れられた存在。

それは囚人のようであり、聖人のようであり、男のようであり、女
のようであり、大人のようであり、子供のようでもあった。
それは呟いた。

「これで、虚数学区・五行機関一部展開の第一実験は成功。それに
しても『上位能力』も不完全とはいえ覚醒するとは…より早く次の
段階へ移行できそうだな」

つまらない声で、つまらなそうに呟いた。

世界は今日も誰かの思惑通りに進んでいく。

がっ がっ

人通りの少ない路地裏で少年は蹴られていた。

いつものこと。これが少年の世界。

返す気のない金をせびられ、断ればこうやって暴力で奪われる。

「この前も言ったがよー。お前のウリは無期限無利息無制限だろっ
がよー」

そう言っつて、いつものように金を奪われるのだ。

(これが本当の僕の世界なんだ……………)

『幻想御手』で得た他人の力。

その力を試したくてある事件を起こしたが、結局掴まった。

(僕は結局この世界で生きていくしかないんだ……………)

同級生が少年の財布を取る。

少年はそれをいつものことだと諦めようとした時、

(ふざけんな！勝手に決めつけんじゃねえ！！)

夢で見た1人の少年の言葉が脳裏に浮かんだ。

それは巨大な怪物に挑む少年の物語。

大事な人を奪われて、その身1つで戦って。

何度も何度も吹き飛ばされて、皆に諦めると言われても戦って。

(っざけんな！勝手に決めつけてんじゃねえ！！)

諦めるんだつたら、勝手に諦めてろ！

俺は絶対に諦めねえんだよおおおおおお！！！！

最後にはその手に大事な人を奪い返した少年の話。

その言葉を思い出したとき、少年は立ち上がった。

「返せ」

「あ？」

財布の中身を確認していた少年の手が止まる。

「か、か、返せって、言ったんだ」

少年の声は震えている。

がっ

「っぐ」

「だーかーらー。お前は俺等に金を奪われ続けてりゃいいんだよ」

同級生が蹴りをいれてくる。
いつもならそこで止まっていた。
しかし今日の少年は違う。
立ち上がり、

「うおおおおおおおおおおおおおお！！」

その身一つでぶつかっていった。

「なっ！？」

同級生は少年の突然の行動に驚いたのか、そのまま少年の体当たりを喰らい尻餅をつく。

「なんだなんだ？」

路地の外で見張りをやっていた2人が戻ってくる。

「なんか、こいつ調子乗ってるみたいだぜ。少し思い知らせてやる
うぜ」

少年は3人に囲まれる。

「も、もう、ぼ、僕は、か、か、貸さない！」

「はあ？」「はあ？」「はああ？」

「僕は、前の僕とは違うんだ！」

「うるせえんだよ!」

どすっ どすっ

同級生達が蹴りを入れてくる。
そのときだった。

「おい!そこ!何してる!」

救いの声が聞こえた。

「げっ。風紀委員!?^{ジャッジメント}行くぞ!」

「お、おう」

「ま、待てよ」

そう言って口々に逃げ出そうとするが、即座に他の風紀委員達が取り押さえる。

「……………あ……………」

「大丈夫か?君?」

「だ、大丈夫……………です」

「さっき、通報があったんだ。路地裏でかつ上げをしてるやつらが
いるってね」

「あ……………」

「大丈夫かい？手当てぐらいならするけど」

「……………あ、ありがとう……………」

少年の目から涙がこぼれた。

（自分はその時なんてことをしたんだろう……………ただの八つ当たりじゃないか）

罪の意識が持ち上がるのと同時に、少年は嬉しかった。そして気付く。

世界が例えどれだけ悪意に満ちていても、それはほんの小さな勇気、それだけで変えられるのだと。

七月二十五日 【幻想殺し編】

そこは、花畑だった。

綾峰は花々の香しい香りに穏やかな気分を味わいながら一抹の不安を覚えていた。

それは、既視感。

遠くを見れば川のようなものが見える。

その先で誰かが手を振っていた。

少し近づいて目を凝らしてみる。

そこには、白井がいた。

ああ、無事だったんだな。と綾峰は安堵する。

白井をあのかのAIM拡散力場の塊から抜き出した後、何も覚えていない。

ふと、白井がこっちに気がついたのか、手を振っていた。

「唯鷹さん」

ぶふあ！！

何かが綾峰の中で弾けた。

「いやいやいやいや、落ち着くんだ、綾峰。落ち着け。白井は単に俺を下の名前で呼んだだけだ。そう呼んだだけ。別に何かこう親しみが込められていたわけじゃない」

「大好きですわ」

ぶるああああああああああああああああ！！

何かが綾峰の中で大爆発した。

「落ち着け。これは夢だ。これは夢だ。これは夢だ。前をみる。現実を思い出せ。白井がこんなことを言うはずがない」

「何言ってるんや、峰やん。君はもうこっちにおるんやで？」

「そうにや。現実はこちらだぜい。峰やん」

「君も此方側に来たんだ。認めてもらおうよ」

首がぎぎぎと不吉な音を立てながら後ろからの声の主を確認する。

そこには、ロリコンデルタフォース（ロリコングラス、ロリコンピ
アス、ロリコン神父）がいた。

綾峰はダッシュで走り出した。

向こう側をみる。

そこには白井ではなく、上条がいた。

「綾峰ー！！こっちだー！！早くこっちに来るんだー！！」

「かみじよおおおおおー！！」

綾峰は一気に駆けて行く。

河辺に辿りつくと、慌てて川の中を進んでいく。

「綾峰ー！！後ろだー！！」

「なっ！？」

上条が叫んだ瞬間、綾峰は何かにかしつと足を掴まれる。

水中を見ると、そこには、

「おにーちゃん。こっちおいでよー」

「そうですねー。こちらにおいでませー」

「綾峰ちゃん。こっちですよー」

何かお化けじみた年下の女の子（+1名）がいた。

「か、かみじよおおおおおおお」

「あやみねええええええええええ」

もう少しで、上条の手に届く。

そして、

「何をやってるにゃー?」

「ほらほら、こっちやでー」

「逃がさないよ?」

ロリコンデルタフォー스가綾峰の肩を掴んできた。

「ぐっそおおおおおおおおお」

それでも、綾峰は手を伸ばす。

社会的な烙印から逃れるために。

そして、届いた。

「はあ、はあ、はあ」

綾峰は肩で息をしていた。

「良かったな。綾峰」

そう言っ上条は笑う。

「ああ、助かった。ありが………と………う？」

感謝の言葉を言おうとして綾峰の声が消える。

「あん？どうしたんだ？」

そこには、ロリコンと描かれた判子が上条の額に押されていた。

上条は啞然とする綾峰の前で立ち上がると、ロリコンデルタフォー
スと共々言った。

「「「「「ようこそ、仲間よ」「「「「「」

とある科学の事件トラブルメーカー体質第19話

「って、どっち転んでもロリコンエンドコースはあんまりだと思うんですが……!?!?」

叫びながら綾峰は起き上がった。

「はあ、はあ………はああ。上条。お前もか………」

そう呟いて、綾峰は回りを見た。

どうやら病室の中で綾峰は眠っていたらしいが、部屋の中は薄暗い。窓からは外の景色が見えるので、どうやら夜らしいことはわかったが、

(俺は何日間眠ってたんだ?)

栄養剤の点滴が打たれているところを見ると1日2日は眠っているとわかったがそれ以上は分からなかった。

とにかく一旦自分の体調を確認することにした。体調の方はだるい。

これでもかかってぐらいにだるかった。

外傷は痛み止めでも効いているのか、特に感じられない。ただ、右手が包帯でぐるぐる巻きにされているのは暗闇でもわかった。

この分では明日明後日は動けるかは分からない。だが、もう時間はない。

下手をすれば今日。あるいは明日か明後日には上条は”死ぬ”。

既に”その日”が過ぎている可能性もあるが、それは考えたくない。なので今は後回し。

まあ今日だとしたら、何ができるか？

能力の演算……………できる。

これなら『空間移動』も可能だろう。

最悪、『空間移動』で向かうしかない場合も考えておく。

次に、上条がいつから眠っているかを考えねばならない。

上条が”死ぬ”正確な日付けを覚えていれば話は別だが、綾峰が覚えてるのは、

『上条が神裂に倒されて3日後の夜中に”死ぬ”ということ』

ならば、上条が倒されて眠り始めた日がわかればどうにかなる。

だとすると、小萌先生に電話するのが一番かもしれない。

彼女の家の電話番号はわかっている。

(なら、とりあえずはベッドを出て電話を探さなきゃならねえな)

綾峰は結論を出すと、ベッドから降りてみる。

がくつと足に力が入らず綾峰は倒れる。

「くつ……………そ」

それでもどうにか点滴の台を杖代わりに起き上がり進む。

薄暗くてよく見えないが、出口らしい扉に向かって歩く。

途中、何度も足がもつれて倒れそうになったが、どうにか扉に辿り着いた。

綾峰は扉を開け、病院内を進んでいく。

上条は眠っていた。

その横でインデックスはシスターのように（実際シスターだが）看病している。

顔の汗を拭き、ぬるくなった額のタオルを水に浸して冷やす。

「シスターちゃん。もう寝ても良いですよ？後は先生がやりますから」

横にいた小萌が言う。

インデックスは昨日から寝ていないのだ。

昨日上条を血だらけの状態で見出し、連れ帰るとインデックスは守れなかったと言って責任を感じていたようだった。

「ううん、とうまの看病はわたしがしなきゃ。でも、ありがとう。こもえ」

「別にいいですけど。無理はしちやだめですからねー」

「うん」

小萌はそれだけ言うと、研究資料の本を読もうとして手近にあった本を開く。

その時、電話が鳴った。

インデックスがちらつと小萌の方をみる。

「先生がとるから良いですよー」

「うん、わかった」

そう言ってインデックスはとうまの方に向き直った。

小萌は黒電話の受話器を取ると、

「はい、月詠です。どちらさまですかー？」

『……………小萌先生？』

綾峰だった。

「綾峰ちゃん？どうしたんですかー、こんな時間に？何かあったんですか？」

『先生、1つ聞きたいんですけど。今日は…いや、そんなことより上条が倒れてから何日経ちました？』

「ッ！？な、何で綾峰ちゃんが上条ちゃんのことを知ってるんですかー！？」

『あ、あー。それはまあ、虫の知らせ、かな？』

「むー、自分も信じられないような嘘はやめて欲しいですー」

『あつははは……。まあそんなことはともかく……。何日…経ちました?』

「そんなことって…ふう。上条ちゃんが倒れていたのを見つけたのが昨日ですから、1日ってところですよ」

『1日…あと2日か。分かりました。ありがとうございます』

「ところで綾峰ちゃんはどうしたんですかー?なんか息が荒いですよー?」

『え?いや。そんなことは……ない……です……』

「……?綾峰ちゃん?」

『……』

「綾峰ちゃん!…どうしたんですかー!?!?」

『……あ、すみません。夜分遅くにすみませんでした。俺は大丈夫ですから。また明日かけます。おやすみなさい』

それだけ言うと綾峰からの電話は切れた。

「もー!!なんなんですかー!?!先生心配なのですよー?」

「どうしたの、こもえ?」

「むー、綾峰ちゃんが今にもぶっ倒れそうな声で電話してきたんで

すよー。もー先生は心配ですー」

「あやみね？ゆたかのこと？」

「あれ？綾峰ちゃんを知ってるですかー？」

「うん、前に一度だけとうまの部屋の前であつたよ」

「そうですかー。綾峰ちゃんは明日もかけると言っていましたし、今は待ちますかー」

「そうだね」

「あと、2日……………微妙だな」

そう言つて綾峰は体の状態が自分が思っている以上に酷かつた事に気がついた。

右手意外は特に外傷は見当たらないものの、体を動かす度に筋肉痛が走る。

それに足は力が入らないでいた。目も既にぼやけている。

（やべ、もう体動かねえな……………さっきも電話中に意識飛んだし……………とにかく、今は寝るか……………）

綾峰は意識を投げ出した。

七月二十六日

朝、目が覚めると妖怪ジャージ女と幼女がいた。
誰がうまいことを言えt(ry

「「言っていない(じゃん)##」」

何かお二人ともお怒りのご様子。

片方は拳骨を構え、片方は冷気と熱気を両手に……………冷静と
情熱のあぢあああああああああああ……………!!!!

とある科学の事件体質第20話
トラブルメーカー

「昨日、起きてからベッドを抜け出したことがバレたらしく(と言
つても病院の廊下で寝てたのでそもそもバレるも何も無いのだが)、

それを聞いた黄泉川姉妹が朝早くから説教に来たそうです。ちゃん、ちゃん」

「誰に向かって言ってるじゃんよ？」

「むー。おにーちゃん。反省してないよね？」

そう言っつて雲雀がまた両手に熱気と冷気を集めていく。

「すみません。ゴメンナサイ。反省してます。とりあえずそれは危ないからやめなさい」

「っつてあー！消したー！むー！おにーちゃんのこと心配してたのにー！むー！」

『解析』と『ジャミング』をほぼ同時に行い、雲雀の能力の悪用をやめさせる。

「まあ、実際あんたが目を覚まさなくて心配してたのは本当だよ。雲雀もほら、ありがとっ言っつて言っつてたじゃん？」

黄泉川が呆れたように言いながら、雲雀を促す。

「むー。…………おにーちゃん、助けてくれてありがとう」

そう言っつて何だかんだでにっこり笑う姿に、綾峰もついっつられて笑う。

「良いって、良いって。仕事しただけだしな。雲雀はもう退院したのか？」

「いや、まだ検査入院だつてさ。雲雀の場合は『レベルアップ幻想御手』以外にも色々あるじゃん?」

そう、『幻想御手』の被害者であると同時にこの娘は最近まで人体実験のモルモットとして扱われていたのだ。

レベルもどうやらもとの3に戻っているようだった。

「……………?」

ふと、違和感を感じた。

「むー?おにーちゃんどうしたのー?」

雲雀が急に黙った俺を見て首を傾げている。

「いや、なんか俺……………前より能力の性能が上がってる?」

「そういや、さっきは軽々と雲雀の能力を消してたじゃんよ」

「……………何でだ?」

(『幻想御手』の事件での戦いによるレベルアップ?)

それとも『幻想御手』の服用による効果がまだ残ってるのか?)

そんなことを考えていると、

「やあ、そろそろ良いかい?」

カエル顔の医者が声と共に入ってきた。

「ああ、すいません。今どきます。ほら、雲雀邪魔になるから行くじゃんよ」

「むー。もつとおにーちゃんと話してたのにー」

「ごめんねえ？すぐすむからさ、病室で良い子で待っててね？」

三人のやり取りが済むと黄泉川が雲雀を連れていった。
そして、カエル顔の医者が扉を閉めると、

「まったく君は死ぬかい？」

と、言放った。

「……………え？」

「はっきり言っけど、君が運ばれてきたとき君死にかけてたんだよ？」

「へ？死…？」

医者のあまりの言葉に綾峰は驚きを隠せなかった。

「ああ、君が無意識のうちに『オートリバース肉体再生』を使っていたから良かったものを……………あれがなかったら君は救急車の中で死んでたよ？」

「マジですか？」

「まあ、もつと驚いたのは君の傷が全部外傷じゃなかったことなんだけどね？」

「はい？」

「何て言うか、全部内側から裂けていた。というよりも内側から崩壊していた感じだったねえ？」

「え？でも俺あの時化け物にふつ飛ばされまくったから………そういう傷は？」

「外傷と言えはせいぜい擦り傷ぐらいかな？それもかなり軽度のね？後は………君の右手もそうだけど、内側から裂けているのがほとんどだよ？」

「………なんですか？それ？」

「さあ、僕にもわからないよ？とにかくどんな能力を使ったかはわからないけど、あまりそれは多用しない方がいいと思うよ？」

「………はあ」

「それに昨日の夜みたいな無茶もね？それに今君の体結構弱ってるから、また同じ力使ったら内側から吹っ飛ぶよ？」

「………」

はつきりと言えば、カエル顔の医者言葉は予想外ではなかった。あれだけの力、それもそうとう無茶苦茶とも言える力を行使したのだ。

よほどのチートでない限り、それ相応のリスクな点もあるとは思っていた。

だが、こつも顕著に現れるとなると……………。

「はあ。メンドクセー」

「そうそう、君の『オートリパース肉体再生』なら後3日ぐらゐすれば退院はできると思っよっ」

「……………3日ですか」

「何か用事でもあるのかい？」

「ええ明日、また行かなければならないところがあります」

「それは他の日じゃダメなんだね？」

「はい」

綾峰がそう言つと、カエル顔の医者は一む、と少しの間考えるように黙ると、

「それじゃ、必要なものを言ってくれば用意しようかな？」

「え？良いんですか!？」

「構わないよ？医者つてのは患者の必要な物を用意するのが仕事だと僕は思ってるからね？」

「……………ありがとうございます」

本当にこの人には頭があがらないな、と綾峰は苦笑した。

「それじゃ、僕はこれで失礼するね？」

「はい、ありがとうございます」

そう言って、カエル顔の医者が出て言った。

「おにーちゃん」

それと入れ違いに入ってきたのは雲雀だった。

雲雀はどうやら外で待っていたようだ。

おう、待たせたなと言おうとした綾峰の目の前で雲雀は飛び上がると、そのまま綾峰にダイブしてきた。

「おにーちゃん!!」

(注：『おにーちゃんダイブ』、非常に危険な技(主に使用者が)。そのため、被害者はそれを庇う為に自らダメージを負いにいくという、絶対不可避の究極奥義であったりする。なお、ぶつかるところはランダムな為、相応にダメージもランダムになる。)

「そんな知識知らんし、いらんっつーかあぶなくふああああああ!!」

雲雀の頭突きが綾峰の腹(鳩尾とも言つ)に当たった。

「お、おれは雲雀を寝かせ付けようとがんばっていた
と思っただらいつの間にかいつの間にか修羅場になっていた。

な…何を言ってるのかわからねーと思うが
おれも何をされたのかわからなかった…

頭がどうにかなりそうだった…

ヤンデレだとか二大ヒロイン激突だとか
そんなチャチなもんじゃあ 断じてねえ
もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…」

「うふふ、何を言ってるの？綾峰先輩？」

「おにーちゃん？この人は誰？というか能力封じやめて、この人凍
らせられない」

「おほほ、お子様は何を言い出すかと思えば結局はその程度の暴力
での解決ですの？良いですわよ。受けて立ちますわ」

「へー、よく口が回るんだね。おにーちゃんのこと小汚い口
で籠絡したの？」

「あら？何を言ってるの？私、これでも常盤台中学
に通ってるので一般庶民の使うような口汚い言葉は使いませんわ」

「あははははははは」

「うふふふふふふ」

「あー、おにーさん。喧嘩は良くないと思うんだ」

「おにーちゃん（綾峰先輩）は黙ってて（ください）」

「はい」

そうして、2人は激突し、病院は戦場と化した。

「っていつ最悪の夢を見たんだけど、怖くて言えないです。はい」

「？ 何をしたの？おにーちゃん？」

「いえ、何でもないです」

「変な先輩ですわね」

「「ねー」」

そう言っただけで笑う、白井と雲雀の2人。

先ほど、雲雀から鳩尾への鋭い一撃をくらった綾峰は気絶してしまっただけだ。

そして気がつけば白井がいて、雲雀の相手をしていてくれたようだった。

「悪いな、白井。せっかく時間割いて来てくれたのに雲雀の相手させちゃって」

看護師さんが雲雀を昼寝の時間だと言って連れていった後、そう言っただけだ。

綾峰に、白井は笑って応える。

「別に構いませんわ。それにこちらこそ今日はお礼を言おうとおもっただけですよ」

「？もしかしてこの前の事件の時のか？」

「ええ、ありがとうございます。その後、お姉さまに綾峰先輩が救ってくれたのだと聞きましたの」

「良いって、そんなん気にしないで。つーか逆にそう畏まられるとこっちもやりにくいっつーの」

「ふふ、そうですね。それにしても、綾峰先輩？」

少し、笑った後、白井の雰囲気が変わる。

「？ どうした？」

「何で、あの時先輩はあそこに？」

「へ？あー、いや、その何て言うか俺なりに事件を解決してやるか的な感じで行ったらあの2人の戦闘に巻き込まれて……………」

綾峰は焦って適当なことを言う。

(いや、まさか『多重能力者』で木山と戦ったのは自分です、なんて言えないし)

「なるほど、また事件に巻き込まれたんですね」

「……………はい」

(あー、白井さん怒ってますねー？怒ってますよねー！？顔がひくひく言ってるしー！！もしかして始末書代わりに書いたのか！？)

白井が手を振り上げ、綾峰は来る衝撃に備えて目を瞑った。
こつん、と額を叩かれた。

「？」

「次は本気でダーツを投げますわよ。私をあまり心配かけさせないでくださいまし」

「……………」

（あれー！？白井さん！？なんで赤くなってるんですかー！？）

「あ、あと、その……………退院した後ですが、映画につきあってくださいませんか？」

「へ？」

「いえ、その…………お姉さまがお礼にどこか出かけてこいと仰るものですから……………べ、別に他意があるとかそういうことではないのですわよー！」

「あ、まー、良いけど」

「本当ですよ！？」

「あ、ああ」

そう言っつて、綾峰と白井は具体的な日にちを決める。

「そ、それじゃあ。私はこれで。門限までに帰らないとさすがに拙いのですので」

「あ、ああ。じゃあな」

夕方、夕日を浴びる以外の理由で真っ赤になっている2人は挨拶がどこかぎこちなくなかった。

「……………あれ？これって死亡フラグ？」

綾峰が夜中、1人呟いた。

七月二十七日 巻

数日前、夜が更けるころ、学園都市のどこか。

「よー、ねーちん。元気にゃー?」

「……土御門。調べはついたのでですか?」

神裂は路地の暗闇から出てきた”同僚”の挨拶も返さずに訊ねる。

「ちゃーんと調べてきたぜよ。そんな怖い顔しなさんなって」

「だったら貴方はそのにゃーにゃー言うのをやめなさい」

「これは俺のアイデンティティーだから捨てられないにゃー」

軽く言いながら、土御門はぽすつと神裂に封筒を手渡した。

「これが……」

「ああ、上条当麻に関する書類ぜよ。能力からその身の回りの環境、ストーリーも真っ青な情報までのってるにゃー」

封筒を開くと、中には十数ページにわたる書類が入っていた。神裂は書類を軽く流し見ると、再度土御門の方を見た。

「なるほど、わかりました。もう一つは?」

「はいよ」

土御門は、もう一つの封筒を手渡した。

「そっちが綾峰唯鷹に関する情報。内容は結構深いところまで探ったけど、それぐらいしか出なかったにゃー」

神裂が開いた封筒には、上条と違い、僅か、数ページしかなかった。

「これはどういうことですか？」

「さあ？でもかなり強力なロックがかけられてるってことだと思っ
ぜい」

「…ふむ、ですが土御門。貴方ならもう一步先の情報も仕入れる事
ができるのでは？」

レポート全体を軽く眺めた神裂の問いに土御門は肯定するように笑
う。

「確かに俺ならできなくもないにゃー」

「なら…」

「おいおい、ねーちゃん。あんた戦争でもしたいのか？」

「……………」

つまり、これ以上綾峰の情報を得る事は学園都市と魔術勢力の関係を悪化させる、ということだった。

土御門のグラサンの下から除く眼光に神裂は肩をすくめると首を振

った。

「なら、そつとしておくこつたぜい。第一、今あいつは別件で入院中だし。こつちの件の情報もほとんど持ってない筈だ。関わって来る筈がないにゃー」

「そつ…なら良いですが」

「それじゃ、俺はこれで。そろそろ帰らんと義妹が怒るにゃー」

そう言つて、スパイは立ち去っていく。

神裂はその背中を見送りながらも未だ悩む様にその場に立ち尽くす。

「そつそつ、ねーちん」

ふと、思い出した様に土御門が背を向けたまま神裂に声をかけた。

「なんです？土御門」

「もし、綾峰とやるってなら、1つだけ気をつけとけよ」

「彼の能力の件ですか？それを言うなら私だつて…」

「違うにゃー。ぜんぜん違うんだぜい、ねーちん」

くるり、と振り返る土御門に神裂は土御門が言葉の軽さとは裏腹な圧迫感を感じた。

「あれは本当に面倒なんだ。能力とか、立場とかそついうもんにはまったく関係ない。本当に面倒なやつなんだぜい」

それだけ言うと、土御門はまた帰路についた。
既に先ほどの圧迫感は消え失せていた。
夜の路地に土御門の言葉を反芻する神裂1人が残された。

とある科学の事件トリプルメーカー体質第21話

夜、病室で綾峰は車椅子に乗っていた。
服装は患者用の部屋着ではなく、普段着だった。

「行くんだね？」

「はい、体は動かさなくても能力があればきつとどうにかなると思
うんで」

カエル顔の医者の方に綾峰は笑顔で応えた。

「ふう……………本当は君は重症患者だからねえ？行かせてはならないんだけどね？」

ため息を吐くカエル顔の医者の表情は芳しくはなかった。

「……………じゃあ、今更ですが、止めますか？」

「あー、でも僕は割りと忙しい身だからね？たまに寝不足で部屋でうたた寝をしてみてる時もあるんだよ？だから、その間誰かがこっそりと病室を出てしまってもすぐに対応ができないんだよ？」

独り言のように言うカエル顔の医者はゆっくりと首を振った。

「……………行ってきます」

「……………？何か言ったかい？それじゃ、僕は部屋に戻ってるけど用があつたら呼んでね？」

「はい」

そう言ってカエル顔の医者は部屋に戻っていった。

「……………行くか」

綾峰は『空間移動』で外に出た。

本当はもっと早く出たかったのだが、黄泉川がいたり雲雀がいたりとなかなか抜け出すタイミングを掴めなかったのだ。

しかしもう雲雀は眠り、黄泉川は面会時間を過ぎたために帰ってい

った。

綾峰はカエル顔の医者が” たまたま” 口を滑らせて知った、病院の職員用通路を通り、敷地の外へ出る。外には人気はない。

綾峰は出来うる限りの速度で小萌先生のアパートへ向かっていった。

現在、午後9時。タイムリミットまで後3時間。

「やはり、貴方も来たのですね」

それは、電話ボックスから出てきた。予想はしていた。

最後の時間、それを悪役として振る舞っている彼ら。

もしも、俺が彼らの立場なら「せめて最後の時間は少しでも楽しい時間にさせてあげよう」。そう思うに違いない。

だから、予想はしていた。

綾峰の前に、神裂火織がやってくることは。

「やはりってのはどういう意味だ？」

それでも訊ねる。確認のために。

「前回、ステイルが貴方と会った際に貴方が彼に入れ込んでいると聞きましたので少し調べさせて貰っていたのですが。その際に注意をするようにと言われましたので」

「なるほど。それで待ち伏せでもしてたのか？」

「いえ、たまたま貴方に会っただけです。先ほど彼に最後通告の電話をしていたものだから」

「……………あのー？何かシリアスってる俺が馬鹿みたいなんで、そこは待ってたって言ってください」

「……………待ってました」

「……………あ、やっぱり良いです。なんか悪いし」

「いえ、私は待ってました！」

「すみません！！もう良いですから！！そんな優しくされると涙出てくるんで良いですから！」

面倒くさい綾峰だった。

「まったく何をやってるんだ？」

暗闇から呆れ顔でロリコン神父が現れる。

「私は彼を待ち伏せしていたことになりました」

「いや、神裂。君さっき電話してくるって言ってたじゃないか」

「もう良いよ！その会話は！って言うかもう俺行かなきゃ行けないんで失礼します！！！」

「……………待ちなさい」

ちやき、と2人の横を通ろうとした綾峰の首に七天七刀の刃がいつの間にか当てられていた。

「……………俺、これから怪我した友人のお見舞いでさ。先生の家に行かなきゃなんねーのよ？通してくんない？」

「それは許容できません。あの子にはせめて最後の時間を少しでも楽しい時間にさせてあげたいのです。それが私たちの義務であり、償いです」

「……………ねーよ」

「は？今なんと？」

「知らねーよつつつたんだ！テメエら敗北者の義務や償いなんてもんはそこら辺の犬っころにでも食わせてろ！！」

綾峰の言葉にぴくりと、神裂の手に力が籠る。

「おい、能力者。いい加減にしないと「待ちなさい、ステイル」……何だよ神裂」

綾峰の言葉に怒り、懐に手を入れたステイルを神裂が片手で制した。眼光は先よりも鋭く、綾峰を射ぬきながら。

「敗北者……なるほど。言い得て妙ですね。それでは、あのぼろぼろの少年は勝者だと言つのですか？」

「ああ、アイツは勝者になるさ。でもそのためにも俺がアイツを救わなきゃならねーんだよ」

「貴方の言葉の意味はよくわかりませんが、とりあえず、ここは通せません」

「どけよ、魔術師」

「退きなさい、能力者」

お互い譲らず、2人の視線は絡みあうと火花を散らす。初めに動いたのは綾峰だった。見えない力が神裂の腹を打った。

「ぐっ！」

『念動力』によって吹き飛ばされた神裂はそのまま着地すると体勢を整える。

「ステイル、人払いを」

それだけ言うと、神裂の手が何かのバグかのようにぶれる。

（七閃！？）

綾峰は太刀筋が届く前に『空間移動』をしてそれを逃れる。

瞬間、先ほどまで綾峰が座っていた車椅子がどこからともなく飛ばされた七つの太刀筋によって文字通り八つ裂きにされた。

（やっぱ、演算能力が上がっている？いや、それに加えて演算方法がよりライトになってるのか！）

ステイルはいつの間にか消えているところを見るともう人払いの境界を張りにいったのだろう。

物陰に隠れた綾峰は再度『念動力』を使い、今度は神裂の腕を狙う。

（まずは、その腕を潰す！）

しかし、それは軽々と避けられた。

「貴方の殺気はよく見えます。先ほどは不意を突かれましたが、もう私には効きません」

神裂の言葉と同時に綾峰のいた場所が正確に七閃で断ち切られた。そこには既に綾峰はいない。

「隠れるだけではここは通れませんよ」

神裂の言葉が夜の街に響いた。

現在、10時半。タイムリミットまで後1時間と30分。

「まったく、神裂も人使いが荒い」

そう言って、ステイル「マグヌスは人払い用のルーンの結界を張っていた。」

『知らねーよつつつたんだ！テメエら敗北者の義務や償いなんてもんはそこら辺の犬っころにでも食わせてろ！』

ぎりつと奥歯を噛みしめる。

(何も知らないくせに……)

綾峰とは、本当は彼自身が戦いたかったが、神裂自身が戦うというのであれば彼が出る必要はない。

もともと2人とも共闘するには向かない戦闘方法であるのと、神裂は聖人だからだ。

聖人、神の子に似た人間であり、偶像の理論から神の力をその身に宿す人間。

そんな相手を満身創痍の綾峰が倒せるとは思わない。

いや、そんなことも考えつかない程に神裂は強い。

「さて、僕はインデックスの方に行っているか」

1人ごちたステイルはインデックスのいる小萌の家に歩き始めた。

しゅばっ！

という音と共に、黒い物体の塊が一瞬で八つ裂きにされた。

（ちっ。最高硬度でも無理か！）

神裂と綾峰の戦闘により学園都市の1画は戦場になっていた。ビルの壁や窓は割られ、風力発電用に作られたプロペラの羽は斬られて地面に突き刺さっている。

「やめておきなさい、能力者。貴方が何をしようとも結果は変わりません」

神裂の冷静な声が綾峰に届く。

（わかってんだよ！くそっ）

そう、分かっていた。

この状況を打開できなければ、綾峰は先に進めない。

最悪、最後の最後で上条を救えればそれで構わないが、その際に神裂やロリコン神父に邪魔されたらたまったものじゃない。

（どうすれば…）

苦悶の表情で様々な方法を模索する綾峰に、神裂の声が届いた。

「……………なぜ、あなたはここにいるのですか？」

「？」

その声は、先ほどまでの冷静な剣士のような凜々しい声音ではなく、迷子が母の居場所を問う様な弱々しい声だった。

(私は何を尋ねているのですか)

神裂は己の迷いに戸惑っていた。

ただ、わからなかったのだ。

なぜこの少年、綾峰というただの『一般人』がここまで関与してくるのか。

強いて言うならば、少年はステイルと戦っている。

強いて言うならば、少年は数日前に禁書目録のいる部屋に電話している。

だが、それも『それだけ』と言い切る事ができた。

第一、ステイルと戦ったと言ってもステイルの攻撃を防いだけ。

部屋に電話したと言っても、上条当麻の安否を尋ねただけ。

ただ、それだけの人間が、今こうして自分の前に立ち塞がっている。もちろん、この少年こそが『学園都市以外に上条当麻を補助している魔術集団』の人間とも考えたこともある。

だが、違った。

少なくとも、土御門が持って来た情報を頼りにするのであれば、こ

の少年が『魔術集団』に属していることなどあり得ない。

学園都市にあるあらゆる能力を使用する『多重能力』、それはつまり学園都市の能力者の縮図とも言えた。

つまり彼を調べればあらゆる能力者の能力が分かってしまう。

そういう存在が、学園都市に気付かれずに『魔術集団』に属するなんて不可能だからだ。

(だとしたら、なぜ彼はここに…?)

「それを言ったら、ここを通してくれんのかよ？」

思考の渦に潜っていた神裂に戻って来た声はすごく軽いものだった。

「いいえ、それはあり得ません。目的も分からない貴方をここで通して私たちの目的の障害になられては困りますので」

気を引き締め、返答を返す。

やはり、そうそう簡単に口を割る訳はないか、と神裂は目的を聞く事を諦め、

「まあ、あれだ。上条が困ってるから、かな」

「はい？」

当然のように返された答えに戸惑った。

「あの少年が困っているから、ですか？」

「ああ、普通だろ？ダチが困ってる、だから助ける、それだけさ」

「これは私たち魔術の人間の問題ですよ。科学側の貴方がのこのこ」

出て来た所でこんな風に巻き込まれて入らぬ怪我をするのがオチな
んですよ!？」

「いやいや、メンドクセーな。ていうか、魔術も科学も似た様なも
んだろ?」

「……………」

それは否定だった。

神裂の問いかけに答える少年の言葉は当たり前のように『己の世界
のあり方』を否定した。

少年の周りにある科学、それを少年にとっては得体も知れない筈の
魔術と同じものだと言い切るその精神に。

神裂は啞然とした。

いや、啞然とすることしかできなかった。

「なるほど、貴方は確かに面倒なやつというわけですね」

「いちいち、魔術と科学を区切るそっちの方がメンドクセーと思っ
けどな」

少年の言葉に神裂はもう応えない。

「なににせよ、貴方があの少年の手助けをする、と言つのであれば
私はそれを障害と認識しましょう」

「はあ、また元の木阿弥か」

少年のため息を叩き斬る様に、神裂は少年の声が聞こえた方角に七
閃を走らせた。

「はあ、また元の木阿弥か」

綾峰は呟くと、『空間移動』でその場を後にする。

瞬間、先ほどまで綾峰がいた空間を七つの何かが走りずたずたに引き裂いた。

「さて、どうしたものかねえ。メンドクセー」

先ほどの会話で完全に敵と認識されたようだ、と綾峰は考えながら時間を見る。

現在、10時50分。

このままここで神裂の攻撃を避けながら時間をつぶすのも考えてみるが、すぐにスタミナの問題が浮かぶ。

相手は聖人、こちらは怪我人で立つ事すら俛ならない。

移動はどうか、『空間移動』でできてはいるが、それもどん詰まりと言える。

『空間移動』のしすぎか、スタミナが一気に削られていく様な感じだった。

この時点でまずスタミナで勝てる筈が無い。

むしろこのまま時間を費やされる方が不利だ。

結局は『空間移動』の酷使でのスタミナ切れ、あるいは攻撃を喰らって一撃でダウンのどちらかだろう。

かといって、こちらの攻撃は決め手に欠けるどころか、全く当たらない。
すぐに勝負を終わらせることは不可能だ。

「何この無理ゲー…ゲームバランス悪過ぎじゃないか？」

とりとめも無い事をつい、呟いてしまふ綾峰だった。

数分後。

「焦れて出てきましたか。いい加減、諦めたらどうですか？貴方が今すぐ病院に戻るのであれば私はそれを見届けた上で放免しますが？」

神裂は後ろを振り返らずに後方から現れた綾峰に言う。

「わりいが、それはできない相談だ」

「でしょうね、なら貴方を倒して私はステイルを追い……その姿は？」

振り返り、神裂は驚愕する。
なぜならそこには、

綾峰の攻撃は悪くはなかった。
むしろどちらかと言えば、非常に有効な攻撃を行い続けていた。
だが、スペックが違った。
スピードが、パワーが、あまりに違い過ぎた。
だから、終わりはすぐに来た。

「眠りなさい」

神裂の静かな言葉と共に七閃全部の太刀筋が綾峰に襲いかかった。
どさりと、綾峰は跪く。鎧は剥がれ、ところどころから血まみれの
肉が見えていた。
それでも綾峰は立とうと踏ん張る。
それを見て神裂は言う。

「もう、やめなさい。貴方は頑張りました」

「ぐはっ……………」

跪いた綾峰の口から大量の血がこぼれる。
口を押さえるその手もぼろぼろで血が噴き出していた。

「……………くっ……………そ」

どさっ

綾峰は力尽き、倒れた。
きん、と刀を仕舞う際の金属音が夜の無人の通りに響く。

「ですから、言ったのです。貴方が何をしようとするかは変わらない、と」

倒れ伏した綾峰の前で神裂が言った。

「ふう、怪我人相手に生け捕りというのは骨が折れますね」

神裂はため息を吐き、携帯で119番通報をすると同僚が待つアパートへと向かっていった

現在、午後11時。タイムリミットまで残り1時間。

七月二十七日 巻（後書き）

ん、この回は色々納得がいつてなかったたので改訂しましたが…。
微妙だったかな？

七月二十七日 貳

午前零時に魔術師は舞い戻る。

少女を救えぬ少年に落胆をしながらも魔術師達は己の過去を顧みて心を閉じる。

だが、少年は気付く。

少女の持つ悲劇の矛盾に気付いた少年は笑う。

真実の敵を見つけ相対した時、少年は本当の序章を告げる。

舞台上上がるのは魔術師二人に少年一人、そして救われるべき魔神の少女。

それは正に序章にして終章。

『禁書目録』と呼ばれる無名の少女の救出劇。

戦いの末、少年はヒーローになる。

少女を救い、悲劇を止めて、真のヒーローへと成る。

そして、、、

スタイルはアパートの近くの屋上で煙草を吸いながら時を待っていた。

12時、それがインデックス禁書目録のタイムリミットだ。

1年に1回、必ず彼女の脳の記憶を掃除（消去）しないと彼女はその脳に溢れた記憶によって狂い死んでしまう。

それを初めて聞いたときはスタイルも必死で記憶消去以外の道を探した。

しかし、結局間に合わなかった。

それが現実だった。

だからこそインデックスが記憶を失う前に「たとえ君は全てを忘れてしまおうとしても、僕は何一つ忘れずに君のために生きて死ぬ」とまで誓った。

それからは『敵』として少しでも記憶消去の際に悲しみを減らすように行動してきたが、それが本当に彼女のためなのか、あるいは自分のためなのか、今は分からなくなっていた。

「間に合ったようですね」

スタイルの後ろに神裂が現れた。

特に目立った外傷がないところを見ると時間がかかったわりには圧倒して終わったらしい。

「能力者は？」

スタイルは、邪魔はしてこないのか？という意味で訊ねる。

「ええ、致命傷は避けておきましたが、後1時間程度では起きる事は不可能です。彼が目覚ます頃には全て終わっているでしょう」

「そうか……………それじゃあ後は彼だけか」

スタイルの視線はアパートの1室に向く。

「ええ。ですが約束の時間まで少しあります」

神裂の言葉にスタイルは少し考えるように押し黙ると、

「……………なあ、神裂。別に律義にあいつとの時間を守る必要は無
いんじゃないか？」

提案をした。

「ええ、本来彼女のことを思うのであれば例え非道になろうともす
ぐに彼女を確保すべきでしょう」

「なら、「ですが、私は待つつもりです」……………何故だ？」

「……………あそこまで重傷を負いながらも私に立向ったあの少年が、
信じた上条という少年。彼が何をなせるのか見てみたいのです」

神裂の目には絶対の意思が込められていた。
スタイルはため息を吐き、頷いた。

「……………わかった。どうせ結果は変わらないと思っけど」

「……………」

2人の魔術師は無言のまま、灯の点いている1室を見つめ続けた。現在、午後11時25分。タイムリミットまで残り35分。

時間は、進み、針は重なり、新たな1日を示す。すなわち、午前0時。

禁書目録の制限時間の終了時刻。

上条当麻は魔術師との電話での一言を思い出していた。

『それでは、魔術師^{わねわれ}は午前零時に舞い降ります。残り時間はわずかですが、最後に素敵な悪あがきを』

外の扉から制限時間の足音が聞こえてきていた。扉を蹴破り、魔術師達が現れる。背後に満月の月光を背負った彼らはきつぱりと制限時間の終わりを宣言した。

上条は笑っていた。

「アイツの背中が斬られた時もそうだけどさ。何で俺には何もできねーのかな。」

これだけの右手を持っていて、神様の奇跡でも殺せるくせに」

己の無力さを嘔みしめながら、崩れるように、

「……どうして、たった1人　苦しんでる女の子を助けることもできねーのかな」

笑っていた。

そこに神裂が10分の猶予を進言した。儀式が行うための力を貯めるまでのたった10分間。されど、0と10は違う。

「10分間だ。良いな!？」

そう言つて、ステイルは出ていった。

ステイルを説き伏せた神裂は去り際に、

「貴方の親友、綾峰、と言いましたか？彼も貴方を信じていましたよ。最後までね」

呟き去った。

何をすべきかもわからない少年と、熱病のような熱にうなされた少女が残された。

現在、午前0時5分。タイムリミットまで後10分。

上条は少女にかつてある会話をした。

頭痛が治ったらこんなヤツらをやっつけて自由になろう、と言った
そしたら一緒に海にでも行きたいけど、夏休みの補習が終わってか
らだな、と言った。

いっその事、夏休みが終わったら学校に転入してくるのはどうだ？
と聞いた。

いっばい思い出を作りたいね、とインデックスは言った。
作りたいじゃない、作るんだよ、と上条は約束した。

だから、

上条は己の嘘を貫き通す、『偽善使い（フォックスワード）』にな
ろうと決意した。

冷たいだけで優しくない正義を捨て、正義でも邪悪でもない、『偽
善使い』になる。

それが上条の決意だった。

死人のような顔色で、熱にうなされる少女に、

「けどさ、こんな最悪な終わり方ってないよなあ」

上条は唇を噛みしめながら言った。

インデックスの脳の85%を占める一万と三千の魔導書の『知識』
に侵された残りの15%の『思い出』を守り抜くこともできない自
分に対して絶望を感じていた上条はそこで1つの違和感に気がつく。
そして、その違和感の元を辿り、ある人物に電話をした。

「先生！！」

『あゝいゝ。その声は上条ちゃんですね。先生の電話を勝手につ
かっちゃダメですよ。』

月詠小萌、上条の高校の担任教員だった。

上条は問う、完全記憶能力を持つ人間は、『1年で脳の15%をも使うのか』と訊ねると、

『そんなわけ無いんですよ』

小萌先生はそれを否定し、理由を続ける。

『どれだけ下らない記憶を忘れられないとしても元々人間は140年分の記憶が可能ですから』

上条は問う、ならば急激に知識を溜め込んだなら、話は変わらないかと。

『はあ、上条ちゃんは記録術は落第ですね』

小萌先生は幸せそうに言葉を繋ぐ。

『もともと記憶というのは種類じゃありません、言語や知識を司る「意味記憶」、運動のなれなんかを司る「手続記憶」、そして思いつきを司る「エピソード記憶」と言った具合にいろいろあるのですよ、いろいろ』

上条は先を促す、つまり、

『はい、知識をどれだけ詰め込んでも「意味記憶」が増えるだけで、それが「エピソード記憶」を圧迫するなんてことは、脳医学上、ぜったいにありえません』

上条は答えに行き着いた。

上条は考える。

インデックスの完全記憶能力はもともと命を脅かすものでないのなら、

何故、インデックスは苦しんでいる？

答えは簡単、「首輪」をつけるために教会がもともと何ともないインデックスに何かをしたのだ。

そして、上条はインデックスの前に立つ。

今度こそ全てを変える主人公になるために、

「主人公きどりじゃねえ、

主人公になるんだ!!」

「ダメです

上!!」

全てを引き裂くような神裂の叫び声が響いた。

上条の上には、数十枚の羽。

それは残滓の羽。

1枚でも触れれば死ぬであろう、魔法による羽。

それでも上条はただ目の前にいる少女を見続ける。

(まずは、その幻想をぶち殺す!!)

上条の右手が少女を取り囲む、魔方陣を容易く切り裂いていく。

「警、こく。最終……章。第、零 ……。」
『首輪、』
致命的な、破壊……再生、不可……消」

ブツンとインデックスの音が消える。

その時、笑みを浮かべて立つ上条の頭に1枚の羽が落ちて来ていた。

誰かの悲鳴が部屋を満たす。

そして、羽は無情にも上条の頭部に舞い降りた。

八月一日

太陽の光が窓から注ぐ病室に、1つだけあるベッドの上で少年が座っていた。

ベッドの前には1人の少女が立っていた。

「あなた、病室を間違えていませんか？」

左腕以外全身包帯まみれの少年の言葉は丁寧で、不審そうで、様子を探るようだった。

「……、っ」

少女はカエル顔の医者に聞いていた。

あれはどちらかという記憶喪失というより記憶破壊だねえ。

能力の使い過ぎによる反動。そして、大量の出血によって死にかけたこと。

それらが重なった事による脳細胞の一部が破壊されているという事実。

それを知っていた少女は無理矢理笑顔をつくろうとした。

せめて、笑っていたい。

悲しい顔など見せたくない。

だから、少女はうまく笑顔を作れたような気がした。

だが、透明な少年は言う。

「あの、大丈夫ですか？なんか君、ものすごく辛そうだ」

少年は軽々と少女の嘘を看破した。
そう言えば、この少年は他人の嘘を見抜くのが得意だった。
それでも少女は嘘を貫き通す

「いいえ、大丈夫ですわ」

爪が食い込みそうな程、手を握りながら、

「大丈夫に決まっていますわ」

白井黒子はベッドの上にいる、綾峰唯鷹に言った。

とある科学の事件トラブルメーカー体質第23話

白い羽が1枚、上条の頭に舞い降りた。

瞬間、上条は頭を金槌で殴られたように全身の、指先に至るまで、一撃で全ての力を失った。

上条は未だ床に倒れ込んでいるインデックスの上に倒れ込んだ。降りかかる羽からインデックスを守るように。

そこへ、数十枚の羽が上条の全身に降りかかるうとした。

瞬間、黒い壁が上条達を覆った。

白い羽は黒い壁にぶつかり、バギンという音を立てて壁を削りながら消えていく。

それは連続した音で、まるで硝子の礫を床に叩きつけているかのようだった。

そして最後の一枚が黒い壁にぶつかって、消えた。

2人の魔術師が驚きながら後ろを振り向くと、ドアの枠に寄りかかるように綾峰が立っていた。

顔色は土気色で、既に生氣はほとんどない。

2人にとって綾峰がここにいる事よりも、綾峰がそれでも生きていることが驚きだった。

「どうやって、ここに来たのですか？それよりもどうやってあの状況から……」

神裂は絶句していた。

神裂は綾峰を倒した後、すぐに公衆電話で救急車を呼んでから去ったのだ。

故に綾峰は既に病院に運ばれていると考えていた。

「……………単に、やられたふりをしたただけだ。どうせ、あんたにやられるのはわかってたから。斬られた瞬間、分身にしたんだ。後は、分身を使って死んだフリ……………くっ」

綾峰はそのまま跪く。

「でしたらすぐに彼とともに病院に」「そんなことよりも、やることがある」「!?!」

「おい、ロリコン神父。今すぐ上条に回復魔術を。それぐらい使えんだろ?」

綾峰はステイルの方を向いて血へどを吐くように言った。

「無理だ!アイツの右手の効果を君も知っているだろう?あらゆる魔術を無効化する彼の右手がある限り、僕等は彼に回復魔術は使えない」

それが『幻想殺し(イマジンプレーカー)』の能力。

「なら、斬り落とせばいい」

「「なツ!?!?!」」

だが、軽々と綾峰は言い放った。

「大丈夫だ、知りあいには斬り落とされた腕であろうと繋げるすごい医者がいる」

「馬鹿か、君は!そんな事をする程までの傷じゃ」「アイツは!記憶をなくしちまうんだ!」「……!?!」

「どういう意味ですか?」

綾峰の言葉の意味を神裂が訊ねる。

綾峰は言葉を選ぶように話し始めた。

「……俺は学園都市にあるあらゆる能力を使える。その中に『ファージェジョン予知能力』があるんだ。俺はこの前、それで上条が記憶をなくすという未来を見た。今ならそれは消せるかもしれない。いや！今だからこそ！上条を救えるんだ！」

半分は嘘だ。綾峰には『ファージェジョン予知能力』など使えない。それでも、上条を救うにはここしかない、綾峰は考えていた。

「……例えば、それが真実だとして、記憶喪失程度なら時間が、『記憶喪失じゃない、アイツは脳細胞ごと記憶を無くす。時間で解決して出来はしない』……」

「……………」

それでも彼らは迷う。

この少年を信じるべきか。否か。別に綾峰が嘘をついていると思っただけではない。だが、あまりにも突拍子すぎて信じきれないのだ。

「頼む。信じて……くれ」

綾峰は言葉を吐くしか方法はなかった。

「……………」

神裂は覚悟を決めた表情で言った。

「！？正気か、神裂！！こいつの言っていることに証拠はないんだ

ぞ！」

「ですが、彼に嘘をつく理由はありません。実際、上条少年は先ほどの羽によって頭部にダメージを負っています。それに彼の言う通りなら、この方法をすれば彼は記憶喪失から救われます」

「だが！」

「貴方は、彼が記憶喪失になったことでインデックスが悲しむ姿を見てもいいと言うのですか？」

「つぐ……………卑怯だぞ、神裂」

「私は見たくありません。さあ、始めますよ。ステイル」

「……………わかった。それが彼女のためになるのなら」

そう言って、2人の魔術師は上条の方へと向き直った。

その時、綾峰が走り出した。

2人は突然の綾峰の動きに驚く。瀕死の人間のどこに走る力があったのだと。

そして遅れて2人は気付いた。倒れ伏す上条の上空、先の戦闘で穴の空いた空間から漏れ落ちてくる1枚の羽を。

それはゆっくりと舞い降りて、上条の頭に、ぶつかる前に綾峰の出した手に舞い降りた。生温い血が倒れる2人に掛かった。

既に、綾峰に演算能力は残っていないかった。

体力はほぼ0。目も霞み、四肢も自由には動かない。

その時、もう見えなくなっているはずの目に1枚の羽が落ちてきたのが見えた。

それは上条の真上にあつた。

その光景を見た瞬間、綾峰にあの感覚が戻つた。

AIM拡散力場が綾峰の回りに集まってくる感覚。

それと同時に体中から力が湧き上がる感覚。

だから、走つた。

上条を守る為に。

白い羽を吹き飛ばすつもりで手を前に出した。

そして、手で羽を掴んだ瞬間。

肉が弾け飛ぶ音がした。

「いいえ、大丈夫ですわ」

爪が食い込みそうな程、手を握りながら、

「大丈夫に決まっていますわ」

白井は綾峰に言った。

それを見る透明な少年は聞いた。

「……………。もしかして、俺達って知りあいなのか？」

その質問が白井には一番辛かった。

つまり、その質問こそが彼が白井のことをわかっていないという最大の証拠なのだから。

ええ、と弱々しく呟き、白井は訊ねる。

「忘れてしまったのですの？ 私達は共に風紀委員ジャッジメントで事件を解決して
いましたのよ？」

「ジャッジメント？何かの探偵団の名前？」

「…………綾峰先輩、あなたは私を『幻想猛獣（AIMバースト）』から救って下さったのですよ？」

「エー、アイ…なんだって？」

「…………綾峰先輩、お礼にどこかにでかけようって約束したではありませんの？」

「よう、綾峰。大丈夫か？」

そう言って白井と入れ違いに入ってきたのは上条だった。

「……………」

しかし綾峰から返事はない。

「返事がない どうやら死んでいるようだ」

「いや、生きてるから、かろうじて」

綾峰は上条のボケにつっこみをいれつつ、上条を見る。

右手にギブスが巻き付けられているが、それ以外に目立つ外傷はなかった。

「よう、上条。今日はインデックスは連れてないのか？」

「ああ、あいつは俺の部屋で留守番してるよ」

「その左手の火傷は？」

上条の左手に微かに火傷があった。

「あ、ああ。……………知りあいの神父の手紙が爆発しやがった」

上条は言う。何もかもを覚えている者の言い方で。

「何だ、そりゃ。とにかくご愁傷様。でも、お前が無事で良かったよ」

「はは、まあな。にしても、お前も大変だったんだな。病院抜け出して事件を解決しに行ったんだって？」

「まあな。こうやって五体満足で戻れたんだから良かったんじゃないの？」

ただ一つ、綾峰が”上条”を救ったことを知らぬまま、上条当麻は全てを覚えていた。

上条が去ると、カエル顔の医者がやってきた。

「診察の時間だよ？」

「はい」

カエル顔の医者はいくつか問診すると、その度に書類に何かを書いた。

そして、最後に、

「それにしても言わなくて良かったのかい？」

「なんの事をですか？」

「君、彼のために左腕をなくしたのに？」

カエル顔の言葉と同時に、綾峰の左腕が消えていく。

肘までしかない左腕を見て、綾峰は言う。

「別に、それで責任を感じさせても嫌ですから」

「……………彼と同じように残っていれば治せるんだがね？」

そう言ってカエル顔の医者には本当に申し訳なさそうに言う。

「仕方ないですよ。先生の忠告を無視した俺が悪いんですから」

綾峰は苦笑しつつ、言う。

綾峰の左腕は先日の戦いの際に上条を庇って羽を受け止めて崩壊したのだ。

そして、その代わりに綾峰は黒い物体を左腕の形にして見た目の色を変えてホンモノの腕のようにした。

そう、それが代償だった。

「友達の代償が、左腕1本で済んだんですから、喜ばなくちゃ」

「君が納得しているなら良いんだけどね？」

「ええ、満足です」

綾峰は満面の笑みで言った。

八月二日 【日常編】（前書き）

ここからは arcadia とはかなり違う展開が多くなると思います。

ちなみに arcadia では、ここから白井×綾峰ルートでしたが、小説家になるうでは意図的に変えています。

もしかすると佐天ルートや神裂ルートもあるかもしれないです。

八月二日 【日常編】

常盤台中学学生寮、二一八号室。

ベッドの上で、白井は考えていた。

（「黒子は、綾峰先輩のことが…」）

綾峰がちよっとした悪ノリで行った記憶喪失ゴッコの際に、白井がつい口にしてしまった言葉。

その時は白井の言葉を遮るように言った綾峰の言葉に怒りのあまりドロップキックをした後、3時間連続で説教をしている内に流れてしまっていたが、

（私はあの後なんと言うつもりだったんですの？）

自分が何を言うつもりだったのか、白井は覚えていなかった。

記憶を無くしたように無表情で自分を見る綾峰が怖くて、そしてそれ以上に自分の知っている綾峰がもういないのだと思って、白井の頭の中は真っ白になっていたのだ。

（もしも、綾峰先輩があの一瞬間に謝っていなかったら）

そんなifが頭の中をくるくると回っていく。

「私はいつたい、何をしたかったんですの？」

白井のため息と一緒に漏れた問いかけに、

「そうねえ、あんたは何がしたいんでしょうねえ」

御坂の怒りに震える声が返って来た

枕を抱えて壁を見つめていた白井はベッドの上で転がると、右手を握りしめて電撃をばちばちと放電している御坂に気がついた。

「あら、お姉さま。そんなに震えてどうなさったんですの？」

本気で意味が分からないという様子で首を傾げる白井に御坂の血管からプチッと音がした。

「私のベッドで何を堂々と寝てんのよ！アンタはああああああああああ！」

「なるほど、私の本能が無意識にお姉さまを求めて…やはり黒子はお姉さま一筋って事ですね！」

「冷静に分析して気持ち悪い事言ってんじゃないわよっ！」

「えへへへ。これがお姉さまの枕」

御坂のツッコミに意を介すこともなく、そのまま枕に顔を埋めると御坂の手から逃れるように壁の方に転がっていく。

そして、壁にぶつかると枕から御坂の香りを全て吸い取るように息を吸い始めた。

「なっ！？何をして　っ？？？」

御坂が驚きながら更に声をあげようとしている矢先、

ふと、先ほどの白井が壁にぶつかった衝撃でベッドの横の棚に置かれていた目覚まし時計が傾いて、重力に従って落ちてきた。

「ごんっ」という音が部屋に響く。

「ッ!」

ベッドの上で白井が後頭部を抑えながら唸りだした。どつちやら相当痛かったらしい。

「何やってんだか…!」

そんな白井の様子に御坂は呆れてため息を吐いた。

とある科学の事件トラブルメーカー体質第24話

「綾峰君。完成したよ」

そう言って、カエル顔の医者綾峰の左腕にそれを取り付けた。

「せ、先生!?!これはまさか!?!?」

「ああ、君のための義手だよ。感じはどうだい？」

「ええ、かなり良いです。感触も本物そっくりですし、動きもまさに腕そのものです！」

「気に入ってくれたようで良かったよ。だが、その義手はそれだけでは無いんだよ」

「それだけじゃないってのは？」

「その義手は学園都市の科学技術の粋をこらしたものでね。夢の3大機能があるんだよ」

「な、それはいつたい!？」

「まず、その1。ひとさし指からビームが出る。」

「なっ!」

「その2。ロケットパンチができる!」

「すげええええ!」

「その3!中指から醤油が出る!」

「何だああああああ!?!?タマゴかけご飯にでもしろっての!?
?ていうか他のがすごいのに、それだけ明らかにしょぼすぎるだろ
っ!」

「くっ。ならば喰らえ！ロケットパンチ！」

左腕を飛ばし、御坂の額に当てる。

「ぐはあー！やーらーれーたー」

「よわっ！っーかわざとらしいなっ！！」

御坂はばたりと倒れた。

「ふっ、これがあんたの愛ってやつね。負けたわ。黒子を連れていきなさい」

「……………綾峰……………先輩」

白井が御坂の後ろから綾峰の方に向かってくる。

「……………白井」

そして2人の距離は零になり、

「……………仲間よ」ロリコン

背景でロリコンデルタフォーサーが歓迎していた。

「ちがあああああああああつッ！！！！！」

綾峰は叫びながら目を覚ました。

「……………どうすっかなー」

左腕のリハビリをしながら、綾峰は呟いた。

能力で作った左腕を自然な腕のように扱うためのリハビリで、今は紙に文字を書いているところだった。

「まさか、左腕がなくなるとは…。上条の記憶喪失の代償ってやつか？そりゃ確かに記憶喪失とかよりは良いけど…やっぱりなあ」

先日の事件で腕を無くし、いくら満足だとカエル顔の医者に言っってはみれど、やはり自分の身体がなくなるといふのは喪失感、と言うよりは違和感があった。

未だに左腕があるような感覚が残っていて、つい左手で何かを取ろうとしたり両手で食事の盆を持つとしたりしてしまう。

一応能力で義手を作っているが、どうにも制御がうまくできていないようで違和感が付きまとう。

やはり普通に義手を作ってもらった方がいいのだろうか、と綾峰は考えてそれを否定する。

義手ではよほどのレベルでない限り、結局は周りに気付かれてしまう。

肌の色や材質、触感など、いくら科学技術の発達している学園都市であろうと、100%腕と同じ物は作れない。

だからこそ能力のより細かい制御のための練習も兼ねて能力で左腕を再現しているが、やはり『黒い物体』、『光学操作』、『発熱能力』、『発電能力』などなど、細かい点までまねるには複数の能力を使用せねばならない。

(こんなんじゃない、戦闘中は普通に黒い状態で戦うしかないか…?)

そんな事を考えている内に、いつの間にか、綾峰の左腕が書く文字が「orz」になっていることに綾峰は気付いていない。

「つか、戦闘はこれ以上はこりこりだったの………はあ、メンドクセー」

先日の神裂との戦闘を思い出しながら身体をぶるりと震わせる。

「むー？何がメンドクセーの？」

びくうっと、突然の声に驚いた綾峰はベッドの横にいつの間にか雲雀がいたことに気がついた。

「ひ、雲雀？いつからそこに？」

「むー？さつきからいたのに、おにーちゃん考え事してて反応してくれないんだもーん。むー！！」

「わ、悪かったな。それにしてもお前、その格好……………」

雲雀はいつもの患者用の服装ではなく、白のワンピースだった。

「えへへー。いいでしょー。私のための服なんだよー」

そう言っつて雲雀は喜ぶ。

考えてみれば、雲雀は研究機関でモルモットのごとく扱われていたのだ。

こういっつお洒落な服を着るのは案外初めてなのかもしれない。と綾峰は思った。

「可愛いんじゃないか？それにしても普段着つてことは退院するの
か」

「…………… / /」

「雲雀？」

俯いて反応のない雲雀に綾峰は声をかけると、雲雀は慌てて返事をする。

「う、うん！今日で私退院だから、おにーちゃんに挨拶しておこー
と思っつて」

「そっか。良かったな。黄泉川のところに住むんだろ？」

綾峰は未だ包帯まみれの右手で雲雀の頭を撫でながら聞く。

「うん！おねーちゃんと一緒に暮らすんだー」

そう言うてにっこりと笑う雲雀に綾峰もにっこりと笑うのであった。

「……………やっぱり、じつ……………色々まずいと思うんだよなー」

『何がだよ……………というか何で君は僕の携帯の電話番号知ってるんだッ！』

綾峰の言葉に叫ぶのはロリコン神父だった。

「いや、気がついたら俺の携帯にお前と神裂の連絡先が入ってたから」

『何で！？神裂か！？あの神裂が君に教えたのか！？』

「そっぴや、携帯に貼り付けられたメモで『先日の件は大変申し訳ありませんでした。私は仕事のためにイギリスに戻りますが、何かお困りの事があつたら、私か、ステイルか、私に連絡下さい』って書いてあつたんだが。とりあえず、お前に」

『それは、二度も強調している神裂に電話するべきじゃないのか？
というか！あの神裂が！？僕としてはそっちの方が驚きなんだが…
…』

「いや、この件で神裂さんに電話したらつまらぬ…というかほら、
やっぱりお前しかいないなと思って…視聴者のに」

『単に面白がってるだけだよな！？こつちとしては今忙しいからさ
つさと切りたいんだけど！？てか、メタな話はすんな！』

「そついや、さつきから電話越しに何かボンボン音がするけど何や
つてんだ？」

『日本に来た弱小の魔術結社の1つを潰してるところだ！』

「大変だねー（棒読み）」

『うおおおおおい！！良いからさつさと用件言えよ！』

「意外とお前余裕だろ？」

『切るぞ！？』

「最近後輩に超叱られてるんだが………しかもつも下。羨まし
いだろ？ロリコンとしては」

『だから僕はロリコンじゃないっ！というか僕をMだと前提にして
るだろ、それ！！そもそも相談じゃなかったのか？』

「いや、初めはそついつつもりだったんだけど、気がついたらお前

って俺より年下じゃん？そう考えると癪になっってきて」

『ようは、ただのイタ電なんだなツ！？切る！僕はもう切るからなツ！』

「いやー、実際さー。流石に悪ノリしすぎちゃってさあ。このまま仕事行くと俺は仕事先で凄まじい量の書類処理で忙殺されると思うんだ。そこでその後輩の機嫌を取って、どうにか俺が行く前に少しでも仕事の量を減らしてもらおうと思うんだけど…」

『君は単純に仕事したくないだけだろ！というか悪ノリって何したんだ？』

「記憶喪失ゴツコしてた」

『何その状況！？というか君確か全治半年くらいの重症患者じゃなかったっけ？よくそんな莫迦な事ができる余裕があったね…』

「はあ。インデックスにロリコン神父は使えないヤツだったって言っとっ」

『何で！？何でわざわざ彼女にそれを伝えるの！？？』

「じゃあな。ステイル」

『…え？あ、ああ。じゃあなって違っただろ！彼女のことは！？？というか何でいきなり名p.i ツーツ』

「やっぱ、アイツって突然の状況に弱いよな……………はあ、どうすっかなー。メンドクセー」

夜中、綾峰は病室で一人ごちた。

八月二日 【日常編】（後書き）

楽しんで頂けたら幸いです。

感想、レビュー、あるいは評価をして頂けると幸いです。

ちなみに、綾峰は全治半年となっておりますが、実際には『肉体再生』等を使っているので数日で退院する予定です（え

八月六日 巻 【狂乱逢引編】（前書き）

タイトルは一応同じですが、内容はまったく違います。

八月六日 巻 【狂乱逢引編】

第七学区、コンサートホール前。

カップルやアベックの集合場所として名高いこの場所では、たくさんの男女の組み合わせがいた。

その中に1人、噴水の淵に座ってピンクのワンピースに身を包み、肩まで届く茶髪をツインテールにまとめた少女がいた。

どこことなく慣れない雰囲気^{シヤッジメント}に圧されつつも少女は回りを見てカップルしかいないこの空間で居心地が悪そうにしている。

白井黒子だった。

普段とは違い、今日は風紀委員の腕章はしていない。

ふと、白井は呟く。

「……………遅いですわね……………」

携帯の時計を見ると既に集合時間の10時から30分が経っている。カップル達がそれぞれお互いの相手を見つけて去っていくの1人見ているのは意外としんどいものがあった。

「もしかしてどこかでまた事件に巻き込まれて……………ありうるから嫌ですわ。はあ」

妙な想像をして、白井はため息を吐いていた。

とある科学の事件体質トリプルメーカー第25話

「きれいな空だろ、10時なんだから、もう」

.....
(汗)

「遅刻だあああああああ!!!!」

朝の学生寮に綾峰の叫びが響き渡った。

「目覚ましセットしておいたのに!?!」

目覚まし時計は何故かセットしておいた8時より1分前の7時59分で止まっていた。

なのでそのまま眠っていた綾峰が気がつけば朝の10時だったのだ。

「ああ、もうメンドクセー」

愚痴を言っただけでも始まらないと、綾峰はすぐに顔を洗い身支度を

始めた。

まず朝食はパス、食べてる時間なんてないし、後2時間もすれば昼だ。

着替えは特に凝った格好ではなく、普通の学生服。

常盤台は外出時の学生服の着用義務があるから、白井も学生服で来るだろうし。

携帯よし、財布よし、中身よし。

よし、後は出かけるだけだ。

準備を終えて綾峰は外に出ると、いきなり学生寮の通路に倒れている銀白の物体に遭遇した。

「……………た」

円形に広がる銀髪に白い修道服、そして髪と同じく銀色の安全ピンによって針のむしろになっている物体から微かな声が聞こえてくる。綾峰は壮絶に嫌な予感がした。

「お腹、減った」

「管轄違いです。上条に言ってよ」

行き倒れているインデックスの要求を即座に担当部署かみじょうにパス。

「しかもまだ昼前にもなってないよ？」

時間は10時10分。

お昼にしては早く、朝ご飯には遅い時間だ。

こんな時間に食べるものとしたらせいぜいおやつ程度だろう。

インデックスはお腹を抑えながらどうにか上半身だけ起こすと暗い

表情のまま言った。

「とうまは学校に行っていないもん。それに食べ物が冷蔵庫になかったからお昼も食べれないし、朝のあの量じゃ私には足りないんだよ」

どうやら上条のところではエンゲル係数が急上昇しているようだ。綾峰は時計をちらりと確認してすぐに行くべきだと判断する。

「インデックスさん。俺はこれから出かけるから」そう、じゃあ。仕方ないね。ばいばい」………わかった。わかりました、わかりましたって、とりあえずお金貸すんでコンビニで何か買いなさい」

しかし、哀愁を漂わせる少女を見捨てられるほど綾峰は外道ではないのだ。

「え？良いの！？わーい。ありがとう」

瞬間、嬉々として綾峰から千円札を受けとるインデックス。即座に起き上がるところを見て、かなりゲンキンだな。と綾峰は心の中でツッコミを入れた。

「どういたしまして、それじゃ。俺はこれから出かけるから。良い子にしてるんだよ？」

「はい」

子供にお留守番をさせる父親ってこんな気分なんだろうなあ、とか綾峰が思っていたのは秘密だ。

「遅いわね」

「ええ、遅いですね」

「遅すぎますね」

そう言っつて、若干遠くの茂みに隠れて白井を見守る3つの影があった。

「これは2583点マイナスですね」

「そう？私的には3382点マイナスでも良いわ」

「佐天さんも御坂さんも上限は何点なんですか？」

何やら妙な点数を言い出した二人に初春がツツコミいれる。

先ほどは白井の私服を見て、佐天は1593点、御坂は1450点と言っていた。

「それにしても覗き見なんかしちゃって良いんですかねえ」

「甘いよ、初春」

「ええ、甘いわね、初春さん」

初春が申し訳なさそうに言うのを佐天と御坂は首を振って否定する。

「白井さんが初めてのデートで失敗しないようにフォローするためなんだってば」

「これは黒子のためなのよ。わかるでしょ、初春さん？」

「でも端から見るとただのストーカー……」

「友達「先輩としてよ!」「」

「はあ」

初春は二人の答えに納得いかない表情で頷いた。

さて、ことの起こりは昨日、綾峰が退院するという話を聞いた白井と初春が退院の手伝いをすると言い出して、それに着いて来た御坂の一言だった。

「そついや、黒子。綾峰さんにこの前のお礼の話はしたの？」

「はい?」

御坂の言葉に驚いて白井は花瓶を片づけていた手を止めた。

「え〜？何の話ですか？」

暇そうに天井を見ていた御坂の言葉に反応して佐天が目を輝かせて尋ねてくる。

「ああ、佐天さんは眠ってたから知らないだったわね」

「さ、佐天さんは関係ありませんのー！」

慌てて白井が二人の間に入ってくる。

その顔が心なしに赤くなっていることに気がついた御坂は笑みを浮かべて言葉をつなげる。

「この前のじくむぐつー！」

しかしその前に白井によって口が塞がれて話せなくなる。

その様子に首を傾げる佐天に横に座っていた初春が話を続けた。

「この前、『幻想御手』の事件の時に白井さんが捕まったのはいましたよね？その時に白井さんを助け出したのが綾峰さんなんですよ〜」

「う、初春！？」

「ああ、あれですか…。なるほど、それでお礼ってわけですね」

状況を理解したのか、佐天の顔に意地悪な笑みが浮かぶ。

「…ぷはっ。そういうわけで、綾峰さんとデートして」で、デートではありませんの!」お礼の意味も含めて『デート』してきなさいって言ったのよ」

御坂は白井の手を振りほどくと、初春の言葉にさらに話を続ける。慌てる白井を余所にあえて『デート』を強調した御坂の言葉に白井は顔を真っ赤にして、

「あっ、あっあっあ…っ」

おろおろとしている。

そんな白井の様子に佐天と初春は笑みを浮かべて話を広げていく。

「で、どこでデート」デートではな…」『デート』するかだよな。やっぱり水族館とか遊園地かな」

「最近封切した映画とかどうですか?」

「ああ、あれね。ちよつど良いんじゃない」

「お昼とかはやっぱりどっかのレストランですかねえ」

「そういえば、この前新しく駅前に食べ放題のお店ができたらしいし、そこで良いんじゃない?」

「ちよっ…待っ」

白井は話がだんだん勝手に進み始めている事に気がつき話を止めさせようとしますが、

トトトトト

地響きが聞こえてきて、白井は俯いていた顔を上げた。
なにやら駅の方から走る音が聞こえる。

噴水の淵に立って、駅の方を見るといつもの黒い制服身を包んだ綾峰が白井のいる方に向かって走って来ているのが見えた。

綾峰の表情はいつも以上に真剣で、いつものだらけた様子を感じさせない勢いで猛ダッシュをしている。

それを見た白井は一瞬顔を輝かせるが、すぐにむすっとした表情になる。

時計を見ると、既に10時半。

「いくら何でも遅刻しすぎですよ。殿方がデ、…約束に遅刻するなんて」

流石に怒り心頭な様子の白井だったが、

「こ、これはジャンボウルトラパフェを奢ってもらわないと割に合わないですわね」

どこか嬉しそうにしているのは遠くからみていた御坂達にバレバレだったりする。

綾峰はその間も走り続け、ついに白井のいるコンサートホール前の

「いやあ、まじで死ぬかと思ったわ。メンドクセー」

11時半過ぎに警備員の詰め所から出ながら綾峰が言った。

「何がどうなったらあんなことになるんですの…」

呆れる白井に綾峰はあはは、と渴いた笑いを零すだけだった。

ため息を漏らす白井の方もいつものことだと既に割り切っていたりする。

「それにしても、遅れちまって悪かったな」

詰め所から最初の行き先である映画館のある娯楽エリアに向かう途中で綾峰が謝罪をする。

「まあ、あんな事もあったのですし、仕方ありませんわ」

白井は首を振って苦笑しながら綾峰を許してくれた。

実際には牛の件でうやむやになっていたとは言え、もともと遅刻していたので綾峰としては後ろめたかったりするわけだが、お互いの精神的な衛生のために言わないでおく事にした。

「そっぴや今更だけど、私服なんて珍しいな」

何となく居心地が悪くなった綾峰は話題を反らすことにした。

綾峰としては風紀委員と常盤台の二重のルールによっていつも制服姿の白井が私服を着ていて驚いていたのだ。

一方、突然私服のことについて触れられた白井は緊張のあまり力チコチに固まってしまう。

今日の白井の服装はピンク色を基調とした肩出しタイプのワンピースに白の厚底靴だ。

前日に佐天や初春、御坂達によって白井のクローゼットの中から出された私服の中から更に白井が選んだ物だった。

元々は自分が選んでいた物の中から出して来たとは言え、男性の視線を意識することなく買ったものであり、こうやって実際に男性、しかも少なからず意識している相手が見ているとなると恥ずかしさが込み上げて来ると同時に不安が白井の胸中に広がっていく。

「私が私服なのはへ、変ですの？」

綾峰の数歩前でぎこちなくもくるりと回っていつものように挑発的な笑みを浮かべる白井に綾峰は特に意識する様子もなく感想を口にする。

「いや、良いんじゃないか。うん、可愛いと思う」

「~~~~ツ!？」

いつもは憎まれ口やら皮肉やらが出て来る口から素直な感想が出て来て白井は予想外の事態に顔を赤くしてしまった。

すぐに顔を背けて前を向いたおかげで綾峰にはバレずにすんだが、綾峰の方を見る事ができなくなってしまった白井だった。

「綾峰先輩がそんな素直に褒めるなんて珍しいですわね」

「ん？そりゃ俺だって褒めるときゃ褒めるさ」

実際、可愛いというのはあるのだが、書類仕事を1人でやるのが恐ろしくて、白井に逆らえないのもあつたりする。

白井はそんな事も露知らず若干テンパリながらも言葉を返した。

「ふ、ふふふ。綾峰先輩も殿方ですものね。黒子のこつという姿を見て欲情してしまうんじゃないですか？」

言った瞬間、白井は自分の言葉に愕然とした。

(何を言ってるんですのおおおおおおおお?)

しかし言ってしまった物は変えられない。

先ほどより更に顔を赤くして既にトマトのように赤くなった顔を見せないように綾峰の言葉を白井は待った。

「はっ、それはないな」

「はい？」

瞬間、黒子の頬の赤みが引いていく。

「流石に小学生から上がり立てのガキに欲情はしないって。オセロは俺を変態に仕立て上げたいんですね、分かります」

「な、なな」

そして次は別の意味で顔が赤くなっていく。

「第一、そう言う事はせめて胸がC以上になってから言えって…の…。白井？白井さん？白井様？何か、気のせいかな周りに地響きが聞こえて来るのですけれど…ていうか、目が光ってますよ！？ってダーツはやめるおおおお！俺、病み上がり！アイアムやみあげり！おーけー！？」

「フフ、ウフフフ。オーケーですよ。大丈夫、ダーツはただの拘束用ですので。貴方のその性根は私自ら蹴り直して再生させてあげますわ！」

「わかってないiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！」

綾峰の悲鳴が白昼の路上で響いたという。

そんな二人から少し離れた茂みの中から声が聞こえて来た。

「あちゃー。さっそくやってるやってる」

双眼鏡を片手に持った佐天が笑いながら言う。

「あのお二人も相変わらずですねえ」

その横で同じく双眼鏡で二人を見ている初春が言った。

「お、あれは『常盤台中学内伝、おばーちゃん式ナナメ四五度からの打撃による故障機械再生法!』」

初春とは反対の位置で佐天の横にしゃがんでいる御坂が双眼鏡で見ながら実況をする。

ちなみに今の技はただの蹴りであったりする。

「さて、次は映画館ですね。先回りしちゃいましょうか」

双眼鏡から目を離れた佐天は今日の予定の書かれたスケジュールノートを見ながら他の二人に移動を促した。

「でも予定の映画ってもう始まっちゃってるんじゃないですか?」

初春の疑問は正しい。

既に時間は11時半を過ぎている。

予定の映画が始まるのは10時半で、1本が約2時間の映画なので次の回だとしたら確実に後1時間は待たなければいけないのだ。

「だいじょーぶ、大丈夫。今から行ったらちよつど始まるやつがあるし。むしろ今回はそっちの方が面白くなりそうだし」

「?」

佐天の言葉に首を傾げる御坂と初春だった。

「こ…これしかないんですの？」

「すみません、ただいまのお時間ですと、それ以外は一番早くて後1時間ほどお待ちいただく事になります…」

映画館のチケット売り場で白井が受付嬢と話をしていた。

綾峰はお金を渡して既にポップコーン等を買に行っていた。

「しかし、これは…」

白井は目の前の掲示板に書かれた映画のタイトルを見る。

そこには正にいかにも恋愛映画があった。

しかも確かその内容は上司と部下だった男女がいつの間にかお互いに恋慕を抱いており、事件を通じてそれをお互いに気付く、というゴテゴテの恋愛ものだったはずだ。

もちろん、こういう恋愛物は嫌いではないし、どちらかと言えば好きな部類ではあるのだが、今日は綾峰と一緒に見るのである。

ただでさえ、映画を異性と見るということもあるし、第一、上司と部下だった男女という点が今の白井はつい意識してしまう。

落ち着いてこれを見る胆力は白井にはない。

「どうされますか？」

受付嬢が押し黙ってしまった白井に恐る恐る尋ねて来る。

「おい、白井。さっさと入ろうぜ」

そこに綾峰がポップコーンとジュースを盆に乗せてやってきた。白井は気付く。

既に逃げ道はなかったのだと。

「学生2枚をお願いしますですの」

「やっと入りましたね」

チケット売り場で少し躊躇っていた様子の白井だったが、結局諦めたのか綾峰と一緒に映画館に入っていた。

それを見ていたのはもちろん、後ろからストーク……もといフォロワーのために付いて行っている御坂達だった。

「それにしても最初の騒動とか以外は特に問題ないですねえ」

初春の言葉に御坂も佐天も首を縦に振って面白くないといった表情だった。

なんというか、こうも少しハプニング的なものを期待していたのもあったが、今回は綾峰に卒が無さ過ぎるのだ。

何と言うか、問題を起こさない様に気をつけているというか…。
うーむ、と佐天が唸っていると、チケット売り場を見ていた御坂の
顔が急に青くなり始めた。

「やばっ…」

「どうしたんですかぁ、御坂さん？」

「チケット売り場に誰かいるんですか？」

御坂の様子に気がついた佐天と初春が御坂に声をかける。

御坂の視線の先にはチケット売り場でチケットを購入しているスー
ツ姿の女性が1人いた。

「寮監…」

「へ？」

御坂がチケットを購入している女性を指して言う。

「あの人、うちの寮の寮監なのよ。黒子が私服だって事がバレたら
…うっん、そもそもデートしているってのがバレたら…かなりまず
い」

「…はiiiiiiiiiiiiiiii!?!?!」

佐天と初春の叫び声が響いた。

「1人分をお願いします」

常盤台中学学生寮に詰めている寮監、尾小平仁美おこひらひとみは今日が久しぶりの休みだったので前から見に行きたいと思っていたこの映画を見に来たのである。

女子校の学生寮、と言えば規則が厳しいイメージがあるが、実際にここに中学生とお嬢様というワードが引っ付いている常盤台中学学生寮ではより徹底した規則が必要である。

特にその体現たる寮監が男と付き合っつて生活を乱してしまう等と言うのはお笑いぐさである、と尾小平は考えている。

他の寮監達は割合、男性関係については軽いので尾小平は割と硬派であるというのも事実だが…。

とにかく、男性という物が日常に足りない尾小平にとってこういうたまの休みに恋愛映画を映画館やDVDで見るのが唯一の楽しみとも言えた。

「座席は前と後ろがありますが、如何しますか？」

受付の質問に尾小平は少し悩む。

後ろの方が全体を見やすいが、細かいところを見逃してしまうことも多い。

だが、逆に前に行くと、大画面での迫力を楽しむこともできるが、大きすぎて全体を見ることができない。

生憎、今回の映画はかなり大盛況なよううで中央部分は既にほとんど埋まっているようだった。

しかしあまり前で見ると目が痛くなるし…と考えて、

「前の方をお願いします！」

そこに、

「やほ。尾小平じゃん。何やってるじゃんよ？」

尾小平が休日にもっとも聞きたくない声が聞こえてきた。

御坂の頭を片手で掴み、もう片方の拳を御坂のこめかみの少し上に当ててぐりぐりと抉るように動かして逃げないようにすると、尾小平は改めて声の主の方を見る。

そこには珍しくジャージではなくジーンパンにラフなTシャツ姿の黄泉川愛穂がいた。

しかも爆乳を抑え込んでいるTシャツは今にもはち切れそうなのが尾小平の血管を浮き上がらせる。

黄泉川と尾小平の間柄は警備員アンチスキルの同僚というものだが、何かとちよくちよく顔を合わせている仲である。

まあ、会っている頻度と仲の良さは反比例だが。

黄泉川の規則に縛られない行動に尾小平は毎回頭痛を煩わされている。

「貴女には関係ないでしょ」

そういつて尾小平は更に御坂の頭を掴む手に力を込める。

御坂の悲鳴が聞こえるが、頭の痛みで能力は使えない。

そんな御坂と尾小平を交互に見ながら呆れたように溜息を吐いて黄泉川は言う。

「いや、次の映画を見たいからチケットを買いたいんだけど、そこをどいてくれないと買えないじゃん？」

そう言われて尾小平は改めて自分がいる場所を思い出すと、御坂の

頭から手を離して横にどいた。
もちろん、服は掴んでいるので御坂をこの機に逃がすようなへまはしない。

「それにしても、あんたがこういう恋愛物に興味があるとはねえ」
珍しいものを見たという表情で言う尾小平に黄泉川は平然と足元にいた少女に視線をずらす。

「妹がね、こういうのが好き、というか一度見たいってことらしくてね。この前から連れてけ連れてけって煩いじゃんよ」

「むー。見たいんだもん」

そう言っただ黄泉川の足元にいた少女がふくれっ面になるのを見て、なるほどと尾小平はうなずいた。

「確かに、貴女はこういうのは興味なさそうねえ」

いつも色気のないジャージ姿の黄泉川を頭に浮かべて尾小平はにやりと笑う。

「まあね、でもこういうのに興味があるのは雲雀だけじゃないみたいじゃない？」

ちよっかいを掛けるつもりが逆にちらりとこちらを見てにやにや笑う黄泉川に尾小平はぐっと、言葉を詰まらせる。

「悪い？」

「別に。ただ、そっちの子は意外だったみたいじゃん？」

「へ？」

黄泉川の視線の先に向けると、御坂がいた。

「寮監つてこういうの好きなんですネ」

「ぐっ」

寮内での自分のイメージを知っているが故に、黄泉川への対応や映画の内容に御坂は驚いていた。

まずい、と尾小平は苦い顔をすると、言った。

「もう行っていいぞ。ただし、喋ったらどうなるか…」

「あはは、喋りませんよ。ただ、今度一回だけでも見回りの時に見逃してくれたらいいなあとか思ったり」

「…わかった。一回だけだぞ」

「はい。それじゃ、失礼prrrrrrr」

御坂の言葉を遮るように電話が鳴る。

見ると、黄泉川の携帯電話のようだ。

少しの間真剣な表情で喋ると、尾小平の方を見て言った。

「事件らしいじゃん。あんたも呼ばれてるから一緒に行くよ」

「はっ？私は映画が…」

「いいから」

「くっ」

「その嬢ちゃん。確かこの前の事件の時にいた子だよね？」

「?...ああ、『レベルアップ幻想御手』の...」

黄泉川の言葉に去ろうとしていた御坂が振り返ると、しばらくしてぼんと手を叩いた。

「じゃあ、綾峰のことは知ってる？」

「ええ、まあ」

「じゃあ、雲雀と一緒に映画見て、そのあと綾峰に預けておいて」

「はい？」

驚く御坂をよそに尾小平の持っていたチケットともう一枚分のチケットの代金を御坂に手渡すと、尾小平を引きずって行った。

「それじゃ行くよ」

「えいがー」

引きずられていく寮監の顔はいつものクールビューティ어의イメージからは遙か遠いものだった。

「ちよつ。映画って」

慌てて二人を追いかけようとするが、その前に服を引っ張られた。

「おねーちゃん、一緒に見ないの？」

「うっ」

雲雀という女の子の涙ぐんだ目に御坂は、

「はあ、一緒に行こうか」

「うん！」

なす術もなかったという。

「あれ？御坂さん、映画館に入ってっちゃんいますよ!!」

「ええ!？」

ちなみにこの二人が忘れられていたのは言うまでもない。

八月六日 巻 【狂乱逢引編】（後書き）

というわけで、今回は白井分豊富に…と思っていたらいつの間にか寮監分が多くなってしまっていました（え

ちなみにこの寮監の名前はCVのお二方の名前から取っています。性格は自分のイメージなのでアニメや漫画とは若干違つかもしれません。

ついでに寮監が警備員なのもオリジナル設定です。

でも、あの寮監の強さなら黄泉川と一緒に双壁をなせると思うんだ。では、また次回。

感想や評価をお待ちしております^^

八月六日 弐（前書き）

一応、目標は四話で1つ物語完結と言ったところで考えてたりします。

皆さんはどうですか？

八月六日 式

とある科学の事件トリプルメーカー体質第26話

学園都市第一〇学区。

研究施設の多いこの学区はそれと同様にちらほらと廃墟となっている施設もある。

そのほとんどは既に研究が終わっているか、研究自体が頓挫したため放置されたかなどの理由で次の研究が決まるまで企業や学園都市が管理している。

しかし、その中でも管理している外の企業などが潰れたために完全に廃墟と化している場所もある。

そんな廃墟の1つであり、普段は野良猫達が平穩に暮らしている『第三大輪製薬研究所』は現在、

「あああああああああああああああああああああ！！」

戦場だった。

悲鳴の様な雄叫びと共に連続した銃声がシャッターによって閉鎖された室内に響いていた。

狂った様に雄叫びを上げているのは部屋の隅に立っている三十代程の男で、銃声は男の持つオモチャの様にも見える黒塗りのアサルトライフル、F2000から発されている。

改良型のF2000Rと比べると若干性能は劣るものの、それでも赤外線による標的の補足や電子制御による『最良の効率で弾丸を当てるための』リアルタイムでの弾道調整機能は的確に標的を捉え、その5.6ミリの凶弾を吐き出し続けていた。しかし、その標的は、

「そついや、今日つてあそこのスーパーが冷凍食品の安売りしてる日だったな」

『あなたつて意外と主婦じみてるわね』

「うるせえ」

携帯片手にそこら辺の路上を歩く貧乏学生のような会話をしていた。本来ならば数十回は殺されておかしくない程の数の凶弾が携帯の少年に迫るが、その全てが少年の手前で曲げられてあり得ない方向に飛んでいった。

少年は少し長めの茶髪をなびかせながら銃を乱発している男の方向に向かって歩いてしたが、途中で面倒くさそうに手を前に掲げ、指を鳴らした。

直後、半狂乱になっていた男の頭部が爆発し、残った身体が赤い液体の池に沈む。

その周りには同じ様に身体はどこかが欠けた体が十数人分あり、それらによって赤い池が作られていた。

この状況を作った原因である少年は自らの着ている学生服の袖を見て言った。

「ちつ。やっぱ近距離で爆発させるもんじゃねえな。服が汚れちま

った」

『あら、やっと終わったの？遊びすぎたんじゃない？』

電話口から聞こえて来る声に少年は面倒くさそうに言葉を返す。

「お前らは何もしてねえだろうが。今回は当たり前引いたの俺だけだし」

『あら、心外ね。これでも仕事してたわよ？例えば、今回あなたが打ち漏らしたテロリスト狩りとか』

「へー、そうかい。ごくろうさん」

興味をなくしたのか、電話相手の言葉を流すと携帯を切った少年は室内に残党がないのを確認して出口に向かっていく。後始末はしない。

そんなものは下部組織が勝手にやるだろう。

「それにしても今回のギャラの配分どうすつかねえ。俺んどこ以外は全員ハズレで仲良く残党狩りしてたみたいだしなあ」

少年は4、2、2、2か？いやもう7、1、1、1でも良いか？とギャラの配分を考えだした。

瞬間、携帯がコールを知らせて来る。

携帯の画面を見ると、非通知と出ていた。

「ちっ」

少年は先ほどよりも更に面倒くさそうな顔になる。

相手を少年はよく知っている。

というかこのタイミングでこの携帯に電話をしてくるのは一人しか少年は思いつかない。

少年の属するある組織の指令役だ。

出ようか出まいか考えて面倒になってきてそのまま放置しているとコールが鳴りやんだ。

留守電になったようだった。

機械的な音声が流れ、特定の音が響いた直後、

『もしもし！へろへろ。きこえてますかあ？こちら山田太郎でござりますよ』

明らかに女性の声をしたそれが妙に高いテンションで語りかけてきた。

しばらく無視しているとそれは勝手に語りだした。

『もう、こんなに声かけてるのに出てくれないんですか？まったく失礼しちゃうなあ。ぶんぶん。あ、あれですね。電話すると死んじゃう病とかいうやつですね！もう、相変わらず帝督ちゃんはシャイなツンデレボーイなんですから。そんなだから、この前もすり寄ってきた子猫に逃げ』

「おい、なんでテメエがその話知ってやがる」

妙な話になってきて帝督はつい電話を取ってしまった。

『あ、やっと出てくれましたね。もう無視するなんて感心しませんよ。山田はぶんぶんです！』

「テメエがうぜえのが悪いんだよ」

『それでも何だかんだで電話を取ってくれるツンデレな帝督ちゃんが山田は大好きですよ』

「うぜえ」

帝督は頬をひくつかせながらふざけた相手の言葉を両断した。

『そうそう、さっきの子猫ちゃんの話は。見てましたから。監視衛星で』

「おい、テメエにプライベートとか公私混同っていう言葉を教えてやるのか？」

『あは。あの時の帝督ちゃんの顔は見ものでしたよ。ついつい山田、ウホッて来ちゃいました』

「オー人事に電話しようか今本気で悩んでるんだが」

『あ。悩めるお年頃ってやつですね。山田相談に乗っちゃいますよ。ついでに保健体育についても指導してあげますよ。なんてきやつ恥ずかしい』

「なあ頼む。もう本気で死んでくれ」

『あは。だが、断る！』

「……切っていいか？」

『ああ、そうそうさっき帝督ちゃんが潰してくれたやつらなんです

けど。まだ残党がいるみたいなんでよろしく』

「ああ？」

『あれ？わかりにくかったですか？ようは残党がいて第七学区の方に逃げたんですよ。Do you understand?』

「わかった。テメエが本気で死にたいんだってのはわかった」

『いやですね。短気な男の人は嫌われちゃいますよ？とりあえず、他のメンバーと一緒に行ってきて、ゆっくり狩って行ってね』

「……残党の人数とかはわかってるんだらうな？」

帝督はもうツッコむ気力も失せたのか、仕事の話にのみ集中している。

『6人ですよ。他にも細かいことは車の方に情報送っておきましたから。それにしてもなんだかんだ文句は言いつつしっかり仕事をしてくれる帝督ちゃんって本当にツンデプリ！』

帝督はイラつきながら携帯を思いっきり閉じた。

その際、携帯が若干嫌な音を立てたが、無視すると、帝督は出口に止めてあったヴァンに乗る。

「仕事だ」

一言だけ伝えるとメンバー達もうなずいた。

どうやら既に情報は全員に回っているらしい。

そしてメンバーの一人であるドレスを着た少女に手渡された書類を

読んで、

「相変わらず俺達に回って来んのはクソな仕事ばっかだな」

レベル5、第二位の垣根帝督かきねていとくは呟いた。

少女が走っていた。

少女を射るように照らしている夏の日差しが少女の肌に玉のような汗を浮かばせる。

汗は少女の足音に合わせて茶髪のツインテールと共に跳ねる。リズムの乱れた息が少女の必死さを引き立てている。少女の視線の先にあるのは病院。

その一室、医師がたたずむ部屋にあるのはたった1つのベッドである。

純白のベッドの上には一人の黒髪の少年が横たわっている。

少女が病室のドアを開ける直前に医師が少年とその家族に宣告する。

「残念ですが、彼の心臓はもって1ヶ月です。それまでにドナーが現れなければ…手術は不可能です」

ドアの外にいた少女はその言葉に衝撃を受け、涙を流して先ほどま

で駆けて来た道を逆走する。

音に気がついた医師がドアを開けるが、そこにはもちろん誰もいない。

首を傾げる医師と涙を流す少年の家族達の中で唯一少年だけが、悟ったように窓の外を見ていた。

その日の夜。

再度、少年の病室に少女が見舞いに来た。

もちろん既に病院の面会時間は終わっており、少女は忍び込んで来たのだった。

いつものように話し、いつものように笑う少年に少女は問う。

「先輩、怖くないんですの？」

少年は苦笑しながら、答える。

「怖いさ」

少年と少女は抱き合って泣き続けた。

翌日から、毎日少年と少女はデートに出かけることにした。

少女は学校をさぼり、少年は病院を抜け出し。

もちろん、それを何も知らない大人達はとがめる。

それでも少女と少年は毎日必ず外に出かける事にした。

少しでも、少しでも二人の時間を増やすために。

そして、終わりの日が来た。

長い様な短い様な1ヶ月はすぐに経ち、最後の方には少年は外に出る事どころか自力で立つことすらままならい程に弱っていた。

それでも少年は少女と一緒にいる。

しかし、期限の日、少女は少年の元には訪れなかった。

少年は訝しむ。

その頃には既に少女を認めていた家族達も同じ様に訝しんだが、少女は既に家を出た後だと少女の家族は電話で告げた。

そこに、医師がドナーが見つかった事を告げた。

医師が言うにはすぐ近くで大規模な交通事故があり、その被害者である少女がドナーとなるということらしい。

すぐに手術は行われ、少年の命は救われた。

少年の退院の日、少年の横には少女はいない。

医師に謝辞を述べた後、少年は荷物を家族に預けて病院の中を進んでいく。

少年は1つの病室に入ると、目を閉じている少女の前でドナーとなってくれた少女に感謝した。

ありがとう。

少年の涙が頬を伝い、落ちる。

そして、昼寝から目を覚ました少女が問う。
何を泣いているんですの？と。

少年は君とまた一緒にいられるからさ、といつものように笑うのだ。
った。

完

「くっあゝ。やっと終わったな」

「は、はいですの」

映画館から出て来た綾峰は伸びをしながら外に出た。

さて、次はどこ行くかねえ、と既に次の行き先を考えている綾峰とは対照的に、白井は顔が上気し茹で上がっていた。

映画の内容、と言うよりも出て来たヒロインがもろに白井自身にそっくりで本格的に感情移入してしまったのだ。

というか、ツインテールに茶髪、更には風紀委員と生徒会委員の違いはあれど、キャラ被り過ぎだろうというものだ。

てか途中から完全にヒロインが犠牲になったとばかり思っていたら、実はヒロインは交通事故にはあつたけどただの足の骨折で入院しましたオチって…と白井は若干ツッコミをいれつつも脳内をどうにかピンク色から戻していく。

いけないいけない、と白井は首を振る。

どうにも御坂や佐天達の言葉に綾峰を意識しすぎている気がする。

（黒子、落ち着きなさいですよ。私はお姉さま一筋、お姉さま一筋。」

「どうしたんだ？白井？」

「へっ？い、いえ、そ、そ。そその何でも無いですよ？」

思っていた事が声に出ていたのか、白井の突然の独り言に可哀想な物を見る様な目を向けて来る綾峰がいた。

綾峰の言葉にびくりと反応して慌てて誤摩化した白井は首を思いつきり振って反省する。

（と、とにかく落ち着くんですよ、白井黒子。そう、素数を数えて…1、3、5、7、9…ってこれは奇数ですよ！！」

またも大声を出している白井の横でビクウツと大きく反応した綾峰は情緒不安定な後輩に不安を抱きながらも近くの公園で休ませることにした。

「白井、散歩でも行くか、というか、是非行こう。ほら、公園でクレープでも奢るから。ほら行くぞー」

「え？でも私先ほどのポップコーンでお腹がふくれて…」

「良いから、行こう！」

「は、はあ」

綾峰の突然の言動に戸惑いながらも白井は綾峰に従って近くの公園へと歩いていった。

一方、綾峰達後に映画館から出て来たのは御坂と雲雀だった。

「面白かったね。おねーちゃん」

雲雀は映画が見れた事に大満足の様子だった。

「そうね」

そんな雲雀に対し、御坂は目を赤くしながら若干鼻声で答えた。どうやら本気で感動していたようだった。

「おねーちゃん、泣いてるの？」

首を傾げて言う雲雀に御坂は驚いて首を振った。

「そんなわけないでしょ。ちょっとゴミが入っただけよ」

「ふーん」

そうかー、と分かってるのかわかってないのか曖昧な返事をして雲雀はふと、綾峰がいることに気がついた。

「あ、おにーちゃんだ!」

「やばっ」

「おにーちゃんむがっ!?!」

綾峰に向かって手を振り出した雲雀を慌てて捕まえると、御坂は驚いている雲雀をそのまま茂みの方に連れて行った。

「むー。おねーちゃん。どうしたの?」

首を傾げる雲雀に御坂は指を口の前に持っていきしーっと静かにするよつに指示する。

「あ、御坂さん、おかえりなさい」

「映画どうでした?」

そこに初春と佐天が合流した。

「ういはるのおねーちゃん!」

「あ、雲雀ちゃんお久しぶりです」

初春を見た雲雀が笑みを浮かべて初春に抱きついた様子に御坂は軽く驚いた表情で言った。

「あれ？2人とも知り合いなの？」

「ええ、前に警備員アンチスキルに用事で行った際に会ったんです」

「そっちのおねーちゃんは？」

「人様を指差しちゃいけないですよ」

佐天を指差して尋ねる雲雀に初春が注意して、それを見ながら笑う佐天が自己紹介した。

「私は佐天涙子。初春の親友やってんの。よろしくね」

「私は雲雀、碓氷雲雀っていうの。よろしくね」

真似をする雲雀に佐天と雲雀は笑い合う。

どうやら仲良くできそうね、と考えていた御坂は、はっとした表情で本来の目的を思い出した。

「って、そつだ。綾峰さんは？」

「さつき公園に向かっていますよ」

「そつ言えば、おねーちゃん達っておにーちゃんの後を追ってるの？」

「ええ、まあ私はこの2人が暴走しないように見てるだけですけど」
初春は雲雀の質問に答えながらさり気なく責任を2人に押し付けてたりする。

「えっと、おねーちゃん達ってストーカーなの？」

雲雀が珍しい物を見る様な目で佐天と御坂を見る。

「ばっ、ストーカーじゃないっての。単に綾峰さんと黒子のデートが成功するように尾けてるだけよ」

雲雀の問いにあたふたと答える御坂。

だが、それをストーカーと世の人は言う。

「ふーん」

雲雀は分かったのかわかってないのか頷いた。
それを見た御坂は手を挙げて指示を出す。

「黒子達は公園に行ったのよね？追っわよ」

「「「おー！」「」」

何だかんだでノリの良いメンバーだった。

公園に向かう途中、綾峰はぼんやりと考えていた。

既に八月に入っているという事はもうまもなく原作の吸血殺し編が始まるということである。

綾峰にとって特にあの作品については思い入れはない、というよりしつかり覚えていない。

流石にこの世界に来る前の知識だということもあるし、かなり前後とのつながりが薄い巻でもあったので特に覚えていないのだ。

それでもこうやってこの世界にいる以上待ったは効かない。

綾峰自身ももとよりそんなことを言いつもりも無いがどことなく心許ないのも事実だった。

「メンドクセー」

ついついいつもの口癖が漏れる。

ふと、その瞬間、妙な感覚が綾峰の能力を刺激すると共に、地面が揺れ始めた。

「地震か？」

しかもかなり大きいようだ。

綾峰の後ろを歩いていた白井は突然の揺れにくらりと倒れそうになった。

「おっと」

それを慌てて綾峰が支えた。

綾峰は白井を抱きかかえながら周りをジッと見回す。

(地震にしては…)、と綾峰が感じているとゆっくりと地震は収まっていた。

「止まったか…」

「あ、あの…綾峰先輩」

「ん？」

ふと、綾峰が白井の声に反応すると白井は綾峰の腕の中で顔を赤くしていた。

「お、ああ悪い悪い」

綾峰が慌てて手を離すと、白井はしばらくぼうつとした後に、どうにか、

「ありがとうございますですの」

という蚊が鳴く様な小さな聞こえて来た。

ふと、話題をそらす様に白井は言葉をどうにか続けていく。

「そういえば、あの時のお礼をまだしっかりしてませんでしたわね」

「んあ？」

綾峰が先ほどの地震について考えているうちに白井が声をかけて来た。

「『レヘルアツパー幻想御手』事件で黒子が捕まった時のことですわ」

「ああ、あれね。そういや今日はそのお礼つてのが趣旨だったな」

白井の言葉に思い出したように言う綾峰に白井は笑顔を浮かべて言う。

「ありがとうございますの」

「気にすんなってたいした事はしちやいねえよ」

綾峰も照れくさくなったのか、乱暴に答える。

「それにしてもあの時はどうやって私を救ってくださったんですの？」

「へ？」

白井の言葉に綾峰は固まる。

「ですから、アンチスキル警備員ですら手こずっていた『幻想猛獣（AIMバー
スト）』からどうやって私を救ってくださったんですの？」

「あ、ああ、あれね？」

綾峰の背筋にイヤな汗がどつと湧き出て来た。

綾峰はあの瞬間の事を思い返した。
簡潔に言うならば、

急に覚醒しました（キリッ

「……………」

「……………」

「ごめん、自分でも何が言いたいのかわかんわ」

「はあ、結局言いたくないって事なら無理して聞いたりしませんの
に」

「あはは、メンドクセーけどそんな感じかな」

呆れてため息を吐く白井に綾峰は苦笑しながら視線をそらした。

「じゃあ1つだけ教えてほしいですの」

「？」

「一步だけさつきよりも近づいて顔を寄せて来た白井は覗き込みながら尋ねた。」

「綾峰先輩が私を助けてくれたんですのよね？」

「あ、ああ」

白井の行動に若干しどろもどろになっている綾峰はどうにかそれだけ返すと、白井は満足そうな表情になる。

「それだけ聞ければ良いですの。綾峰先輩、本当にありがとうございましたの
いますですの」

「どういたしまして」

照れくさそうに伝える綾峰の言葉に白井自身も照れくさくなり、綾峰を追い越すとそのまま公園に入っていく。

「遅かった方がクレープをおごるんですよ」

「へっ!？」

綾峰の言葉を聞かずに白井は走りだした。その顔にはいつもの笑みが浮かんでいた。

閑話休題

「だーかーらー、『テレポルト空間移動』は無理ゲーすぎんだろっが」

「他人の能力を封じる能力を持つてる人が良く言いますわよ」

ベンチで言い合う二人は片方は綾峰の買ったフルーツミックスとクレームのクレープを食べて、もう片方は自分で買ったお茶を飲んでいた。

結局、勝負は一度目以外は綾峰の能力で『空間移動』を封じたものの、1度開いた差は縮まず綾峰の負けとなった。

「つたく、さて次は買い物にでも行くかね」

「？ 何か欲しいものがあるんですの？」

突然提案をした綾峰に白井は首を傾げる。

「いや、そろそろとある人物の誕生日だね。買って来いってシスコン女がうるさいんだよ」

「女性…: ですか？」

「？」

綾峰の言葉に白井がむっとした表情になる。

「お前も知ってる子だぞ？」

「はい？ 誰ですか？ お姉さまではありませんし…:」

またも首を傾げる白井に綾峰は手で近くに寄るようにジェスチャーすると、近寄って来た白井に耳打ちした。

「ああ、なるほど」

綾峰の言葉に納得したのか白井は元の表情に戻る。

「っと、そっだちょっと待ってる」

「どっしたんですの？」

「ん？ああ、ちよいと悪戯してる猫にえさをやるうと思ってるね」

意地悪く笑う綾峰に白井はまたも首を傾げるのだった。

「猫…ですか？」

「それにしても、何かいい雰囲気ですなぁ」

公園の茂みの中から綾峰達2人を見ていた初春が感想を言った。

「うーん。なんかさつきより緊張が溶けたって感じかな」

「そうねえ。それにしても…」

「クレープおいしそう…」

初春の言葉に頷く佐天の横で御坂の言葉を遮って雲雀が言った。

雲雀の視線は完全に白井の持つクレープに向かっており、それを見た3人はあはは、と苦笑いを浮かべた。

「後でおごつてあげますから我慢しましょうね」

「はい」

初春の言葉に元気に返事をする雲雀を見て御坂と初春が微笑んでいると、

「ん。綾峰さんが動き出した」

佐天が綾峰の動きを報告した。

「あれ？」

「どうしました、佐天さん？」

「綾峰さんがまたクレープ屋に……」

「黒子のおかわりか、自分の分を買ってるんじゃない？」

「いえ、それにしても様子が……」

そこに、携帯の着信音が鳴り響いた。

「あ、あわあわあわわわ」

初春が自分のポケットを見て慌てだした。

どうやら初春の携帯にコールが掛かって来たらしい。

「初春、バレちゃうから」

「あ、はい。ごめんなさい。今切りますってあれ？」

初春がコールに出ようとすると画面には非通知の文字があった。

八月六日 式（後書き）

ぶつちやけ途中の映画の内容：いらなくねとか思ってたリw

あと、『電話相手』のあの性格は：やりすぎた気もするw

次回は6人で買い物ですw

ちなみに誰の誕生日かって言うのは：arcadiaを読んでる人にはわかってるかも。

そして、二人を襲った突然の揺れの正体は…

では、また。

ノシ

夜中に更新するもんじゃ無いですね。
いくつか修正しました。

出張！教えて！！小萌センサー！！

「月詠小萌とー！！」

「姫神秋沙のー」

「教えて！！小萌センサー！！」出張版」

「読者の皆さま、お久しぶりなのです。先生はタバコもお酒も大好きなのです、そんなお姉さんは嫌いですか？月詠小萌です！」

「新ヒロイン？え。ナニソレ怖い。姫神秋沙です。…小萌先生。お姉さんはない」

「失礼な！これでもとくに成人してるんですからね」

「人はそれを合法ロリと言う」

「なっ、ななっ！？」

「まあ。冗談は置いといて今回は何をやるの？」

「あれ？姫神ちゃん、聞いてなかったんですか？」

「言ってた？」

「だから、言ったじゃないですか。出張版ですよって」

「それはさっき聞いた」

「……………」

「……………」

「……………」

「まさかそれだけ？」

「出張版やるよって言われて連れてこられて、本番直前に『あ、ネタ考えてなかったわ。あっはっはっは』とか言われたんです」

「いや。それは開始30分前につっこむべきだと思います」

「とりあえず時間まで適当にだべるしか無いですね」

「正直『小説家になろう』の読者さん達にとってはただの迷惑行為だと思っけど」

「でも、それぐらいしか無いですよ」

「そっいえば。こちらではまだ八月八日が過ぎていない」

「ああ、そうでしたねえ。確か八月の初め辺りから順に改訂されるんだったっけ？」

「うん。その最たる例として今あがってるのは白井×綾峰のカップリングがまだ本編で出てないこと」

「何でもハーレム方向に進もうかと思ってるとの事らしいですねえ」

「arcadia版でも一時期ハーレムに進むフラグがあったらしいけど」

「結局白井さんルート確定して無かった事になりましたしね」

「とにかく話はそれたけど。このまま行けば私の本編登場もあり得る筈!」

「そうですね。arcadia版での待遇にはどれだけ枕を涙で濡らしたことが」

「あの時程私が原作での扱いを呪ったことはない」

「あ、そう言えば作者さんから手紙を預かってたんです。はい、姫神ちゃん」

「私宛?」

「ええ。姫神ちゃんに途中で渡してって頼まれたんですよ」

「ふむ。それじゃ読んでみる……………!??」

「どうしたんです? そんなこの世の終わりみたいな顔をして」

「作者、ぶっ血KILL!」

「ふえ!?? つてどこいくんですか!?? まだ本番中なのですよ!」

「つてああもう走ってっちゃいましたです。あれ? 姫神ちゃん手

紙置いてったみたいですねー。

ふむ、なにに？『このコーナーは本編登場が”ない”キャラクターのファンのためのコーナーとなっております』…なるほど。

っと、皆さんいったんこれでこのコーナーは終わりにさせて貰いますね〜。

姫神ちゃんが走ってっちゃいましたし〜。私も用事が出来ましたです〜。ウフフ。

それでは皆さんさよ〜なら〜」

「魔法のステッキをゆっくり味わって行ってね」

ぎゃあああああああああああああああ！！（ 作者の断末魔の悲鳴）

「次はすけすけ見る見る10連続ですよ〜」

すいませんでしぎゃあああああああああ！！（ 作者の断m）

出張！教えて！…小萌センサー！…（後書き）

オチが弱かった希ガス。

次回は本編更新です。

八月六日 参(前書き)

引き続き『狂乱逢引編』をよろしく!

八月六日 参

太陽が頂上から少し下りてきた昼過ぎ、緑が生い茂る公園の中央に仁王立ちをした白井がツインテールを逆立てていた。

「それで…何か言うことはありませんの？」

世にも恐ろしいと言うのはこの表情のことを言うのか、と綾峰は白井を見ながら他人事のように感心していた。

「いえ、その強いて言うならですね」

「強いて言うなら？」

白井の追求の口調は普段からは考えられない程に威圧感を持っている。

そこで綾峰はそんな白井の目を見ながら言っただけだった。

「何で俺が怒られてるんでせう？」

御坂達4人が美味しそうにクレープを食べてる横で正座をさせられた綾峰が白井に叱られていた。

(え、何これこわい)

とある科学の事件トリプルメーカー体質第27話

御坂達が綾峰の電話でいそいそと出て来た所をクレープ片手に叱つてやろうと思っていた矢先、白井が綾峰の肩を万力の如き力で掴みいくつか質問された。

Q・どうやってお姉さま達がいる事を知ったんですの？

A・俺の『能力解析（AIMリーダー）』の探知能力に死角は無いんだZE

Q・いつからお姉さま達がいるのを知ってたんですの？

A・初めからだZE

Q・何で初めから止めさせなかつたんですの？

A・オセロがこれを知って慌てふためく姿が見たかつたんだZE

Q・その喋り方ムカつきますの。

A・気に入ったんだZへぶるばっ！？

こんな感じ。

ついでに最後のは風紀委員ジャッジメント式武術で投げられた綾峰の悲鳴だったり

する。

閑話休題

「それで、お姉さま達？」

数分の間に綾峰への説教を終え、白井はのんびりとクレープを食べていた初春達の方を向いた。

それまでクレープを漫喫していた4人はびくつと体を震わせると、白井の向こう側にいる綾峰”だった物”を見る。

綾峰は煤けて白くなっていた。

「どうしたの、おねーちゃん？」

首を傾げている雲雀に白井は手招きをすると少しだけジト目になりながら雲雀を諭した。

「人を尾けるなんてしちゃいけないんですよ」

「ごめんなさい」

俯いて謝る雲雀に白井は自分の胸元あたりまである雲雀の頭を撫でると優しい笑みを浮かべる。

「良いですわよ。雲雀ちゃんは子供なんですし、悪い事って知らなかったんですわよね？」

「うん。ごめんなさい」

「もう怒ってないですよ」

白井の言葉に雲雀の顔がぱっと明るくなる。

「本当？」

「ええ、ほら綾峰さんの所でクレープを食べててくださいですの」

「うん！」

（あれ？白井さん、思ったより怒ってなくない？）

（そ、そうみたいです…）

（これなら私たちもしっかり謝れば怒られないで済むかもね）

背中を押して雲雀を綾峰の方に向かわせた白井の顔に浮かび笑顔に、御坂達3人は食べ終わったクレープの包み紙を片付けながら白井の背後に回り、背を向けてこそこそと囁き合う。
しかし、

「さて、お姉さま方」

白井の声が背後から聞こえて来た瞬間、3人の背筋が凍る。
どっと背中に冷や汗をかきながら3人が後ろを見ると、

「雲雀ちゃんと違って、覗き見なんて褒められる行為じゃないのはわかってますよね？」

「わー、すごくイイエガヲですね」

初春の口から諦め気味の声が漏れた。

「さて、そろそろ買い物にでも行きましょつか」

「う、うん」

十数分後、屍4つを背に白井が言った。

頷く雲雀が若干怯えている気もするが、仕方ないとしか言いようがないだろう。

「…それで、あてはあんのか？」

弱々しい声で尋ねる綾峰に白井は頷いて、ちらりと雲雀を見ると言
った。

「ええ、ショッピングモールに行きますわよ」

喜ぶ雲雀の背景で4人がおー、と今にも消えそつな声で呟いた。

「わかった。お前はもう逃げろ」

ワンボックスカーの後部座席に乗った女は携帯を切った。

長身の女は黒色のベストを羽織り、黒いタイトの様な服装で全身を覆っている。

ベストのポケットの1つに携帯を仕舞うと、女は一言呟いた。

「派遣隊がやられたようだ」

一言、それだけで車の中の空気が重くなる。

呟いた男の周りには女と同じ服装の男女が女自身を含めて5人いた。

「派遣隊がやられたって…この後の作戦はどうするんですか。隊長？」

メンバーの1人で十代程の女が先ほどまで通話していた女に尋ねる。

「何かあるうとも俺達がやるべきことに変わりはない」

隊長と呼ばれた女はそれを答えとして口を閉じた。

「まあサブ報酬は諦めるしかないね」

また別の少し背の高めの男が軽口を叩き、それを先ほど質問した女

が睨んだ。

「おい、仲間が死んでるんだぞ」

「仕方ないさ。あいつらが間抜けだったただけだろう？」

「お前っ！」

「やめろ」

背の高い男の言葉に女が胸を掴みかかるが、それを隊長が一言で止める。

「伊波、お前はすぐ熱くなるのが悪い癖だ」

「……………すみません」

相手の胸元から手を離し、伊波と呼ばれた女は頂垂れる。

「ふふん」

「佐藤、お前も仲間の事をあまり悪く言うな。俺たちは彼らの犠牲の上でここにいる」

「……………ふん」

頂垂れる女を見て鼻で嗤う男、佐藤に隊長は注意すると、手を叩いた。それだけで空気が変わる。

「ヤツの情報を集めて直接捕まえるのはもう不可能だ。ココからはもう1つの作戦に切り替える。作戦は理解できているか？」

問いかけに全員が頷くのを確認すると、隊長は懐のポケットから5枚の写真を取り出してそれを全員に配った。

「これがターゲットだ。確実に生け捕りにしろ」

写真には黒いショート髪の7歳程の少女が病院の簡易な患者服を着て映っていた。

「これがターゲットだ」

時を同じくして、ショッピングモールの中心にある広場の片隅のテーブルにてそんな言葉が出た。

テーブルを囲むのは4人。

それぞれ違う制服を着た少女が2人、私服のワンピースに身を包んだ少女が1人、そして彼女達の視線を一身に浴びている黒い学生服の少年が1人。

少年の手には携帯が握られており、その画面には黒いショート髪の7歳程の少女が笑顔で映っていた。

「というか、その写真は携帯の壁紙なんですか？」

少女の1人、制服に頭に白梅を模した花飾りをつけた少女が手を挙げた。

「佐天さん、ツッコむところはそこじゃないと思うんだけど…」

「いえ、お姉さま。それによって綾峰さんの評価がロリコンか、ただのシスコンかと大きく変わりますの」

佐天の横に座っている御坂のツッコミに白井が若干綾峰から席を遠ざけながら言った。

「おーい、オセロ。何か失礼なこと言ってるな。メントクセー。第一どっちも社会的な烙印があまり変わらないように思うんだが」

「というかターゲットってどういうことですか？」

佐天の問いに綾峰は携帯を仕舞いながら言った。

「言い方が悪かったか？明後日が雲雀の誕生日でな。プレゼントを買ってきてくれて頼まれてんだ」

「ああ、なるほど。それで初春に雲雀ちゃんを任せたんですね」

雲雀と初春は広場の近くのカフェで一休みしている。

どうやら公園からショッピングモールまでの道のりで雲雀は軽い熱射病になってしまったようだった。

そこで綾峰はちょうど良いと、初春に雲雀を任せて4人で広場の方に出て来たのだ。

「もしかして私たちにも買えってこと？」

綾峰の言葉に御坂が問う。

「いや、経費はこっちで持つから。ただ、女の子がどういつのを買えば喜ぶのかわからんからお前らに任せようっただけだ」

「具体的にはどうすれば良いんですの？」

「とりあえずそれぞれでこのショッピングモールの中で適当な店からプレゼントを選び、それを買って来てくれれば良い。プレゼントの経費は黄泉川から預かってるから、領収書さえくれればちゃんと金は返す」

白井の問いに綾峰が答える。

「なるほど。ちなみにプレゼントの上限はいくらぐらいなんですか？」

「1万円」

「1万円?!?!？」

佐天の驚愕の声が響いた。

普通の子供の誕生日プレゼントに使うにしては高すぎる額に驚いたのだ。

「佐天さん、どうしたの？」

「佐天さん、あまり騒ぐと回りに迷惑ですよ」

一方落ち着いた様子の御坂と白井に、

「このブルジョワめ」

佐天と綾峰の言葉が重なった。

「「？」」

首を傾げる2人に佐天と綾峰はため息を吐いた。

「えっと話を続けるぞ。とにかくそういうことで各自店を回って買って来て欲しい。頼めるか？」

「私はいいわよ」

「断る理由がありませんの」

「私も、良いですよ！」

「ありがとうな」

快く頷いてくれた3人に、綾峰は笑顔でお礼を言うと、席を立った。

「それじゃ今が2時くらいだし。集合はここに4時ってことで」

綾峰のその言葉で一時解散となった。

ふと、立ち上がった佐天は財布を見るとバツが悪そうに綾峰に言った。

「あ、でも私今日は手持ち少ないんです」

もともと白井と綾峰のデートを後ろから見ただけのつもりだったので特に用意はしていなかったのだ。

貧乏学生ということもあり、佐天の財布の中には緊急用の1000円札と小銭しか入っていなかった。

「なら佐天は俺と回ろう。佐天は選んでくれればいい」

「じゃあ、お姉さま。私達は2人で回りましょう!」

「ちよつ。黒子。ひっぱんなつての」

嬉々として白井は御坂の腕を取ると、強引にそのまま西側の方へと向かい始めた。

御坂も特に問題はないのか、腕を掴まれて引つ張られることに抵抗はしているが逆らうつもりは無いようだった。

そして2人はそのまま人ごみの中に消えていってしまった。

それを見送った佐天は渴いた笑いを口に浮かべていた。

「……あはは。相変わらずですね」

「まあな。さてと、貧乏人は貧乏人同士で買いに行きますか」

「ですね」

そう言つて2人は広場の東側に向かって行った。

「さてと、ここか」

ショッピングモールの駐車場に一台のキャンピングカーが止められていた。

そこから出て来たのは茶髪にホストとチンピラを混ぜた様な少年。そしてドレス姿の少女。

学園都市の暗部、『スクール』だった。

「それにしてもこんなに一般人が多いと面倒ね」

「騒ぎが起きる前につてのがベストだが。そうも上手く行くかねえ」

垣根帝督の不穏な言葉が駐車場に消えて行った。

八月六日 参（後書き）

誰だ、だいたい4話構成です、とか言ったの！？
これ次で絶対終わらないよ！？

え？俺が言った？

…あああ、まさか。

…俺ですね、すみませんorz

くっ。オリジナルの話って何でこんな長くなってしまっただろっ…。

それではまた次回！ ノシ

八月六日 四（前書き）

気がついてたら書いてたZ E

八月六日 四

「それにしてもやけに今日は人が多いな」

人ごみを避けるようにショッピングモールを進む綾峰が言う。

右手には雲雀の誕生日用に買ったプレゼントの入った紙袋を下げている。

思ったよりもあっさりの良いプレゼントが見つかったので集合時間まではかなり余裕があったが、とりあえずは雲雀の様子を見に広場に戻る事になったのだ。

「そうですね。何かイベントでもあるんですかね」

綾峰の後ろをついて来ている佐天も人ごみに閉口していた。

綾峰が荷物を持っているので佐天の両手には特に荷物は無い。

2人が先ほどの広場に近づくにつれて徐々に人ごみの密度が上がってきていた。

なかなか進めず若干いらついている綾峰がふと、広場の中心を見て指差した。

「もしかしたらあれじゃないか？」

綾峰の声に促されて佐天が広場の中心を見ようとすると、人垣が高くよく見えない。

「よく見えないです。なんて書いてあるんですか？」

「えーっと、あれなんて読むんだ？ーが3つ？」

とある科学の事件体質トシブルメーカー第28話

「――。――。知らないの？結構有名なアイドルだけど」

「知るかよ。そういうのに興味はねえ」

ドレス姿の少女の呆れた様な口調に垣根帝督はすっぱりと切り返す。2人は吹き抜けになっている広場の2階の部分から会場を眺めていた。

周りにはファンの女性達だろう、学生から40代くらいまでの女性達が所狭しと、少しでも会場を良く見ようと詰めていた。

どうやら今日のショッピングモールではそのアイドルによる新曲の発売記念で宣伝を兼ねて本人が来てファンとの握手だかライブを披

露するらしい。

「そんなもんより俺たちはまず仕事だろうが」

ちらりとドレス姿の少女は名残惜しそうに広場に設置された会場を見てから渋々頷いた。

「わかったわよ」

∴ せっかく生なまはじめーを見るチャンスなのに。

返事と共にそんな声が聞こえた気がしたが帝督はあえてそれを無視すると、人ごみから抜け出して帝督は別行動をしているメンバーに連絡を入れる。

「おい、そつちは見つかったか？」

『いえ、人が多すぎて。てか顔写真で探すにしても限界があります
つて……』

「わかってる。でも情報が少なえんだ。仕方ないだろ」

先ほど『電話相手』から送られて来た資料から犯人達の顔は既に割れているので下部組織を含めて搜索を行っているのだが、どうにもうまくいっていない。

悪態をつこうとする帝督の耳にメンバーの声が聞こえて来る。

『それにしてもやつらこんな所で何するつもりなんですかね』

そう、それが分からない。

一応後から得た情報でこのショッピングモールの駐車場の監視カメ

ラにテロリストの残党達が使っていたワンボックスカーが発見され
たらしいので来ては見たが。

「一人でも生け捕りにしときゃ良かったな。くそ」

帝督は空き工場で全員血の華を咲かせてしまった自分を殴りたくな
ってきた。

『まあ対象の抹殺が依頼内容でしたらから仕方ないですよ』

「…ちつ。わかってるのは、残党共の顔写真と『これ』だけか」

帝督は手元にある一枚の写真を取り出す。

そこには黒いシヨートの髪の毛の7歳程の少女が病院の簡易な患者服を
着て映っていた。

目は暗く沈んでおりまともな機関にいないことはわかる。

学園都市で恒常的に行われている置き去り（チャイルドエラー）の
実験施設にいた少女だろう。

ワンボックスカーに唯一残っていたものだった。

ワンボックスカーの中には食事をした跡や何か大きな機材のあった
様子があったが、それ以外には写真一枚しか残っていなかった。

「やつらの狙いに何かしら関係しているのか、それともやつらの関
係者なのか…ってとこなんだが」

「私的には狙いの方だと思うのけど」

帝督が写真を眺めていると、横にいたドレス姿の少女が言った。

「どっつしてそう思うっ？」

尋ねる帝督に少女は人を小馬鹿にした様な笑顔を浮かべると、考えを口にした。

「だってもし私がこの子を救いたいならこんな目の死んだ表情の写真は手元に持っていかないもの。お姫様を救うにしたって、こんな表情見てたら気分乗らないでしょう?」

「なるほど」

たしかにな、と素直に感心した帝督はメンバーに少女の搜索も視野に入れるように連絡をいれた。

「にしてもこの人ごみはうぜえな」

(翼でも展開してどかすか?)

帝督は人ごみいらつきながら一瞬だけ真剣に考えた後、下らないと吐き捨てた。

「メンドクセー」

佐天から――ひびく――はつさについての説明を受けた綾峰の言葉が漏れる。

「佐天はこつというの好きなの?」

「もちろんですよ！」

綾峰の問いに応える佐天の目はきらきらと輝いていた。

「あ、そう。てか―――ねえ。どっかで聞いたなあどこだったっけ？」

「とにかくせつかくなんだから行きましょうよ！どうせ四時までまだまだ時間ありますし！」

既に戦闘（押しのをける）準備万端という調子でドス黒い笑顔を浮かべている佐天に綾峰は呆れながらも制止の声をかけると、

「先に初春と雲雀を回収してからな」

「あゝ。私の一様が」

綾峰は佐天の制服の背中部分を掴みながら初春達のいるカフェの方に向かって行った。

（てかこれだけ混んでると御坂達との集合場所も変えた方がいいかもな）

とりあえず後でメールしておくことにした綾峰だった。

「なるほど、通りで。ありがとうございます」

服屋の店員と試着室の前で話していた御坂は納得した表情で店員にお礼を言っていた。

「どうされましたの、お姉さま？」

試着室のカーテンの隙間から首だけ出した白井が御坂に声をかける。

「今日のショッピングモールって人が多いのなんでだろうと思った
らさっきの広場でアイドルのイベントあるんだってさ」

「ああ、そう言えば人ごみがすごかったのはそれですね」

「てかいい加減プレゼント買い終わったんだから戻らない？初春さんにも悪いし」

時計を見るともうすぐで3時くらいになる。約束は4時だったが、流石に2時間も初春と雲雀に残らせておくのは申し訳ないと御坂は思っていた。

「これなんてどうですか、お姉さま！」

しかしそんな御坂の思いとは裏腹に白井はノリノリで、

「ってあなた…それ…／／／」

下着を御坂に披露していた。

御坂が若干引き気味なのも仕方ない。

白井の着ているかなり危ない下着だった。

ぶっちゃけ胸の辺りとか下とかが丸見えと言うか、もうそれ下着じやなくてただの布だろとしか言いようがない物体を纏った変態に御坂は慌ててカーテンを閉じる。

「とにかくあんたはさっさと制服に戻りなさいっての！せっかく持って来てあげたんだから」

念のために白井の制服を御坂が持って来たのだが、それを着る前に試着したいと白井が言ったので付き合っていたのだ。

「ああん、もうお姉さまったらシャイなんですから」

「……………（たまに本気で焼いちゃおうかしらっと思っただけど）」
流星にレベル5の御坂が本気を出したら変態（白井）のまる焼きが出来てしまう。」

（上手に焼けました〜）

想像の中で10回程白井を黒焦げにした御坂は、

突然の轟音にびくつと体を震わせて周りを見た。

「え？私やつちやつた？」

しかし周りには丸焦げどころか焼けている所も無かった。

「お姉さま！ご無事ですの！？」

「え、うん。何があったの？」

慌てて試着室から制服を着て出て来た白井に若干ビビりながら御坂は問い返す。

「外ですの」

白井の言葉に御坂が店の外、ショッピングモールの通りの方を見ると御坂と同じ様に外の客達が皆同じ方向を向いて驚いていた。

「行くわよ、黒子」

「ちよつ。お姉さま」

客達の見ている方向にある物を思い出して御坂は走り出した。

白井も慌てて御坂を追う。

客達の見ている方向には先ほど御坂達が集まっていた広場が、アイドル^{アイドル}ー^{はい}ー^{めい}がいる会場が、つまり雲雀と初春のいる広場があった。

御坂達が轟音を聞く数分前。

「おーっす。雲雀少しは調子良くなったか？」

「うん！」

雲雀と初春の回収に来た綾峰と佐天がカフェに入った。

冷房が効いた店内では、すっかり調子を取り戻した様子でジュースを飲んでいる雲雀と、店員に運ばれて来た巨大パフェに挑みかかるうとしていた初春がいた。

「……それ一人で食べるのか？」

「え？ダメですか！？」

綾峰の呆れた様子に初春はパフェの上のクリームを掬おうとしていたスプーンを握っている手を止めた。

「初春、あんたさっきクレープ食べたじゃん」

「そ、それとこれは…その別口というか。別件と言いますか」

わたふたと言いつくをする初春に綾峰は一言だけぼそりと呟いた。

「太るぞ」

「なっ！？」

花も恥じらう女子中学生にはあんまりな言葉に初春の手が完全に止まる。

「てかそうそう！初春！外でひとついはじめの握手会とライブやるんだって！雲雀ちゃんも綾峰さんに任せて行こう！」

「え？いやだつて私まだパフェ頼んだばかりで」

パフェと佐天を交互に見ながら初春は呟く。

「俺が見てやるよ」

綾峰が雲雀の横に座りながら言った。

「え、えつとでも……」

それでもどうにか残ろうとする初春だった。

ぶっちゃけると彼女的にはひつこくはじめ——なんてどうでも良いのだが、大の大親友がその熱烈なファンであるがため断るわけにはいかない。

「初春、ほら、始まつちゃうー！」

「見ててやつから言つて来いって。まあ見てるだけだけ」

「いつてらっしゃ〜い…じゅるり」

パフェ（ひつじ）を明らかに狙っている雲雀オオカミに、まったく守るつもりもない綾峰（羊飼）い）。
パフェの行く末は目に見えていた。

「あ、あわわ、あわわわわわ」

おろおろとする初春。

この状況の打開策を考えるが慌てる初春の脳では何も思いつかなかった。

そして頭がパンクする直前。

「すみません！」

第三者の声が掛かった。

「へ？」

会場の客席最前列、そこにジャージ姿の女性とスーツ姿の女性が並んでいた。

2人とも妙齢の女性で他の女性達と同様に浮き足立った様子で主役の登場を待っていた。

「まだ一まっは来ないじゃん？」

「そっね」

「って、私こんな服装で大丈夫か？」

「落ち着きなさいよ。つたく。てかあんたがこういうの好きだったなんてね」

黄泉川と尾小平の2人だった。

事件を解決した2人は夕飯の買い物でこのショッピングモールに寄っていたのだ。

本来の黄泉川の予定では映画の後、雲雀と2人で見に来る予定だったのだが事件のせいで御坂達に雲雀を預けてしまったため、ちょうど一緒にいた尾小平を黄泉川が誘ったのだった。

「でもそういうアンタもなんだかんだで見に来てるじゃん」

「そ、それはせっかくのチケットがもつたいないからで第一、あんたはアンタの妹をどこに連れてこようとしてんのよ」

「はいはい…ん？雲雀」

「そう、その雲雀ちゃん。あんな小さい子をこんな最前列に連れて来たら驚いて泣いちゃう」「おねーちゃん！」「ひゃん！」

黄泉川の方を向いて喋っているとき背後から声がして尾小平は驚いて小さく悲鳴を上げてしまった。

後ろを見ると、雲雀がちょこんと2人の後ろに立っていた。雲雀の後ろには尾小平の知らない学生が2人付き添っていた。

「おお、雲雀！てか唯鷹か。どうしたのさ。こんな所で」

「いや、それはこつちがツツコミたいんだけど…」

「ん？そりゃ——ふんふん——はっを見に来たに決まってるじゃん」

「…ああ、そういやこの前録画頼まれたアレのやつか…。どうりで聞き覚えがあると思っただわ」

「んで、何でこんな所に？てかよくこんな最前列のチケットが手に入ったじゃん」

ちなみにこの客席はチケット制で、限定100人だけに当たるプレミアムグッズの副賞だったりする。

実は当たらなかったファンのためにも会場にはカメラが設置されており、全国放送で流されているらしい。

「いや、何かチケットを譲るって人がいて。それで貰ったんだ。2人分だけ」

先ほど店の中で突然声をかけられて金髪の女性に貰ったのだった。

「へー。それですか。でも席ってどれじゃんよ」

「あ、お客様はこちらでございます」

そこに係員の1人が声を掛けて来た。

若干背の高いその男は端っこの2つのパイプ椅子を示すと座る様に促した。

「えへへ。それじゃ行って来るね。おねーちゃん」

「それじゃ綾峰さん、初春おねがいしますね」

雲雀と佐天が促された席に向かって行くのを綾峰は見送った。

「あいよ。それじゃな」

「ん？アンタは見ないじゃん？」

「興味ないの。背の低いあの2人だけだと迷うだろうから、俺はついて来ただけだし。てか荷物見がてら他のヤツら待ってなきやいかんし。んじゃ、また後で」

そう言つて綾峰は観客席を後にした。

「それにしてもさ」

「ん？何よ」

綾峰が行つた後、黄泉川が尾小平を見ながら言った。

「驚いたのはアンタだったじゃん」

「ツッコむのが遅いわよ」

そして、会場に―――が現れた瞬間、それは起こつた。
はじめに発砲音。

直後、広場に繋がっている2階部分の床が轟音と共に抜け落ちた。

少し遅れたタイミングで悲鳴を上げる観客達の前で一一一が観客席にいたスタッフの1人に銃を突きつけられる。

「動くな!!!」

一一一のマイクを通して会場全体に声が広がった。

3時00分、第七学区ショッピングモールにてテロリストにより1階広場会場部分が占拠された。

八月六日 四（後書き）

…おかしい。もうこの時点でこの話終わってる予定だったのに。

長くなってますね、すいません。

楽しんでいただけたら幸いです。

では、また次回！ ノシ

八月六日 伍

「動きやがったか…」

「どうすんの？完全に後手に回ってるわよ」

「わかってるよ…そうだな、ヤツら何やら面白いことするみたいだし、ちよいと情報収集といきますか」

「…はあ」

「なんだよ」

「別に」

綾峰がカフェに戻るとコの字型の座席に座ってパフェに今にも食らいつこうとしている初春がいた。

「ん？まだ食べてなかったのか、それ」

「あ、おかえりなさいです。綾峰先輩」

綾峰が声をかけると、パフェの頂上に乗っているアイスにスプーンを伸ばしていた手を止めて初春が溜め息を吐いた。

「いえ私も早く食べたかったです、さっきからいざ食べようとするると邪魔が入って…」

「あ、ああ。そうか。ゆっくり食え」

若干じと目で見てくる初春の表情が少しばかり荒んで見えた綾峰は苦笑いを浮かべて初春の正面の席に着く。

確かによくよく見るとパフェの頂上部にある2種類のアイスが溶けて色が混ざっているのがよくわかった。

それにしても綾峰達が出てから数分は経っているはずなのに何故一口も食べられていないのだろうと眺めていると、

「いたっ」

初春の額に何かが飛んできた。

「~~~~~」

啞然として綾峰が額を抑えて唸っている初春を見ると、

「せいじー」

と後ろから幼い声が聞こえて来た。

声の方を見ると、綾峰の背もたれを挟んだもう一つのファミリー用の席に5歳ほどの子供がいて、輪ゴムを手に持ちながらはしゃいでいた。

周りには荷物はあるものの、子供を見るべき筈の親の姿はない。

「なあ、初春。もしかして…」

綾峰が呆れた口調で声をかけると、初春は額を相変わらず抑えながらも綾峰の問いに応える。

「ええ、さつきからあの子が悪戯ばかりしてきて…。あの子のお母さん、^{ひんがし}——の会場に行っちゃってるらしいんです」

「なるほど…」

綾峰が無責任な親に呆れていると、後頭部に激痛が走った。

「ふおおおおおお」

「きゃはははははは」

今度は綾峰が標的になったようだった。

ぎろりと綾峰が睨みつけると、子供は笑つのをやめた。

「ん？」

「ひ、ひっく」

見る見る内に目尻に涙をタメ始めて…。

「びえええええええええええええええええん」

「げっ」

泣き出す子供に慌てふためいて綾峰が周りを見ると、周囲の客達から白い目で綾峰が見られていた。

「あー、綾峰先輩。泣かしたらダメじゃないですかあ」

「ええ？」

仕方ないですねえ、とか言いながら初春は立ち上がると、名残惜しそうにパフェを見た後、溜め息をついて泣いている子供の方に向かった。

「後でちゃんと別のを奢ってくださいね」

「あ、はい……ってあれ？これ俺が悪い流れ？」

ちやつかりとパフェを要求された綾峰は頷くと、何やら妙な流れになったなあと言いながら溜め息を吐いた。

そして客達からの視線から逃れる様に縮こまると御坂達に連絡をす

るために携帯のメール画面を開いた。

瞬間、轟音が上から響いて来た。

「はっ？」

驚いて上を見る客達は天井がひび割れて行くのを見て悲鳴をあげていく。

綾峰も一瞬驚いて動きが止まるが、ヒビが広がるのを見てすぐに何が起きたか理解すると迅速に行動した。

「皆さんっ。ジャッジメント風紀委員ですッ！危険ですからテーブルの下に潜ってください！急いで。初春、お前もだ」

「お、落ち着いて」

「びえええええええええええええええええええええええん」

客達に続いて初春にも指示を出すのが、泣いている子供に手こずっている。

「初春！！」

すぐにソファの上に立ち上がった綾峰は背もたれを越えると、テーブルの上から座っている子供を引きずり上げるとすぐにテーブルの下に子供を押し込んだ。

「急げ！初春！」

初春も子供を追って子供のいたテーブルの下に潜り込む。

綾峰は店内に逃げ遅れている人がいないか確認をしようと周りを見渡した。

その直後、2階部分が崩れた衝撃の余波でカフェの天井が崩れて落ちて来た。

会場は戦々恐々とした地獄絵図のような状況になっていた。

観客達は悲鳴を上げてその場にしゃがみ込み、会場の警備の人間達は慌てて――^{ひとついで}の救助を試みるが、――^{ひとついで}はいつの間にかライダーヘルメットを被った襲撃犯によって組み伏せられてこめかみに銃口を向けられて動けない。中には腰を抜かしている観客達によって近づくことすらできないでいる者いた。

2階部分から落ちた人達は軽傷の者は逃げようとして、重傷の者はその場で動けないでいた。

「我々の言葉に従ってもらえれば諸君らに怪我を負わせはしない。黙って従ってもらえるかな？」

言葉と共に現れたのは、黒タイツにベスト、そして頭にライダーヘルメットを被った人物だった。

体のラインによって女性とわかるその人物は片手に銃を構えながら観客達に指示を出す。

「その2人。それ以外はここから出て行ってもらおう」

黒タイトスの女性が示したのは、雲雀と佐天だった。

何人かが講義の声をあげようとするが、銃声によって押し黙る。

「さて、急いでもらおうか。私はあまり気の長い方ではないのでね」

暗い笑みを浮かべて銃口を向ける女性に逆らえる者は誰もいなかった。

「う、うう」

初春が目を覚ますと、とても狭い空間にいることがわかった。

辺りは暗く、初春は一瞬だけ自分の状況に混乱したが、すぐに自分が天井が崩落した時に子供と一緒にテーブルの下に放り込まれて気絶していたことに気がついた。

「お姉ちゃん、大丈夫？」

初春の横には一緒に放り込まれた子供が心配そうに初春を見つめていた。

初春が見る限りでは子供に怪我は無いようだった。

「ええ、大丈夫ですよ」

子供に心配を掛けるまいと初春は子供を安心させるために笑みを浮かべて頭を撫でてあげた。

初春の笑顔に安心したのか、子供が抱きついてくる。それに苦笑しながら初春は改めて回りの状況を見る。

どうやらテーブルとソファに囲まれた空間のおかげで天井の崩落による瓦礫が直接2人に降っては来なかったようだった。

その代わり、テーブルの周りには瓦礫が積み重なっており、2人は生き埋めのような状態になっていた。

(これはやっかいですねえ。でも)

初春は粉塵にまみれながらも横で泣く子供のために、

(私がしっかりしなきゃいけないですね)

不安を隠しながら笑みを浮かべ続けた。

閑話休題

子供が落ち着いた頃を見計らって、初春は周りの瓦礫に隙間が無い
か探し始めた。

救援を待つのも手だが、1つ気になった事があった。

「綾峰先輩ってあの後どうしたんですかね」

そう、ぎりぎりまで2人をテーブルに押し込めるために外に立っていた筈である綾峰がいないのだ。

幾らか声をかけてみるが、返って来るのは他の客達の不安な声。

その中に綾峰らしい声は1つも無かった。

そこで初春は綾峰を探すために瓦礫の隙間を覗き見たりしているのだが、通れる隙間すら見つからず、なかなか探索は困難を極めていた。

「お姉ちゃん、こっちに誰がいるよ!」

ふと、初春の隣で隙間を覗いていた子供が声をかけて来た。

携帯の明かりを頼りに子供の言う隙間の中をのぞく。

そこには、

「綾峰先輩!？」

瓦礫によって空洞になっている中に綾峰が倒れているのが見えた。

ちょうど初春達からは足が下になっているのでよく見えないが、学生服は綾峰の物だった。

「綾峰先輩!綾峰先輩!」

初春が声を掛けるが、綾峰に反応する素振りはない。

「どっしまししょう…どっしまししょう…」

初春が慌てるように呟く。

周りを見てもいつもは心強い佐天も白井もここにはいない。

いるのは、蒼白な表情を浮かべている子供だけだった。

「お兄ちゃん死んじゃうの？」

「ッ！？」

自分を庇ったせいで綾峰が死んでしまっ、そう考えてしまっているのか。

初春は子供の頭を抱き寄せた。

「大丈夫ですよ。綾峰先輩は強いですから。大丈夫、ね」

「う、？ん」

泣き声になりながらも頷く子供に初春は意を決した表情でテーブルの裏を見つめる。

（私が落ち着いてなきゃダメですよね…この子のためにも、綾峰先輩のためにも自分が今出来る事をやらないと）

ふと、手に持つ携帯を見る。

（この状況、明らかにただの事故のようには思えませんし…。もしかしたら何か情報があるかもしれませんね）

泣きながら抱きつく子供を撫でながら無言で『ゴールキーパー守護神』が携帯を片手に動き出した。

女性の指示によって観客と警備の人間が広場の外側に移動した後、観客席の最前列では腰を抜かしている佐天と雲雀、それを守るように付き添う黄泉川と尾小平が残っていた。

「まあ、こんなもので良いか」

女性は広場の外に移動した観客達を見据えると、ベストの襟に口を近づけて小声で指示を出した。

直後、広場を囲むように防火シャッターが下りて来た。

数分もしないうちにシャッターは閉まると、完全に広場と外の空間を遮断した。

シャッターが完全に下りたのを確認すると、女性はヘルメットを外した。

「そこの子を渡してもらえるか？」

4人の目の前には黒タイツにベストを羽織った黒髪の女性が銃口を向けて立っていた。

「あ、あなたはさ、さっきの…」

佐天がその女性を見て、先ほどのチケットを渡してくれた女性であることに気がつく。

女性は肩まで下がる黒髪の影から笑みを漏らしながら言った。

「やあ、また会ったわね。すまないね。こんな事に巻込んでしまっ
て」

まるで日常会話を楽しむ様に柔らかな笑みを浮かべる女性に佐天は本
当にこの女性がこの事件を起こした者達の仲間なのか一瞬だけ分か
らなくなった。

しかし次の瞬間に、

「その女の子渡してもらえるか？」

僅かに見開いた目から漏れる威圧感に背筋を凍らせた。

「渡せないに決まってるじゃん……」

黄泉川は庇う様に佐天の前に立つと答えを返す。

「ああ、そつ」

濁いた音がした。

悲鳴が広場の外から響く。

「それは残念だ」

「がっああああああー！」

黒髪の女性の持つ銃から放たれた銃弾が黄泉川の足を打ち抜いたの
だった。

「そつちの貴女はもう少し利口だと良いが」

尾小平に向かって笑いかけると銃口を向け直す。

「……人質なら——ひとづい——はこめがいる。彼だけで十分でしょ？」

「時間稼ぎのつもりか？」

「なんなら私が代わりに」「いいえ、その雲雀ちゃんでないためだ」「！？」

女性の言葉に尾小平は驚いて言葉をつぐんだ。

「なぜこの子の名前を」「これ以上おねーちゃん達をいじめないで！雲雀ちゃん！？」

尾小平の言葉を遮って雲雀が一步前に出た。

「わたしが行けば良いんでしょ？」

そう言ってもう一步前に出る。

「だから、これ以上おねーちゃん達をいじめないで」

そして、雲雀は銃口を向ける女性から黄泉川達を守るようにの両者の間に立った。

「ひばり…痛っ」

「大丈夫だよ、おねーちゃん。今度はわたしが守るからね」

雲雀が今にも泣き出しそうな顔で無理矢理笑顔を作りながら言った。

「利口だな。俺は君みたいな子は大好きだよ。こちらに来るんだ」

女性は銃口を油断無く3人の方に向けながら雲雀を側に引き寄せると雲雀の口元に手ぬぐいを当てた。

その瞬間を狙って尾小平が動こうとした瞬間、足下が弾けた。

尾小平が慌てて周りを見るが、もう1人の犯人は壇上で銃口を一一ひつじに向けている。

狙撃をどこからかしている3人目いることに気がついた尾小平はその場で止まって目の前の女性を睨むことしかできなかった。

「よいしょっと」

雲雀を担ぐと女性は壇上上がった。

雲雀はぐったりとしていて、どうやら薬品で眠らされているようだった。

「これで準備はできたな」

「そのカメラが動いているはずだ」

一一ひつじに銃口を向けている男性が女性にカメラの1つを促した。

「わかった」

女性はカメラマンの逃げ出して既に無人のカメラの前に立つと胸元にセットしておいたマイクを通して口を開いた。

「あーあー、マイクテスト。マイクテスト。………さて、学園都市の諸君。見えているかな？」

携帯を使い、情報を集めていた初春はテレビ中継に映った画面を見て手を口に当てた。

「これってもしかして…」

その表情は驚愕に満ちている。

子供は何かを感じたのか心配そうに初春を見上げながら尋ねた。

「お姉ちゃん。大丈夫？」

「え、ええ…でもこれって」

曖昧に言葉を返す初春は携帯の画面を見続けている。
そこに光と共に、

「大丈夫ですよ!？」

聞き慣れた誰かの声が聞こえて来た。

初春が振り向くと、テーブルの外に白井がいた。

後ろには御坂が大人程の大きさのある瓦礫を持ち上げている。

どうやら瓦礫の中の鉄骨を『磁力』を使って持ち上げているらしい。

「白井さん！大丈夫です！」

と笑顔で返す初春に白井は曖昧な笑みを浮かべると、

「そ、そうですね。お楽しみをお邪魔して悪かったですの」

「へ？」

白井のよくわからない言葉、されど決定的にまずい何かを感じて初春は自分の状況を改めて見る。

制服の胸部分はめくれ上がって白い下着が見えていて、スカートは同じくめくれ上がって同じく丸見え。

そんな状況で小さいとは言え、男の子と抱き合っている（ように見える。正確には男の子が抱きついているだけだが）。

「~~~~~!!」

慌てて男の子をひっぺがして制服を整えると、真っ赤になりながら白井の顔を見る。

ものすごい自然に目を反らされた。

「あ、あの！白井さん？違いますからね！私そついつのじゃないですよ！？」

「し、信じてますのよ、初春…」

「何ですか、その微妙な返事は！？御坂さんからも何かお願いします！」

「…応援してるわ」

「違つって言ってるんですけど！？」

完全に真っ赤になって慌てふためく初春に2人はぶふつと吹き出すと、笑いながら言った。

「わかってますわよ、初春」

「冗談だつて」

「もつっ！つてそつだ！御坂さん、その瓦礫どかしてください！」

「ん？これ？」

御坂が初春に指示された瓦礫をどかすと、倒れている綾峰が現れた。

「綾峰さん！」

「なっなんでここに」

「綾峰先輩、私とこの子を守るために……」

子供と一緒に頂垂れる初春に、白井は綾峰の容態を確認していく。

「軽く頭を打っただけみたいですわ。気絶してるだけですの」

白井の言葉に御坂と初春の口から安堵の溜め息が漏れた。

「あ、そつだ。白井さん。これなんですが」

「まだ何かあるんですの！？」

初春が2人に携帯の画面を見せると、

「雲雀ちゃん!？」

そこには、女性と一緒に映る雲雀の姿があった。

八月六日 伍（後書き）

あまりにも長くなってしまったので次の話と分割しました。
実際には次の話とセットで一話にするつもりだったんですが…。
気がついたら1万字を越えてたっていう…。

とりあえずオリジナルは書くところまで書いてみます。
長くなつてすいませんorz

八月六日 陸

トンネルを抜けると、花畑だった。

「あれ？」

気がつくとも花畑の中心にいた綾峰は不思議そうに呟いた。
周りを見渡すと見た事のある花畑。

四季折々の花々が「季節？そんなの関係ネエエエエエエ！」と
でも主張するかのようには咲き乱れている。
覚えある場所に綾峰は溜め息を吐く。

「また、ここかあ」

そして立ち上がるとすぐに身構える。

かの地はあらゆる紳士ロリコンの集う集会場にして、真性なる聖地。

その名もアヴァロン（遙か幼き理想郷）。

綾峰の敵はどこにいるかわからない。

背後、あるいは川の向こう側。

どこが正しい場所なのか、どこが常識の場所なのか。

綾峰は今度こそ抜け出すために最大限に神経を尖らせる。

かつては味方であった上条でさえ、既に敵の手中。

既に綾峰に味方はいなかった。

「どこから来やがる…」

緊張に唾を飲みながらも警戒を怠らない綾峰だったが、

「おや、少年。こんな所で何をやっているのですか？」

「!!……………何？」

突如掛けられた声に慌てて振り返る綾峰。

そこにはかつて戦った剣士が立っていた。

その人物は長い髪をポニーテールでまとめ、相変わらずの左右非対称の服装に腰に差した長い刀が目立っていた。

「なんで、お前がここにいるんだよ。神裂……」

そこにはねーちん、こと神裂火織かんさきかおりが立っていた。

「そちらこそなぜここに？」

神裂にとっても意外だったのか、神裂は驚いた表情で尋ねて来た。若干だが警戒しているようにも感じられるその表情に綾峰は恐る恐る応える。

「いや、気がついたらここに……」

「……………なるほど。ではあなたも……だったんですね？」

安堵したかのように言う神裂に綾峰は神裂もここに迷ったのだと思い、頷いた。

「ん？神裂もか？」

「ええ、そうです。では、あなたもこちらに来てください。仲間がそちらで待っています」

「仲間？」

「はい。さあ。こちらへ」

そう言うと、神裂は綾峰を先導するようにすたすたと歩いて行ってしまった。

(ここは……ロリコンの根城じゃないのか？でも神裂がそういう趣味があるとは思えないし……とりあえず従うか)

状況が見えない綾峰はそれに従うしかなく、神裂の後ろを歩いて行った。

しばらく歩いて行くと、

「あ、綾峰ちゃん。どうしたんですか!？」

いくらか大きな木の影で白いテーブルを囲んで数人の女性達が座っていた。

その内の1人、月詠小萌つくよみこもえが驚いた表情で綾峰を見て手を口の前に当てて驚いていた。

「先生こそ、こんなところで何を？」

同じ様に驚く綾峰が尋ねると、小萌先生はもじもじと顔を赤らめながら俯いた。

「え、えつとその……」

「？」

「小萌、彼は我々の同士ですよ」

いつの間にか綾峰の背後に移動していた神裂が小萌先生を落ち着かせる様な口調で言った。

「ん？ 同士？」

妙な単語に綾峰は嫌な汗が背筋を流れる。

「ほ、本当ですか！？」

神裂の言葉に小萌先生を始めそのばの女性達の目がキラリと輝いた。そして女性達は綾峰を見ながら頬を赤らめながら口々に囁きあう。

(その、良いのでしょうか)

(アリだと私は思うけど)

(少年と…………… k t k r)

「あー、小萌先生。質問しても良いですか？」

「何ですかー？ 人生の先輩がどんどん教えて差し上げますですよ」

「ここは何の集団なんですか？」

嫌な予感が止まらずついには悪寒すらして来た綾峰だったが、勇気を振り絞り尋ねてみた。

「ああ、ここは

シヨタコンの集いですよ」

「帰らせて頂きます」

瞬間、逃げるため即座にその場を離れようとする綾峰の肩を誰かが掴んだ。

「どこへ行くんですか？少年」

そこには恐ろしい笑顔を浮かべた聖人がいた。
綾峰の肩を掴む力は正に聖人の力そのもの。
万力の如く絞められた肩に、色んな意味で綾峰は目に涙を浮かべていく。

「俺、そういう趣味ないから！誤解だから！」

慌てて逃げ出そうと暴れるが聖人の本気に敵うわけもなく。
完全に動きを封じられる。

「…ふふふ、少年がそういう趣味がないなら別に構いませんよ」

「へ？いいの？」

どこのロリコン達みたいに自分もシヨタコンに染められると恐れ
ていた綾峰は神裂の予想外の言葉に動きを止めた。

止めてしまった。

「私たちは別に少年くらいも守備範囲ですから」

今度こそ、綾峰の目の前が絶望色で真っ暗になった。

とある科学の事件体質第30話
トリプルメーカー

「『デュアルスキル多重能力者』 見ているか？この子の命、助けたければすぐに第七学区にある総合ショッピングモールの広場まで来る事だ…」

テロリストの隊長である女性は淡々とした言葉を吐き終わると、再度同じ言葉を続けようとす。

「こんな事をして、何が目的かと思ったら都市伝説を本気で信じてるの？」

そこに声がかかる。

隊長が視線を向けると、黄泉川の足に止血などの応急処置を施した尾小平がこちらを睨んでいた。

「都市伝説、か」

そんな尾小平を見て隊長は一笑に伏した。

「そうだ。学園都市の研究機関がもう何年も前に結論を出している。不可能だつてな」

「なら、その結果はどうやって出されたか知っているか？」

「？ それは…」

「もちろん、能力の研究をする方法なんてたった1つしかない。人体実験だよ」

「……………」

「知らなかったわけじゃなさそうだな」

「そういう黒い噂がこの学園都市にあることは知っている。だが、それが全てというわけじゃ…」

再度濁いた音が響いた。

「きゃあああああああ！」

銃声に驚いた佐天の悲鳴が上がる。

「ここではそれが全てなのさ」

「ぐっ…」

隊長の銃から放たれた銃弾が尾小平の足を擦ったのだ。
足を抑えて跪く尾小平に隊長は壇上から呟いた。
光の無い目に込められた何かが尾小平の言葉を詰まらせる。

「おい、隊長。あまり無駄使いをするな」

「わかってる。さてと、休憩は終わりだ」

再度、壇上のカメラで『多重能力者^{デュアルスキル}』に向けて言葉を発そうとした
矢先、2階部分から白い何かが舞い降りた。

「…思ったよりも遅かったな」

「はろっ。ぶっ殺しに来たぜ、テロリストども」

広場にいた全員の視線の先には背中から1対の白翼を広げた垣根帝^{かきねてい}
督^{とく}がいた。

女性の姿が画面から消えて、ニュースキャスター達の画面に移り変わった。

携帯の画面ではニュースキャスター達がこの事件について、そして『デュアルスキル多重能力者』について話し合っていた。

初春の携帯の画面から顔を離して御坂は声を上げた。

「あいつら、『デュアルスキル多重能力者』を呼び寄せるためだけにこんなことをしたの!？」

「そうみたいですわね」

御坂の悲鳴のような声に白井が淡々と応える。

「そうみたいですわね、って白井さん。そんな暢気な!」

「慌てたって仕方ないでしょうに。冷静になりなさいですよ、初春」

白井は僅かに初春から視線をずらしながら初春を諭す。

初春は視線の先、自身のすぐ横を見て少年がいることに気がついた。不安そうに初春の制服の裾を掴む少年の震える手を見て初春は自分を落ち着かせるために深呼吸をした。

「それにしても『デュアルスキル多重能力者』だなんて…」

御坂は綾峰を見ながら呟いた。

そんな御坂を置いて、ジャッジメント風紀委員である2人は自分たちの出来る事を

探るために相談を始めた。

「まずは、現状を把握しますですの」

「はい」

「まず、犯人達の要求は『多重能力者^{デュアルスキル}』を呼び寄せること」

「そしてそのための人質として、雲雀ちゃんと――^{ひつこいはつめ}――を確保されます」

「それとニュースの情報によると他にも何人かいるみたいですよわね……。具体的な数字を把握できてないのは痛いですよわね」

「人質には、たぶん佐天さんも入ってると思います。雲雀ちゃんと一緒に見に行きましたから」

「もう、何から何まで最悪ですよわね。『多重能力者^{デュアルスキル}』が実在しない場合、彼らは自暴自棄になる可能性もありますし……。このまま時間が経つと人質にも危険が及ぶかもしれませんし……」

「……………」

「……………」

白井の言葉に初春は無言になる。

初春の反応に白井は一瞬しまったという表情になる。

分析の合間に自身の感想や推測を織り交ぜるなど愚策にも程がある。ましてやそれで味方の士気を落としてしまうなど、最悪としか言いようがない。

(初春に焦るな、と言っておきながら私も焦ってますのね)

「初は」「…白井さん。私、気になる事があるんです」「何ですか?」

しかし初春はきつとした表情で白井を見る。

いつもの初春とは違う何か強いものを感じた白井は、

(これじゃ、私も先輩面してられませんわね…)

と、僅かに笑みを浮かべた。

「…なるほど、それは確かに気になりますわね」

初春の言葉に白井は頷くと何かを確認しようと、背後を見る。

ふと、自分の背後で何かを呟いている御坂に気がついて声をかけた。

「お姉さま、ここから先は、「わかってるわよ。一般人は混ざんなってんでしょ?」「…わかってるなら良いですの」

言葉を遮られて白井はジト目で御坂を見る。

白井にとっていつもは信頼できる御坂だが、こういう時ばかりは信頼がおけない。

御坂自身の正義心にレベル5という立場も相まってすぐに暴走するのだ。

今回も嫌な予感がする、と白井が思っていると、

「でもね、今回ばかりは私にも噛ませなさい」

真剣な表情で御坂が予想通りの言葉を放った。

「御坂さん……」

「お姉さま、今回のような事件だからこそダメですよ。相手は本物の銃を持った本物の犯罪者。そこらのチンピラが起こした銀行強盗とはわけが違いますの」

諭す様に言う白井に御坂は言った。

「ようは『デュアルスキル多重能力者』が来れば良いんでしょう？」

「「はい？」」

2人の気の抜けた声でした。

天使の翼のように背中に純白の一对の翼を羽ばたかせて舞い降りた男に隊長は不敵な笑みを浮かべる。

「かきねていとく垣根帝督か……。それにしても遅かったじゃないか。もっと早く来るかと思っていたんだが……」

「色々下ごしらえを、な。そっちこそ、いつになったら多重能力者デュアルスキル様とやらは来るんだ？」

「すぐに来るさ。彼は来ざるを得ないのだから」

隊長は抱える雲雀を見せつける様に肩に担ぎ直すと、僅かに後ろに下がった。

「それにしても良いのか？こんな表に近い場所に君みたいな暗部が出て来てしまつて」

「なあに、だから下ごしらえをしたんだよ」

帝督の言葉に隊長は目の前のカメラを見つめた。

「……まさか」

「ああ、そのカメラはもう動いてねえ」

帝督はここに来る前に『スクール』のメンバーに指示を出して外部の通信施設を壊しておいたのだ。

故にいくらカメラが映してもそれを送る途中が無いため情報はどこにも受信されることはない。

先ほど隊長が浮かべた笑みよりも更に不敵な笑みを浮かべて帝督は一歩進む。

しかし帝督の言葉に隊長はたいして動じた様子もなく、頷いた。

「ふむ、まあ当初の目的とは少し違うからな。これくらいの障害は仕方あるまい」

「あん？負け惜しみかよ」

「そうでもないさ。これでも私たちはアドリブが聞く部隊でね。当初の目的ではどこかでこの子を攫った後はとある場所で通信施設を乗っ取るつもりだったのさ。だが、都合良くココにカメラがあったのね。使わせてもらっただけだ」

「へえ。それで？ここからどう逆転をするんだ？」

「じつやってさ」

隊長が言った瞬間、隊長ともう1人のテロリストは帝督に向けて射撃を行った。

帝督は翼で自身を守り、幾つもの銃弾が帝督をその場に押し留めていた。

しかし、それだけだった。

「何？」

ここに来て隊長の顔色が変わった。

上空を見るが、何も変化しない。

それを見る黄泉川達も何か、決定的な何かが起きたのを理解した。

「もしかして、シャッターでも使うつもりだったのか？」

「！？」

帝督の言葉に隊長は帝督の方を見る。

「だから言っただろっ？下ごしらえは済ませて来たんだってな。俺

は敵には容赦しねえんだよ」

悪戯が成功して喜ぶ子供のような笑みを浮かべて近づいて来る帝督に隊長は溜め息を吐く。

「はあ、ここでは使いたくなかったが…」

「？」

まだ何かを隠し持っている様子を見せる隊長に帝督は嫌な予感を感じると、一気に終わらせようと翼を更に1対出して、2対の翼で暴風を人質ごとテロリスト達に放った。

瞬間、

一筋の閃光が暴風を上回る爆風を伴って雲雀達に迫る暴風を貫いた。

「なに？」

「ほう、やっと来たか…」

2人視線の先、シャッターの前で黒いカッパに身を包んだ仮面の人物が立っていた。

「『デュアルスキル
多重能力者』」

八月六日 陸（後書き）

まだまだ続くぜ！

にしても、綾峰の夢って不幸すぎるよねw）原因

ちなみに綾峰はまだ夢の中ですw

それでは、また次回！ ノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9290/>

とある科学の事件体質（トラブルメーカー）

2011年2月23日01時41分発行